

# 美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ

興道寺廃寺（第9～13次調査）

下田遺跡

毛ノ鼻遺跡

竜沢寺遺跡

2012

美浜町教育委員会





興道寺廃寺周辺空中写真（南から撮影）



興道寺廃寺再建期金堂基壇北辺（北から撮影）



興道寺廃寺再建期金堂基壇北辺・西辺（西から撮影）



興道寺廃寺創建期金堂基壇東辺土層断面（南から撮影）



興道寺廃寺再建期金堂基壇北面階段（北から撮影）



興道寺廃寺再建期塔基壇西辺（南から撮影）



興道寺廃寺再建期南門基壇北東隅部石積み（北から撮影）

## 例 言

- 1 本書は、美浜町教育委員会が国庫補助金（文化庁 国宝重要文化財等保存整備費補助金）の交付を受けて実施した、美浜町内所在の興道寺廃寺、下田遺跡、毛ノ鼻遺跡、竜沢寺遺跡の存否・内容確認に伴う調査報告書である。
- 2 現地調査および整理作業は平成 19 年度から同 23 年度までの 5 年間に亘って実施した。
- 3 調査体制は以下のとおりである。

### 調査主体者

- 浅妻 保 （美浜町教育委員会教育長、平成 19 年度）  
大同 保 （美浜町教育委員会教育長、平成 20～23 年度）

### 調査事務局

- 軍場保幸 （美浜町教育委員会事務局 学校教育課長、平成 19 年度）  
西野民男 （美浜町教育委員会事務局 学校教育課長、平成 20・21 年）  
石丸好通 （美浜町教育委員会事務局 学校教育課長、平成 22・23 年）  
塩浜洋一 （美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財保護・町誌編纂室長、平成 19～21 年度）  
窪 安和 （美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財保護・町誌編纂室長、平成 22・23 年度）  
松葉竜司 （美浜町教育委員会事務局 学校教育課  
文化財保護・町誌編纂室 主事（学芸員）、平成 19～21 年度）  
文化財保護・町誌編纂室 主査（学芸員）、平成 22・23 年度）

調査担当者 松葉竜司

### 調査作業員

（平成 19 年度）

伊藤キヨ子、上野山稔、奥井新平、久保正、澤田三郎、澤田道子、竹阪卓、田邊渉、原田吉雄、  
樋口雄也、道下匠、宗石祥一、吉本正治

（平成 20 年度）

伊藤キヨ子、上野山稔、奥井新平、小平真沙代、久保正、澤田三郎、澤田道子、竹阪卓、田邊渉、  
原田吉雄、道下匠、吉本正治

（平成 21 年度）

伊藤キヨ子、上野山稔、大井幸一、奥井新平、澤田三郎、田邊渉、中井大揮、原田吉雄、味噌井拓志、  
道下匠、山崎し央倫、吉本正治

（平成 22 年度）

伊藤キヨ子、上野山稔、大井幸一、小川絢子、奥井新平、澤田三郎、田邊渉、原田吉雄、三田村沙織、  
道下匠、吉本正治

（平成 23 年度）

伊藤キヨ子、大井幸一、奥井新平、田邊渉、原田吉雄、道下匠、吉本正治

- 4 現地調査は松葉が担当した。

- 5 調査遺跡の本書への収録は遺跡毎とし、必ずしも調査年次順とはしていない。
- 6 遺物実測図の縮尺は瓦：1/5、土器・鉄製遺物・土製遺物等：1/3、塑像螺髪・銭貨：1/2とした。図中の遺物断面は須恵器・陶磁器を黒塗り、土師器・製塩土器を白抜き、塑像螺髪をトーンとした。
- 7 本書の執筆、編集は松葉が行った。
- 8 現地調査では下記の土地所有者の御理解、御協力を賜った。(敬称略)
  - 興道寺廃寺第9次調査
    - 奥井義弘、上登野稔、澤田茂次、澤田政一、田中忠三、中瀬久一、西野一夫、西野肇、山本キク
  - 興道寺廃寺第10次調査
    - 奥井健治、奥井精治、奥井義弘、久保豊吉、塚原勇、中川進、西野宏司、堀田みち子、松井宗由、向井佐登司、山本キク
  - 興道寺廃寺第11次調査
    - 奥井義弘、木子武雄、木村誠一、久保豊吉、澤田博、鳥居秀樹
  - 興道寺廃寺第12次調査
    - 奥井義弘、木村誠一、久保豊吉、澤田茂次、鳥居秀樹、南眞琴
  - 興道寺廃寺第13次調査
    - 木村誠一、久保豊吉、柴田鈴子、高城勲、鳥居秀樹、堀田みち子
- 9 現地調査・報告書作成で下記の機関・機関に御指導、御協力を賜った。(敬称略)
  - 国土地理院、独立行政法人産業技術総合研究所、文化庁文化財部記念物課、福井県教育庁文化課文化財保護室、福井県教育庁埋蔵文化財調査センター、福井県立若狭歴史民俗資料館、福井県立歴史博物館、若狭考古学研究会
    - 鯨本眞由美 (福井県立若狭歴史民俗資料館)、網谷克彦 (敦賀短期大学)、石川知彦 (龍谷ミュージアム)、市大樹 (大阪大学)、今村昌子 (美浜町文化財保護委員会)、植野浩三 (奈良大学)、上野晃 (若狭考古学研究会)、門井直哉 (福井大学)、亀田修一 (岡山理科大学)、川村俊彦 (敦賀市立博物館)、北村圭弘 (滋賀県教育委員会)、葛原秀雄 (高島市教育委員会)、工藤俊樹 (福井県教育庁文化課)、熊谷純成 (美浜町文化財保護委員会)、高正龍 (立命館大学)、小林裕季 (財団法人滋賀県文化財保護協会)、坂井秀弥 (奈良大学)、栄原永遠男 (大阪市立大学)、芝田寿朗 (福井県立若狭歴史民俗資料館)、白井忠雄 (高島市教育委員会文化財課高島資料館)、杉山拓己 (福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、杉山大晋 (福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、鈴木篤行 (福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、清野孝之 (独立行政法人奈良文化財研究所)、竹原伸二氏 (枚方市教育委員会)、橘惠慶 (美浜町文化財保護委員会)、田辺信義 (美浜町文化財保護委員会)、寺島典人 (天津市歴史博物館)、中川佳三 (福井県教育庁文化課)、西島伸彦 (小浜市教育委員会文化課)、西山要一 (奈良大学)、仁科章、畠中清隆 (福井県教育庁埋蔵文化財調査センター)、菱田哲郎 (京都府立大学)、古川登 (福井市文化財保護センター)、松川雅弘 (御食国若狭おぼま食文化館)、水野和雄、森本輝久、山口悦子 (美浜町文化財保護委員会)、山口充、山口遥介 (岡崎市教育委員会)、山中章 (三重大学)、吉永壮志 (福井県立若狭歴史民俗資料館)、山中敏史、渡辺丈彦 (独立行政法人奈良文化財研究所) (所属は本報告刊行時のものである)
- 10 出土遺物・記録類は、美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財保護・町誌編纂室 (福井県三方郡美浜町金山14-1) が保管している。



# 目 次

巻頭図版

例 言	.....	i・ii
目 次	.....	iii～vi
報告書抄録	.....	vii

## 第1章 興道寺廃寺(第9～13次調査) ..... 1

第1節 遺跡の位置と環境	.....	1
第2節 調査の経緯・経過と調査の概要	.....	12
第3節 興道寺廃寺第9～13次調査の遺構と遺物	.....	25
第4節 興道寺廃寺伽藍域の調査	.....	34
第5節 興道寺廃寺寺域の調査	.....	143
第6節 総括	.....	201

## 第2章 下田遺跡(試掘調査) ..... 239

第1節 遺跡の概要	.....	239
第2節 調査の経過、方法および内容	.....	240
第3節 総括	.....	241

## 第3章 毛ノ鼻遺跡(試掘調査) ..... 242

第1節 遺跡の概要	.....	242
第2節 調査の経過、方法および内容	.....	243
第3節 総括	.....	243

## 第4章 竜沢寺遺跡(試掘調査) ..... 244

第1節 遺跡の概要	.....	244
第2節 調査の経過、方法および内容	.....	244
第3節 総括	.....	246

写真図版

# 挿 図 目 次

第 1 図	美浜町位置図および本書収録遺跡位置図	viii	第61図	興道寺廃寺第12次調査 1 トレンチ出土遺物実測図	97
第 2 図	美浜町地質概略図	2	第62図	興道寺廃寺中門基壇土層断面図	99・100
第 3 図	興道寺廃寺周辺遺跡分布図	6	第63図	興道寺廃寺第11次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 1	101
第 4 図	興道寺廃寺現況地形測量図	17・18	第64図	興道寺廃寺第11次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 2	102
第 5 図	興道寺廃寺調査位置図	21	第65図	興道寺廃寺第11次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 3	104
第 6 図	興道寺廃寺金堂・講堂基壇遺構平面図	26	第66図	興道寺廃寺第11次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 4	105
第 7 図	興道寺廃寺塔基壇・伽藍東限遺構平面図	27	第67図	興道寺廃寺第11次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 5	106
第 8 図	興道寺廃寺中門・南門基壇遺構平面図	28	第68図	興道寺廃寺第12次調査 7 トレンチ出土遺物実測図	110
第 9 図	興道寺廃寺伽藍北限遺構平面図	29	第69図	興道寺廃寺第13次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 1	112
第10図	興道寺廃寺寺域北限遺構平面図	30	第70図	興道寺廃寺第13次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 2	113
第11図	興道寺廃寺寺域外北方遺構平面図	31	第71図	興道寺廃寺第13次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 3	114
第12図	興道寺廃寺出土瓦凸面叩き目拓影	32	第72図	興道寺廃寺第12次調査 8 トレンチ出土遺物実測図	116
第13図	興道寺廃寺金堂基壇土層断面図 1	35	第73図	興道寺廃寺講堂基壇土層断面図	117・118
第14図	興道寺廃寺金堂基壇土層断面図 2	36	第74図	興道寺廃寺中門基壇北東側土層断面図 1	119・120
第15図	興道寺廃寺金堂基壇北側望像螺髪出土位置図	37	第75図	興道寺廃寺SK110202出土状況図	122
第16図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 1	40	第76図	興道寺廃寺第11次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 1	123
第17図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 2	41	第77図	興道寺廃寺第11次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 2	124
第18図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 3	42	第78図	興道寺廃寺第 9 次調査 4 トレンチ出土遺物実測図	126
第19図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 4	43	第79図	興道寺廃寺中門基壇北東側土層断面図 2	127
第20図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 5	44	第80図	興道寺廃寺伽藍東限遺構土層断面図 1	129
第21図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 6	45	第81図	興道寺廃寺伽藍東限遺構土層断面図 2	130
第22図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 7	46	第82図	興道寺廃寺伽藍東限遺構土層断面図 3	131
第23図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 8	47	第83図	興道寺廃寺伽藍東限遺構土層断面図 4	132
第24図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 9	48	第84図	興道寺廃寺第10次調査 1 トレンチ出土遺物実測図	135
第25図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図10	49	第85図	興道寺廃寺第10次調査 2 トレンチ出土遺物実測図	138
第26図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図11	50	第86図	興道寺廃寺伽藍北限遺構平面図	140・141
第27図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図12	51	第87図	興道寺廃寺伽藍北限土層断面図	142
第28図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図13	52	第88図	興道寺廃寺第13次調査 3 トレンチ出土遺物実測図	143
第29図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図14	53	第89図	興道寺廃寺南門基壇土層断面図 1	145・146
第30図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図15	54	第90図	興道寺廃寺第11次調査11 トレンチ出土遺物実測図 1	148
第31図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図16	55	第91図	興道寺廃寺第11次調査11 トレンチ出土遺物実測図 2	149
第32図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図17	56	第92図	興道寺廃寺第11次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 6	150
第33図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図18	57	第93図	興道寺廃寺第12次調査 2 トレンチ出土遺物実測図	151
第34図	興道寺廃寺第11次調査 5 トレンチ出土遺物実測図19	58	第94図	興道寺廃寺第12次調査 4 トレンチ出土遺物実測図	153
第35図	興道寺廃寺金堂基壇北面階段平面図・立面図	61	第95図	興道寺廃寺第12次調査 3 トレンチ出土遺物実測図	153
第36図	興道寺廃寺第12次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 1	62	第96図	興道寺廃寺南門基壇土層断面図 2	154
第37図	興道寺廃寺第12次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 2	63	第97図	興道寺廃寺第13次調査 1 トレンチ出土遺物実測図	156
第38図	興道寺廃寺第10次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 1	66	第98図	興道寺廃寺第10次調査10 トレンチ出土遺物実測図	159
第39図	興道寺廃寺第10次調査 5 トレンチ出土遺物実測図 2	67	第99図	興道寺廃寺第10次調査11 トレンチ出土遺物実測図	161
第40図	興道寺廃寺第11次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 1	68	第100図	興道寺廃寺寺域北方遺構平面図 1	163・164
第41図	興道寺廃寺第11次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 2	69	第101図	興道寺廃寺第10次調査 9 トレンチ出土遺物実測図	167
第42図	興道寺廃寺第10次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 1	71	第102図	興道寺廃寺第 9 次調査 6 トレンチ出土遺物実測図	168
第43図	興道寺廃寺第10次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 2	72	第103図	興道寺廃寺第10次調査 8 トレンチ出土遺物実測図	169
第44図	興道寺廃寺第10次調査 6 トレンチ出土遺物実測図 3	73	第104図	興道寺廃寺寺域北方遺構平面図 3	170
第45図	興道寺廃寺第10次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 1	76	第105図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 1	171
第46図	興道寺廃寺第10次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 2	77	第106図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 2	172
第47図	興道寺廃寺第10次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 3	78	第107図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 3	173
第48図	興道寺廃寺塔基壇土層断面図 1	81	第108図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 4	174
第49図	興道寺廃寺塔基壇土層断面図 2	82	第109図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 5	175
第50図	興道寺廃寺第11次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 1	83	第110図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 6	176
第51図	興道寺廃寺第11次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 2	84	第111図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 7	177
第52図	興道寺廃寺第11次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 3	85	第112図	興道寺廃寺寺域北方土層断面図 8	178
第53図	興道寺廃寺第11次調査 3 トレンチ出土遺物実測図	87	第113図	興道寺廃寺第10次調査 7 トレンチ出土遺物実測図	179
第54図	興道寺廃寺第 9 次調査 2 トレンチ出土遺物実測図	90	第114図	興道寺廃寺第11次調査 7 トレンチ出土遺物実測図	181
第55図	興道寺廃寺 中門基壇西側再建期整地層 断削平面図・土層断面図	91	第115図	興道寺廃寺第12次調査 9 トレンチ出土遺物実測図	182
第56図	興道寺廃寺第 9 次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 1	92	第116図	興道寺廃寺寺域北限土層断面図 1	185
第57図	興道寺廃寺第 9 次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 2	93	第117図	興道寺廃寺寺域北限土層断面図 2	186
第58図	興道寺廃寺第 9 次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 3	94	第118図	興道寺廃寺第 9 次調査 8 トレンチ出土遺物実測図	190
第59図	興道寺廃寺第 9 次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 4	95	第119図	興道寺廃寺第 9 次調査 9 トレンチ出土遺物実測図	193
第60図	興道寺廃寺第 9 次調査 1 トレンチ出土遺物実測図 5	96	第120図	興道寺廃寺寺域外北方遺構平面図 2	194
			第121図	興道寺廃寺寺域外北方土層断面図 1	195

## 挿 図 目 次

第122図	興道寺廃寺寺域外北方土層断面図2	196	第129図	興道寺廃寺遺構消長模式図	213
第123図	興道寺廃寺寺域外北方土層断面図3	197	第130図	興道寺廃寺遺構変遷模式図	214・215
第124図	興道寺廃寺第9次調査10トレンチ出土遺物実測図	198	第131図	下田遺跡調査位置図	239
第125図	興道寺廃寺第10次調査12トレンチ出土遺物実測図	199	第132図	下田遺跡試掘調査トレンチ平面・土層断面図	241
第126図	興道寺廃寺伽藍域・寺域遺構平面模式図	205・206	第133図	毛ノ鼻遺跡調査位置図	242
第127図	興道寺廃寺出土軒瓦	207	第134図	竜沢寺遺跡調査位置図	245
第128図	興道寺廃寺出土遺物時期別変遷図	210			

## 別 添 図 目 次

別添第1図	興道寺廃寺金堂基壇遺構平面図	別添第6図	興道寺廃寺伽藍東限遺構平面図
別添第2図	興道寺廃寺塔基壇遺構平面図	別添第7図	興道寺廃寺南門基壇遺構平面図
別添第3図	興道寺中門基壇遺構平面図	別添第8図	興道寺廃寺寺域北方遺構平面図
別添第4図	興道寺廃寺講堂基壇遺構平面図	別添第9図	興道寺廃寺寺域北限遺構平面図
別添第5図	興道寺廃寺中門基壇北東側遺構平面図	別添第10図	興道寺廃寺寺域外北方遺構平面図

## 表 目 次

第1表	興道寺廃寺周辺遺跡一覧	7	第12表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(1)	229
第2表	興道寺廃寺・興道寺遺跡における既往の調査一覧	15	第13表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(2)	230
第3表	興道寺遺跡第9～13次調査概要一覧	20	第14表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(3)	231
第4表	興道寺廃寺調査関連普及啓発事業実施一覧	22	第15表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(4)	232
第5表	興道寺廃寺基壇建物一覧	202	第16表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(5)	233
第6表	興道寺廃寺第9～13次調査出土遺物観察表(1)	223	第17表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(6)	234
第7表	興道寺廃寺第9～13次調査出土遺物観察表(2)	224	第18表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(7)	235
第8表	興道寺廃寺第9～13次調査出土遺物観察表(3)	225	第19表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(8)	236
第9表	興道寺廃寺第9～13次調査出土遺物観察表(4)	226	第20表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(9)	237
第10表	興道寺廃寺第9～13次調査出土遺物観察表(5)	227	第21表	興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表(10)	238
第11表	興道寺廃寺第9～13次調査出土遺物観察表(6)	228	第22表	興道寺廃寺第9～13次調査出土塑像螺髪一覧表	238

## 写 真 目 次

巻頭図版1	上 興道寺廃寺周辺空中写真	本文写真1	耳川流域空中写真	1
	下 興道寺廃寺再建期金堂基壇北辺	本文写真2	興道寺廃寺周辺空中写真	3
巻頭図版2	興道寺廃寺再建期金堂基壇北辺・西辺	本文写真3	興道寺廃寺試掘調査	12
巻頭図版3	上 興道寺廃寺創建期金堂基壇東辺土層断面	本文写真4	第7回興道寺廃寺調査会議	19
	下 興道寺廃寺再建期金堂基壇北面階段	本文写真5	平成23年度歴史フォーラム	22
巻頭図版4	上 興道寺廃寺再建期塔基壇西辺	本文写真6	第10次調査現地説明会	22
	下 興道寺廃寺再建期南門基壇北東隅部石積み	本文写真7	第12次調査現地説明会	22

# 写真図版目次

写真図版1	興道寺廃寺現況（興道寺廃寺周辺空中写真）
写真図版2	興道寺廃寺金堂基壇の調査（第11次調査5トレンチ全景、再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況、再建期金堂基壇北側堆積層遺物出土状況1～4、再建期金堂基壇北側堆積層塑像螺髪出土状況1、再建期金堂基壇北面階段）
写真図版3	興道寺廃寺金堂基壇の調査（再建期金堂基壇北側整地断面断割南北土層断面、第12次調査6トレンチ全景、再建期金堂基壇北面階段・再建期講堂基壇南辺位置関係、再建期金堂基壇北側堆積層塑像螺髪出土状況2、再建期金堂基壇東辺（、創建期・再建期金堂基壇断割東西土層断面、再建期金堂基壇東辺）
写真図版4	興道寺廃寺金堂基壇の調査（創建期・再建期金堂基壇断割東西土層断面、創建期金堂基壇断割東西土層断面、創建期・再建期金堂基壇整地断面断割東西土層断面、第11次調査6トレンチ全景、再建期金堂基壇西辺、再建期金堂基壇北西整地断面、再建期金堂基壇北西石列、第10次調査04トレンチ全景）
写真図版5	興道寺廃寺金堂基壇・塔基壇の調査（SD100401、再建期金堂基壇南西整地断面断割南北土層断面1・2、創建期・再建期塔基壇東辺、創建期・再建期塔基壇）
写真図版6	興道寺廃寺塔基壇の調査（再建期塔基壇西辺1～3、P110402・P110406、P110409、SK110401、SK110401塑像螺髪出土状況、再建期塔基壇東側堆積層土層断面）
写真図版7	興道寺廃寺塔基壇・中門基壇の調査（創建期・再建期塔基壇東西土層断面1～3、第11次調査3トレンチ全景、SD110301南北土層断面、SK110301土層断面、第9次調査2トレンチ）
写真図版8	興道寺廃寺中門基壇の調査（再建期中門基壇北東隅部、再建期中門基壇北東隅部東辺石積み、SK090204、再建期中門基壇西側整地断面、再建期中門基壇西側堆積層遺物出土状況、再建期中門基壇西側整地断面断割土層断面）
写真図版9	興道寺廃寺中門基壇の調査（第12次調査1トレンチ全景、再建期中門基壇北西側整地断面断割南北土層断面、SD110101・再建期整地断面、再建期中門基壇西側攪乱坑、SD110101検出状況）
写真図版10	興道寺廃寺中門基壇の調査（SD110101、SD110101・再建期整地断面断割南北土層断面、再建期中門基壇西側整地断面断割土層断面、再建期中門基壇北側南北土層断面、再建期中門基壇北側東西土層断面、第12次調査05トレンチ全景、SK120501土層断面）
写真図版11	興道寺廃寺講堂基壇の調査（創建期講堂基壇東辺、創建期講堂基壇西辺付近、SD111101土層断面、創建期講堂基壇南辺、第12次調査7トレンチ全景）
写真図版12	興道寺廃寺講堂基壇の調査（再建期講堂基壇南辺、再建期講堂基壇南辺断割南北土層断面1・2、第13次調査2トレンチ全景、再建期講堂基壇南西隅部）
写真図版13	興道寺廃寺講堂基壇の調査（再建期講堂基壇西辺土層断面、創建期・再建期講堂基壇西辺断割土層断面、創建期・再建期講堂基壇西辺断割、創建期講堂基壇北辺）
写真図版14	興道寺廃寺講堂基壇・中門基壇北東側の調査（創建期講堂基壇北辺断割南北土層断面1・2、第11次調査2トレンチ西側、第11次調査2トレンチ南側、SH110201、SK110202、SK110202遺物出土状況、第9次調査3トレンチ全景）
写真図版15	興道寺廃寺中門基壇北東側・伽藍東限の調査（第9次調査4トレンチ全景、SB090401、SB090401土層断面、SB090401遺物出土状況、SA090401、SK090401土層断面、第10次調査1トレンチ北側、SB100101・SB100201）
写真図版16	興道寺廃寺伽藍東限の調査（SB100201、SB100101土層断面、SB100201-SD1、SB100201床面、SB100102、SK100101・SK100102・SK100106、SK100103土層断面、SK100104土層断面）
写真図版17	興道寺廃寺伽藍東限・南門基壇の調査（第10次調査3トレンチ全景、第13次調査3トレンチ全景、SD130301、SD130301土層断面、第11次調査11・12トレンチ全景）
写真図版18	興道寺廃寺南門基壇の調査（再建期南門基壇1・2）
写真図版19	興道寺廃寺南門基壇の調査（再建期南門基壇礫層、再建期南門基壇検出状況、再建期南門基壇北側攪乱坑、再建期南門基壇断割南北土層断面、再建期南門基壇北西隅部石積み1）
写真図版20	興道寺廃寺南門基壇の調査（再建期南門基壇北西隅部石積み2・3、再建期南門基壇西側整地断面断割南北土層断面、12次調査2トレンチ全景、再建期南門基壇北西隅部検出状況、再建期南門基壇南西隅部、再建期南門基壇西辺、再建期南門基壇北西隅部）
写真図版21	興道寺廃寺南門基壇の調査（再建期南門基壇西辺、再建期南門基壇北西隅部石積み1～3、再建期南門基壇西辺断割東西土層断面、SD111201土層断面、再建期南門基壇南東側整地断面断割東西土層断面1）
写真図版22	興道寺廃寺南門基壇の調査（再建期南門基壇南東側整地断面断割東西土層断面2、P120406土層断面、第13次調査01トレンチ、第13次調査01トレンチ、再建期南門基壇南方整地断面断割南北土層断面、再建期南門基壇南方整地断面断割東西土層断面）
写真図版23	興道寺廃寺寺域北方の調査（第10次調査10・11トレンチ東側、第10次調査10トレンチ南側、SH101001・SH101101、SH101101柱穴並び、P101035、第9次調査5トレンチ全景、SH100901・SA100901、SD100901・SD100902）
写真図版24	興道寺廃寺寺域北方・寺域北限の調査（SK090601、第10次調査7トレンチ全景、第9次調査11トレンチ西側、第9次調査11トレンチ東側、SD110701、SD110701土層断面）
写真図版25	興道寺廃寺寺域北限の調査（第11次調査7トレンチ全景、第12次調査9トレンチ全景、SD110701遺物出土状況、SD120901出土状況、SD120901土層断面、第11次調査8トレンチ全景）
写真図版26	興道寺廃寺寺域北限の調査（SD120901、第11次調査10トレンチ全景、第13次調査4トレンチ、第13次調査6トレンチ全景）
写真図版27	興道寺廃寺寺域外北方の調査（第9次調査7・8トレンチ全景、第9次調査8トレンチ全景、SB090801、SB090802、SB090802-SK1・SK2、SK090801～SK090805）
写真図版28	興道寺廃寺寺域外北方の調査（SK090801土層断面、SK090802土層断面、SK090803、SK090803礫検出状況、SK090804土層断面、SK090805土層断面、第9次9トレンチ南側、SK090901遺物出土状況）
写真図版29	興道寺廃寺出土遺物（第16図8・10・11・18・19・20・22・23、第17図26・27・28、第18図32凹面・33～36・39・40・45）
写真図版30	興道寺廃寺出土遺物（第18図50、第19図57、第20図58・59、第21図70・71、第22図73）
写真図版31	興道寺廃寺出土遺物（第22図76、第23図85、第24図97、第25図98～100・104・105、第27図118）
写真図版32	興道寺廃寺出土遺物（第26図113、第28図121・129・130、第29図140、第30図144）
写真図版33	興道寺廃寺出土遺物（第28図128、第30図146・148、第33図174・178・182、第36図4）
写真図版34	興道寺廃寺出土遺物（第36図8～10・14、第37図17・25、第39図5・6・13）
写真図版35	興道寺廃寺出土遺物（第39図7、第40図2・10、第41図20、第42図3～5、第43図5・11・15、第46図16）
写真図版36	興道寺廃寺出土遺物（第45図14・15、第46図21、第47図3・6・9、第50図3・4・6・14）
写真図版37	興道寺廃寺出土遺物（第51図21・22、第53図8・9、第56図6・7・11・20・19・21・23・25・26、第57図28・29・31・32・36・38、第59図8）
写真図版38	興道寺廃寺出土遺物（第57図39、第59図15、第63図8、第64図7、第68図1～3、第69図14、第71図2～5・8・9・12凸面、第76図1・2、第78図1）
写真図版39	興道寺廃寺出土遺物（第85図5、第91図25・26、第98図8・9、第99図3、第114図6、第115図1・4・6・7、第119図1、第17図29～31 第34図187 第52図35 第68図4、第69図8 第71図29～31 第85図8）
写真図版40	下田遺跡（試掘調査）・毛ノ鼻遺跡（試掘調査）・竜沢寺遺跡（試掘調査）（下田遺跡土坑1検出状況、下田遺跡土坑1土層断面・遺物出土状況、下田遺跡土坑1出土製塩土器、毛ノ鼻遺跡試掘調査1トレンチ～7トレンチ、竜沢寺遺跡試掘調査土層断面、竜沢寺遺跡試掘調査地山面検出状況）

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	みはまちょうないいせきはくつちょうさほうこくしょ さん							
書 名	美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ							
副 書 名								
シリーズ名	美浜町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第8集							
編著者名	松葉竜司							
編集機関	美浜町教育委員会							
所在地	〒919-1192 福井県三方郡美浜町郷市25-25 TEL0770-32-6709							
資料保管場所	美浜町教育委員会事務局 学校教育課 文化財保護・町誌編纂室							
	〒919-1145 福井県三方郡美浜町金山14-1 TEL0770-32-0027							
発行年月日	西暦2012年（平成24年）3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
こうどうじはいじ 興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうこうどうじ 美浜町興道寺	18442	30071 (30073)	35度 35分 52秒	135度 56分 39秒	070820 - 110930	1,601.7	内容確認調査 (第9～13次調査)
しただいせき 下田遺跡 (試掘調査)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうさた 美浜町佐田	18442	30031	35度 37分 49秒	135度 58分 59秒	070709 - 070710	28	建物新築に伴う 存否・内容確認調査
けのはないせき 毛ノ鼻遺跡 (試掘調査)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうさた 美浜町佐田	18442	30034	35度 37分 38秒	135度 59分 2秒	070710 - 070711	28	建物新築に伴う 存否・内容確認調査
りゅうたくじいせき 竜沢寺遺跡 (試掘調査)	ふくいけんみかたぐん 福井県三方郡 みはまちょうかなやま 美浜町金山	18442	30092	35度 35分 46秒	135度 54分 48秒	070712 - 070713	40	建物新築に伴う 存否・内容確認調査
所収遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
興道寺廃寺 (興道寺遺跡)	古代寺院 (集落跡)	白鳳～平安 (弥生～中世)		古代寺院に伴う 建物基壇など		須恵器、土師器、製塩土 器、瓦、塑像螺髪、鉄製 品、銭貨など		大きく2時期からなる古 代寺院であることが判明
下田遺跡	散布地	縄文・古墳～平安		土坑		製塩土器		製塩土器を伴う大型方形 土坑を検出
毛ノ鼻遺跡	散布地	弥生～中世		-		-		-
竜沢寺遺跡	散布地	弥生・古墳		-		-		-
要 約	<p>興道寺廃寺の内容確認調査は平成14年(2002)に着手し、本報告の段階で第13次調査を終えた。本書に収録した調査は伽藍域、寺域の様相確認のために5年間に渡って実施した第9～13次調査である。</p> <p>興道寺廃寺は創建期、再建期と大きく2時期からなる古代寺院であることが判明し、特に8世紀後半から9世紀にかけての再建期の前後には連続的な堂塔の建て替えがあり、この時期には本格的な伽藍を備えた寺院であったことが明らかとなった。福井県内では初めての出土となった塑像螺髪は塑像如来仏が本尊として安置されたことを示しており、「耳」墨書須恵器の出土は寺院建立氏族の背景を探る上で貴重な資料である。副次的な成果としては6世紀前半の大型掘立柱建物跡を検出したことは寺院建立前夜の在地首長層の動向を考える上で重要な発見となった。</p>							



第1図 美浜町位置図（縮尺任意）および本書収録遺跡位置図（縮尺1/150,000）

# 第1章 興道寺廃寺（第9～13次調査）

## 第1節 遺跡の位置と環境

### 第1項 美浜町の地勢と地形・地質概況

#### A. 美浜町の地勢

美浜町は福井県三方郡に属し、北陸地方の最西部にあたる若狭地方の中では東部に位置する。南北約27km、東西約19km、面積約152.32平方kmを測り、町域の東側の敦賀半島、西側の常神半島が北に突き出るため、上空から見れば鶴が羽を伸ばした形である。北は日本海（若狭湾）に臨み、南は滋賀県高島市（旧今津町・マキノ町）、東は敦賀市、西は若狭町（旧三方町）と接する。

土地利用の形態は、平成22年1月1日現在の統計で水田952.6ha、畑129.8ha、宅地265.8ha、山林4,236.0ha、原野87.0haである。町域の中南部は急峻な野坂山地帯となり、東部、西部は半島の山間部が連なるなど町域の大部分は山地や丘陵地からなり、市街地や農地が見られる平野部は美浜町中央域の耳川中下流域、東部域の敦賀半島西岸の基部付近、西部域の久々子湖周辺など、若狭湾に面する町域の北側に限定的に見られるに留まる。

昭和29年(1952)8月31日に14,826人を数えた町の人口も、平成23年12月1日現在で10,634人(外国人含む)となっている。北陸地方は総じて積雪量の多い地域であるが、若狭地方は比較的温暖で積雪量も多くない。

#### B. 美浜町の地形・地質概況

山地部の地質は、敦賀半島域と耳川左岸域に花崗岩が主体的に分布する。前者は敦賀半島および敦賀市黒河川上流にも露頭する江若花崗岩、後者が雲谷山周辺に露出する雲谷山花崗岩である。一方、敦賀半島基部の周辺、耳川右岸域、常神半島域ではわずかに花崗岩の分布が見られるのみで、総じて砂岩、チャートが多く分布している。耳川右岸上流部と常神半島基部から西の若狭町にかけては緑色岩の占める割合が高くなる。

町の中央域を北に向かって直線的に流れる耳川流域は、中流域の新庄付近で高位河岸段丘が発達し、河道に沿ってこの段丘面が下流に向かって細長く伸びている。標高約40mの野口付近から北に向かって下流域となり、扇状地性の沖積地が標高約6mまで約0.9%の傾斜をもって標高が低下する。一方で、野口から興道寺にかけての左岸の下流域には中流域の高位河岸段丘から連続する形で、興道寺面と呼ばれる低位河岸段丘が北に向けて細長く伸びており、耳川に対して比高差5～10mの段丘崖を向けている。この低位河岸段丘の構成層は花崗岩、緑色岩などの砂礫層からなり、最上部に約29,000年前の広域テフラのAT(始良TN火山灰)を挟んでいる。この低位段丘は郷市付近でラグーン(潟湖)状の低地面と交差して埋没し、洪水山まで至っている。

耳川下流域の右岸には御岳山から洪水山に向けて舌状に河岸段丘地形が分布していたものと考えられるが、基本的には埋没段丘であったため現地地形から把握しがたい。しかし、結果として下流域では河川が両岸の低位河岸段丘に挟まれたため、完新世以降の河川氾濫はこの低位河岸段丘に遮られたことによって限定的となり、耳川に沿って小規模な自然堤防、後背湿地、旧河道が分布するに留まっている。かつては耳川旧河道の痕跡も多く見られたが、昭和期の土地改良事業によってその多くが消失した。

耳川河口部の左岸には2条の浜堤が食い違う形で南北に並列して位置するが、南側の浜堤には7世紀の土器製塩遺跡、松原遺跡が所在し、原始古代のこの浜堤背後には久々子湖と連続する湖沼性環境、すなわちラグーンが展開したものと考えられる。

美浜町の西部域には矢筈山北端の丘陵部から派生する気山層と呼



写真1 耳川流域空中写真(北から)  
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター提供

ばれる中位段丘が久々子湖東側にあり、段丘の構成層の下部は粘性土、上部は礫層からなる。三方五湖や若狭湾に面して小海岸段丘が分布するが、御岳山・天王山を隔てた美浜町東部域には敦賀半島西岸の基部付近の佐田から菅浜にかけて礫層からなる低位海岸段丘が面的に広がっている。なお、耳川低位河岸段丘、町の西部域の中位段丘、同じく東部域の低位海岸段丘は、町域の平野部の中でも面的な広がりをもつ主要な段丘面であり、弥生時代後期以後、遺跡の展開を促し、各時代の遺跡を積層して現在の集落形成まで至るという特性がある。

敦賀半島西岸では海岸部に沿って砂洲、浜堤が形成され、後背湿地、ラグーンが発達した小沖積地が分布する。

## 第2項 興道寺廃寺周辺の地理的環境

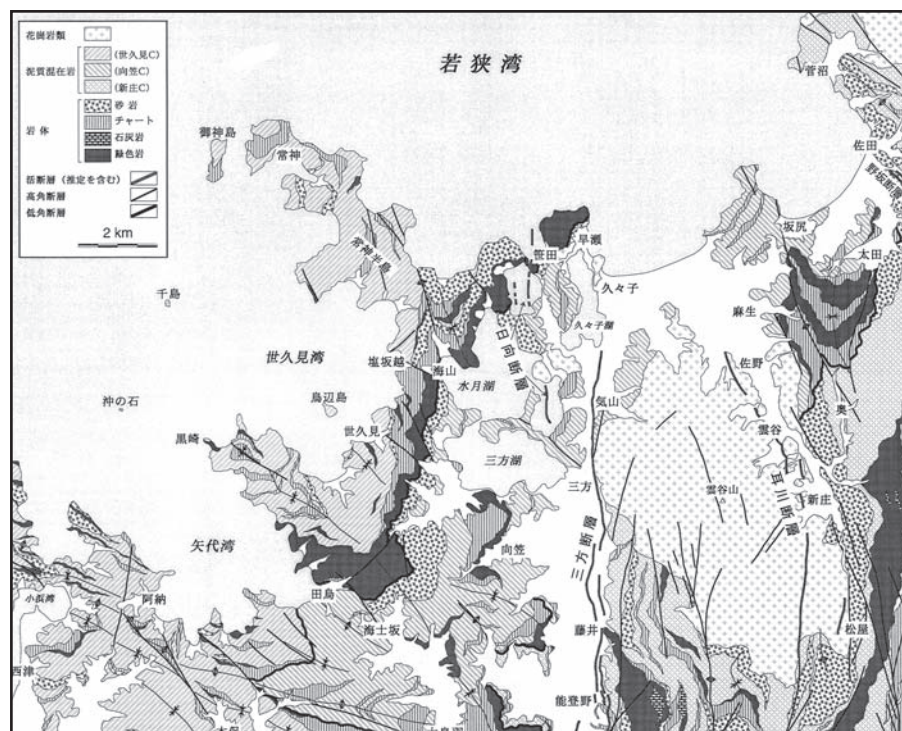
### A. 興道寺廃寺の位置と周辺の微地形

興道寺廃寺（福井県遺跡番号 30071）は北緯 35 度 35 分 52 秒、東経 135 度 56 分 39 秒の福井県三方郡美浜町興道寺 4 号小字観音 1 番地ほかに所在する（第3図・写真2-①）。

JR小浜線美浜駅から南に100mほど歩き、美浜駅前の交差点を左折して国道27号に合流する。左手に獅子塚古墳を見ながら220mほど東進し、美浜町役場前の交差点を右折し、美浜町役場や美浜町保健福祉センターを右手に見ながら町道金安線を800mほど南進すると、左前方に茶畑などからなる高台と1軒の民家が見えてくる。信号がない里道との交差点を左折し、100mほど歩くと、興道寺廃寺が所在する畑地が南北に広がっており、民家の向かいの土地の高まりが金堂基壇である。

興道寺廃寺は耳川下流域の左岸に広がる低位河岸段丘のうち、標高約23~25m付近、東縁の微高地に立地する。前節で概述したが、この低位河岸段丘は野口付近から下流に向けて雲谷山系の支尾根の東斜面に沿うように細長く伸び、興道寺の日吉神社が所在する最北部の支尾根からさらに下流に向けて段丘面が東西にやや広がりをもつ。

写真2の空中写真は、美浜町興道寺付近を撮影したものに小字の字界を重ねたものである。興道寺廃寺の位置が写真2-①、耳川の流れが写真2-②、左岸に広がる低位河岸段丘の範囲が写真2-③である。現在の興道寺集落が所在するあたりでは比較的安定した段丘面をもつが、段丘の中央部付近を自然流路が開析したようで、町道金安線付近、その中でも特に興道寺農業研修センターから美浜町役場をつなぐあたりが低地帯（写真2-④）



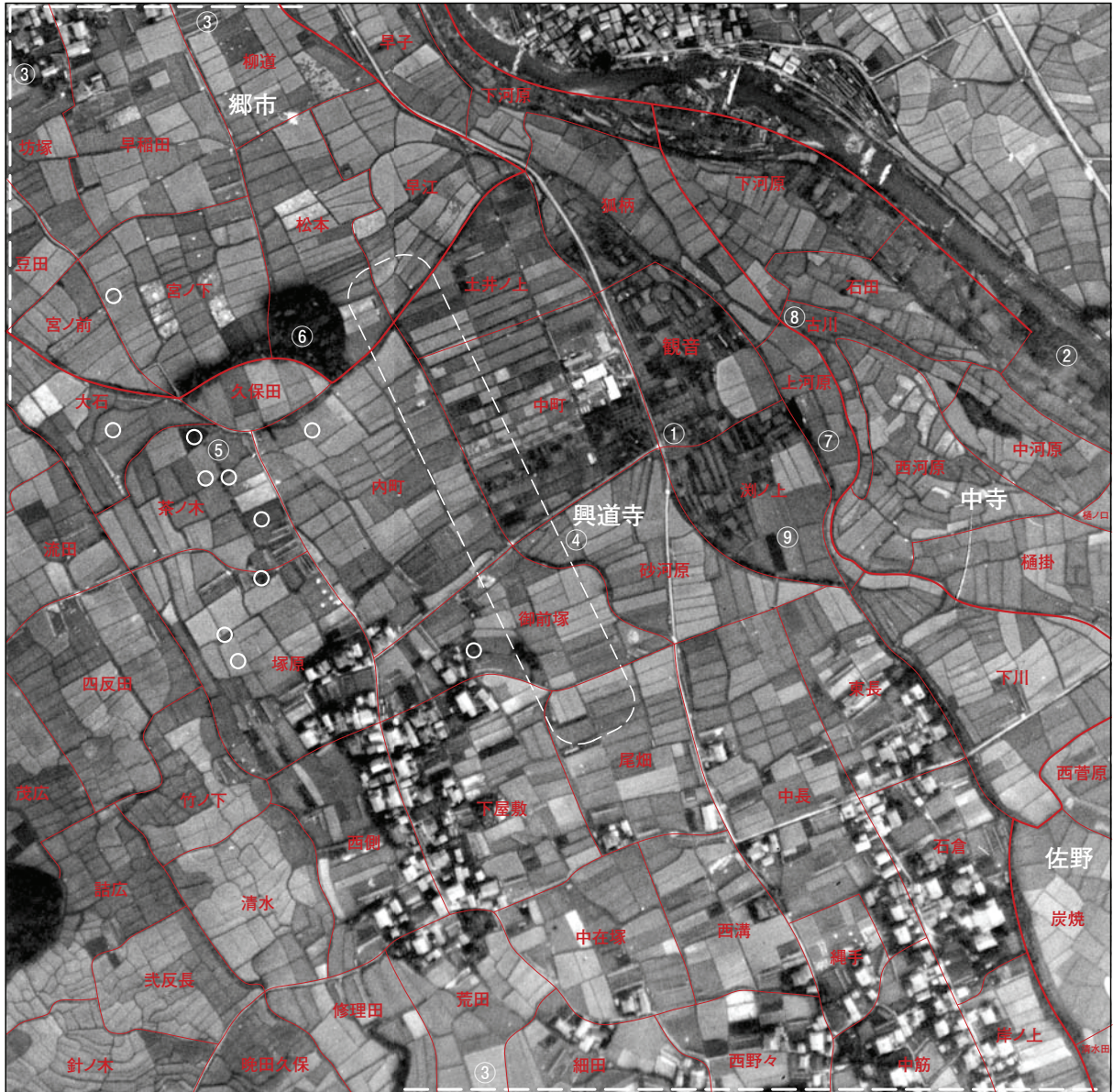
第2図 美浜町地質概略図（縮尺 1/200,000） 利用許諾承認番号 第60635500-A-20120116-001号

独立行政法人産業技術総合研究所地質調査総合センター『地域地質研究報告（5万分の1地質図解編） 西津地域の地質』2002



となり、その東西が微高地状に安定した河岸段丘面が残る地形となっている。この東西の微高地のうち、東側の小字観音、淵ノ上、中町、土井ノ上の付近に興道寺廃寺や6世紀以後の集落が、西側の小字御前塚、塚原、内町、茶ノ木、大石、宮ノ下の付近に興道寺古墳群（写真2-⑤）が立地し、小字松本、宮ノ下に式内社の伊牟移神社（写真2-⑥）が所在する。

興道寺廃寺が立地する地点を起点として東西に横断する形で微地形を見ると、まず興道寺廃寺が所在する興道寺小字淵ノ上・観音付近に、現在の地表面の標高が約24~26mからなるまとまった微高地（段丘東縁微高地）が広がる。興道寺廃寺の東縁部は河岸段丘の東側段丘崖（写真2-⑦）と面し、標高差3mほどの崖下から現在の耳川河道面に向かっては耳川の扇状地性の沖積地が広がっているが、中寺小字古川・中河原に時期不明の旧河



**凡例**

- ・米軍撮影空中写真を使用した。
- ・耳川左岸域は、昭和50年代前半の土地改良時以前の小字図を参考に字名・字界を赤文字・赤線で示した。
- ・数字の凡例は以下のとおりである。
  - ①興道寺廃寺所在地
  - ②耳川(現河道)
  - ③耳川下流域左岸の低位河岸段丘の範囲
  - ④河岸段丘上の低地帯
  - ⑤興道寺古墳群所在地(写真中に古墳の箇所を○で示した)
  - ⑥伊牟移神社
  - ⑦河岸段丘崖
  - ⑧耳川旧河道
  - ⑨土地改良時の畑地削平箇所

写真2 興道寺廃寺周辺空中写真〔米軍撮影空中写真を使用〕

この空中写真は、国土地理院長の承認を得て、米軍撮影の空中写真を複製したものである。(承認番号 平23情復 第698号)

道の痕跡（写真2一⑧）が少なくとも昭和50年代前半の土地改良時までには遺存したようである。

一方、興道寺廃寺から西側にかけては興道寺小字中町・土井ノ上の付近で標高が緩やかに低下し、現在の町道金安線付近の興道寺小字中町・内町・御前塚の境界付近で段丘東縁微高地面から標高1mほどの比高差をもつ低地帯が南北方向に延びる。さらに西側、興道寺小字内町・塚原・茶ノ木・御前塚の付近で興道寺古墳群が立地する段丘西縁の微高地（段丘西縁微高地）と緩やかに続き、河岸段丘面西側の段丘崖を経て興道寺小字四段田・流田の付近で後背湿地の低地帯へと至る地形となっている。

## B. 興道寺廃寺の現況

興道寺廃寺の現況は数軒の民家が建っているが、基本的には畑地である。巻頭図版1および写真図版1の写真は平成19年冬にそれぞれ興道寺廃寺の南方、真上の上空から撮影した遺跡の現況空中写真で、水田に囲まれ、寺院跡がそのまま畑地として残されている状況が確認できる。土地改良時に畑地の西縁と南縁が削平され、水田へと姿を変えたことが写真2の米軍撮影写真との対比から分かる。

第4図は平成19年冬に興道寺廃寺が所在する畑地を現況地形測量した際の測量図である。図中、畑地の南西あたりに道路に面して1軒の民家が建つが、この民家の東側で中門基壇が確認されており、ここから北側に向かって伽藍があり、基壇の微起伏を反映した等高線の乱れが確認できる。これまで、この付近に認められる地形の微起伏によって金堂や塔などの主要堂塔の建物基壇が遺存する可能性が漠然と指摘され、付近では畑地の境界として大石が配置され、また石積みされている状況も認められる。寺院の建物基壇が比較的地表面に表出していると言えよう。なお、土地改良事業実施時に礎石状の大石が運び出されたことを伝え聞かすが、詳細は不明である。

## 第3項 興道寺廃寺周辺の歴史的環境

### A. 興道寺廃寺周辺の旧石器時代～古墳時代中期遺跡

旧石器時代、縄文時代の遺跡は、これまで確認されていない。

弥生時代の遺跡は、南伊夜山銅鐸出土地（第3図・第1表-14）、寄戸遺跡（46）、興道寺遺跡（8）などがある。

海拔約30mの山麓に立地する南伊夜山銅鐸出土地から総高42.6cmの扁平鈕式六区袈裟襷文銅鐸が一口不時発見された。弥生中期後半の所産で、緑青の進行や鱗の磨耗から銅鐸が横位に埋納されていたこと、鈕孔の擦れた痕跡や内面下部の突帯に舌が当たった痕跡がなく、いわゆる見る銅鐸であったこと、型式・文様構成から瀬戸内から南近畿の広範囲に分布する銅鐸と同グループに属するが、製作地は瀬戸内地方東部にあった可能性が高く、香川県善通寺市出土多和神社銅鐸と類似すること、X線撮影によって鈕に鑄掛け（足掛かり穴）による修理痕が確認されたことなどが判明している[福井県埋蔵文化財調査センター2005、仁科2009など]。

南伊夜山出土銅鐸とほぼ同時期の所産と考えられるものに、個人蔵の寄戸遺跡出土石剣がある。全長19.1cmで、粘板岩質で両面に鎬が見られる。若狭地方では小河川の流域単位に銅鐸と銅剣形石剣など武器形青銅器模倣品が祭器としてセットで存在し、その具体的な使用方法は流域単位ごとに選択されていたという様相がうかがえ、南伊夜山出土銅鐸と寄戸出土石剣を用いた祭祀を執行した拠点集落が耳川中下流域に存在した可能性が指摘されている[廣嶋1986など]。

興道寺遺跡では丹後系の甕、壺、高杯、器台など弥生後期から古墳時代初頭の土器が出土する[福井県埋蔵文化財調査センター2003、山口1984など]。

興道寺遺跡以後、古墳時代前中期の遺跡動向は不明で、興道寺遺跡で古墳時代中期の土師器甕・椀がわずかに出土するに留まる[美浜町教育委員会2003]。尾根上に5基の墳丘状の盛土が並ぶ木野古墳群（30）、尾根上に前方後円墳の墳丘状の盛土をもつ土井山古墳（13）が古墳時代前期・中期に伴う古墳の可能性はある。

## B. 興道寺廃寺周辺の古墳時代後期遺跡

興道寺遺跡、藤ノ木遺跡（6）、上野遺跡（20）、秋名古遺跡（37）などは古墳時代後期の集落遺跡である。

興道寺遺跡では、興道寺廃寺周辺から TK43～TK209 型式並行期の竪穴建物跡 2 棟がこれまでに検出されていたが、平成 19 年度(2007)以後の興道寺廃寺の一連の調査の中で、6 世紀前半、TK10～TK209 型式並行期の掘立柱建物跡、竪穴建物跡が検出され、興道寺廃寺内外での検出数は掘立柱建物跡 5 棟、竪穴建物跡 3 棟に至った。藤ノ木遺跡は獅子塚古墳の南西に立地し、6 世紀前葉、MT15～TK10 型式並行期の竪穴建物跡 1 棟が断片的に検出され、須恵器杯蓋、甕、浜瀬ⅡA 式に類する製塩土器容器などが出土した[美浜町教育委員会 2003 など]。これらの集落は耳川下流域の在り地小首長層であった獅子塚古墳の被葬者層に関わる集団の一集落と評価される。

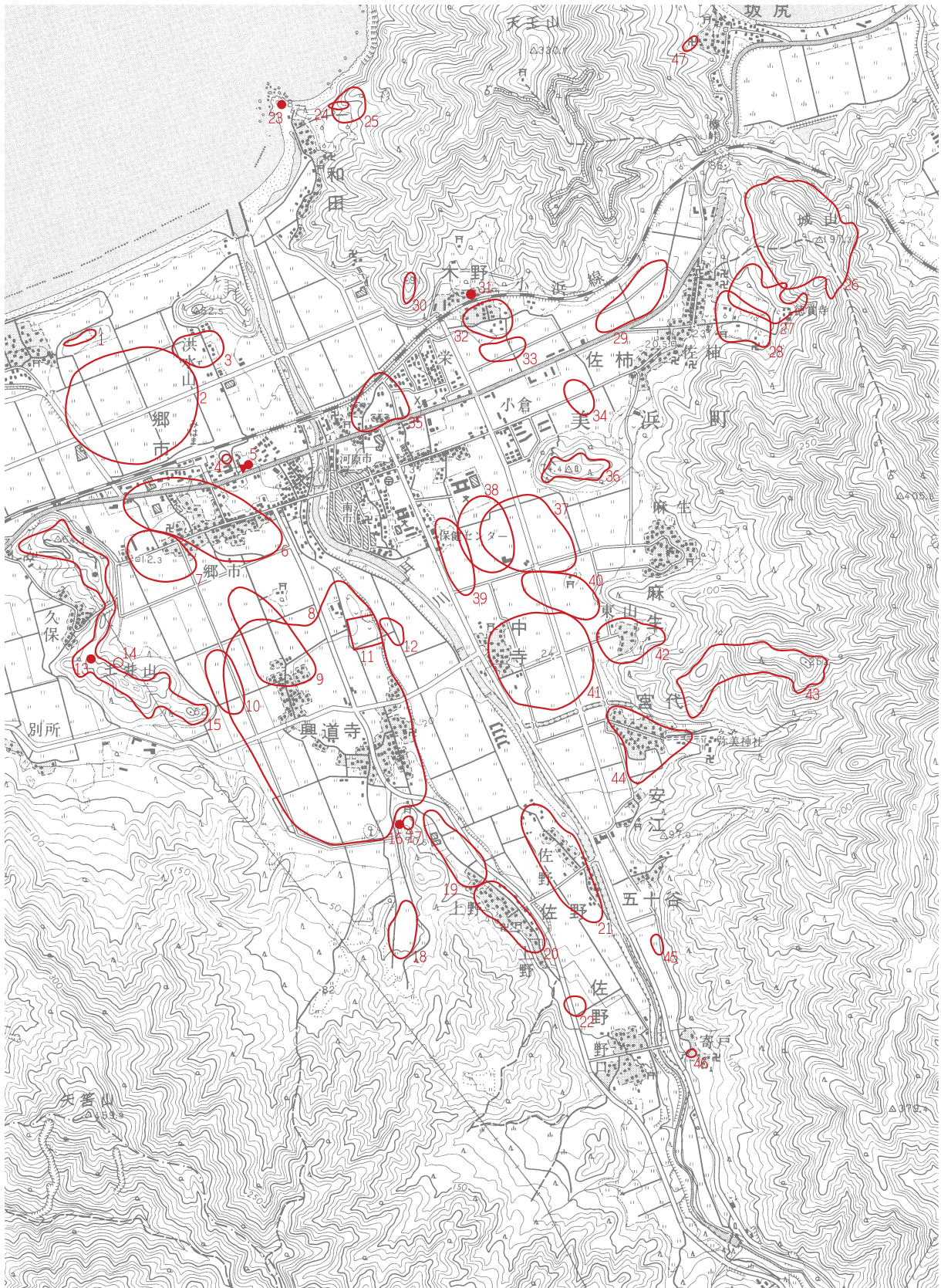
耳川流域での土器製塩の開始は浜瀬ⅡA 式の並行期である 5 世紀後半から 6 世紀前半頃と考えられ、土器製塩遺跡自体は未発見であるが、内陸部の興道寺遺跡や藤ノ木遺跡から浜瀬ⅡA 式に類する製塩土器が出土する。古墳時代後期の土器製塩遺跡として松原遺跡（1）などがある。松原遺跡は耳川左岸河口部の浜堤に立地し、敷石炉 2 基、土器溜 3 ヶ所 9 基、配石帯 1 基、土製模造品集中分布域などが検出され、土器溜から器壁 1 cm 前後の厚手の浜瀬ⅡB 式新段階に類する深椀丸底状の製塩土器容器が出土している。7 世紀前半、TK209～TK217 型式並行期が主体の時期であり、8 世紀前半まで続くものと考えられる[網谷 1995 など]。

興道寺窯（16）は耳川流域唯一の古墳時代後期の須恵器窯である。地下式の窖窯 1 基が検出され、窯床面から 7 世紀前葉、TK209 型式並行期の杯、杯蓋、高杯、短頸壺などが、灰原から MT15 型式並行期の杯、杯蓋、高杯、甕、提瓶、短頸壺、器台、筒形器台、装飾付台付壺、角杯形須恵器、円筒埴輪、土錘などが出土した。興道寺窯産須恵器・埴輪が獅子塚古墳や興道寺古墳群に供給されたことは、須恵器胎土の肉眼観察や蛍光 X 線分析によって指摘されている。6 世紀前半に開窯し、7 世紀前葉まで断続的に操業されたことが判明している[美浜町教育委員会 1978、入江 2009 など]。

古墳、古墳群として、獅子塚古墳（5）と、これを盟主墳とする群集墳の興道寺古墳群（9）がある。獅子塚古墳は全長 32.5m、後円部径約 17m、前方部幅約 15m、前方部が西面する前方後円墳で、周濠をもち、墳丘に円筒埴輪を備える。全長 6.0m、玄室長 4.5m、奥壁幅 2.5m、不整形な羽子板状の平面形態を呈し、北部九州に系譜をもつ横穴式石室を埋葬施設にもつ。石室内から MT15 型式並行期の須恵器杯、杯蓋、高杯、甕、壺、台付子持壺、筒形器台、角杯形須恵器、装身具の勾玉・管玉・ガラス製小玉、工具の金鉗・鹿角装刀子・鉄斧、武器の鹿角装鉄剣・鉄鏃、武具の盛矢具、馬具の鉄地金銅張の剣菱形杏葉・楕円形鏡板、これ以外にも三環鈴、二条線引手、兵庫鎖、雲珠、鉸具、農具の曲刃鎌が出土した。6 世紀前葉における耳川下流域の在り地小首長墳であり、『古事記』開化天皇条に記述がある若狭耳別の祖とされる室毘古王を被葬者に充てる伝承がある[入江 1986 a、入江 2009 など]。

獅子塚古墳の北西に長塚古墳（4）など 7 基の古墳の存在が伝えられており、獅子塚古墳を盟主墳として南方の興道寺古墳群と同一の古墳群を形成していたものと考えられる。長塚古墳は横穴式石室を埋葬施設にもち、須恵器杯、高杯、埴瓶、甕、蓋、勾玉、滑石製紡錘車などが採集されている。6 世紀中葉から 7 世紀前葉、TK10～TK209 型式期の造営である[入江 2009 など]。

興道寺古墳群は 10 基以上からなる群集墳で、昭和 50 年代の土地改良事業で周溝を伴う墳底部や横穴式石室が複数基発見されており、また近年の発掘調査によって 6 世紀後葉、TK43 型式並行期の、周溝を伴う円墳 2 基と小石室を埋葬施設にもつ小円墳 1 基が検出された[美浜町教育委員会 2002 など]。竪穴系小石室の検出は土地改良時にもあったようで、これ以外にも箱型石棺の検出が伝わるなど、三方郡内の他の後期群集墳と比べて基数も多く、古墳の構成にも特色がある。古墳群出土採集とされる須恵器などの伝世品は多く、3 号墳には MT15 型式並行期の装飾付台付壺の出土が伝わるなど、古墳群内に獅子塚古墳と同時期の古墳が存在した可能性も残る。また、出土須恵器は在り地の興道寺窯産のみでなく、陶邑窯跡群産、あるいは尾張地方産のものと考えられるものも混在する。須恵器の年代から 6 世紀前葉から 7 世紀前葉、MT15～TK209 型式並行期の古墳造営が考えられる[入江 2009]。興道寺古墳群は農耕地開発が可能な平野部に墓域を占め、古墳群に円筒埴輪が伴うなど太興寺古墳群



- 1 松原遺跡 2 郷市遺跡 3 洪水山前遺跡 4 長塚古墳 5 獅子塚古墳 6 藤ノ木遺跡 7 馬作遺跡 8 興道寺遺跡 9 興道寺古墳群
- 10 西沢遺跡 11 興道寺廃寺 12 観音遺跡 13 土井山古墳 14 南伊夜山銅鐸出土地 15 土井山砦跡 16 興道寺窯跡 17 高達古墳群
- 18 谷ノ口遺跡 19 高善庵遺跡 20 上野遺跡 21 殿ノ下遺跡 22 西野遺跡 23 和田井天台場跡 24 和田台場跡 25 和田古墳群
- 26 国古城址 27 粟屋勝久居館跡 28 佐柿奉行所跡 29 佐柿流田遺跡 30 木野古墳群 31 木野神社古墳群 32 木野遺跡 33 穴田遺跡
- 34 町田遺跡 35 茶屋ノ上遺跡 36 麻生砦跡 37 秋名古遺跡 38 麻生古墳群 39 猿橋遺跡 40 末国遺跡 41 麻生流田遺跡
- 42 七反田遺跡 43 宮代砦跡・宮代中世墓群 44 宮代遺跡 45 五十谷遺跡 46 寄戸遺跡 47 坂尻遺跡

第3図 興道寺廃寺周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000) [国土地理院発行1:25,000「早瀬」「三方」に加筆]

この地図は、国土地理院長の承認を得て、同院発行の2万5千分の1地形図を複製したものである。(承認番号 平23情復 第698号)

No	遺 跡 名	種 別	時 期							遺 構 ・ 遺 物	備 考
			弥生	古墳	奈良	平安	鎌倉	室町	戦国		
1	松原遺跡	製塩								石敷炉・土器溜まり・配石帯 須恵器・土師器・製塩土器・土製模造品	S53年試掘、H6年発掘 一部消滅
2	郷市遺跡	散布地								須恵器・土師器	
3	洪水山前遺跡	散布地								須恵器・土師器・陶器	
4	長塚古墳	古墳								円墳(横穴式石室)、須恵器・石製紡錘車	消滅
5	獅子塚古墳	古墳								前方後円墳(横穴式石室) 須恵器・鉄器・玉・埴輪	M30年・S53年発掘 H8年試掘
6	藤ノ木遺跡	集落								竪穴建物・溝・土坑、 須恵器・土師器・製塩土器	H13年・H22年試掘
7	馬作遺跡	散布地								不明	
8	興道寺遺跡	集落								竪穴建物・掘立柱建物・土坑・溝 須恵器・土師器・製塩土器・鉄器・瓦	H9-10年・H12-13年発掘 H9年・H12-13年試掘
9	興道寺古墳群	古墳群								円墳(横穴式石室) 須恵器・土師器・製塩土器・鉄器	十数基の内、2基現存 H12年発掘・H13年試掘
10	西沢遺跡	散布地								須恵器・土師器	
11	興道寺廃寺	寺院								基壇・竪穴建物・掘立柱建物・溝・土坑 須恵器・土師器・製塩土器・瓦・塑像・鉄器	S52年・H10年試掘 H14-23年発掘
12	観音遺跡	散布地								須恵器・土師器・製塩土器	
13	土井山古墳	古墳								前方後円墳か	
14	南伊夜山銅鐸出土地	埋納地								六区袈裟褌文銅鐸	H13年発掘、消滅
15	土井山砦跡	城郭									一部消滅
16	興道寺窯跡	窯								須恵器窯、灰原、須恵器・埴輪・土錘	H53年試掘、H54年発掘
17	高遠古墳群	古墳群								基壇・墳形・埋葬施設不明	
18	谷ノ口遺跡	散布地								須恵器・製塩土器・陶器	
19	高善庵遺跡	散布地								須恵器・土師器・瓦	H14年試掘
20	上野遺跡	散布地								須恵器・土師器・製塩土器	
21	殿ノ下遺跡	散布地								須恵器・土師器	
22	西野遺跡	散布地								須恵器・陶器	
23	和田弁天台場跡	台場								石積み	
24	和田台場跡	台場								土塁・台座	
25	和田古墳群	古墳群								横穴式石室	半壊
26	国吉城址	城郭								本丸・曲輪群・伝二ノ丸(土塁・虎口・堀切) 土師器・陶磁器・石仏・墓石	H14年・H22-23年発掘 一部が町史跡
27	栗屋勝久居館跡	城館								礎石建物・石垣・虎口・石組水路 陶磁器・土師器・鉄器	H13-23年発掘 一部が町史跡
28	佐柿奉行所跡	城館								礎石・石垣・石組水路・敷石・土塀 瓦・土師器・陶磁器	H12-13年試掘 H17-18年発掘
29	佐柿流田遺跡	散布地								須恵器・製塩土器・陶器	
30	木野古墳群	古墳群								墳丘状盛土	
31	木野神社古墳群	古墳群								円墳(横穴式石室)	
32	木野遺跡	散布地								須恵器・土師器・製塩土器・陶器・鉄器	
33	穴田遺跡	散布地								須恵器・土師器・陶器	
34	町田遺跡	散布地								土師器	
35	茶屋ノ上遺跡	散布地								須恵器・土師器・製塩土器	
36	麻生砦跡	城郭								不明	
37	秋名古遺跡	散布地								弥生土器・須恵器・土師器・製塩土器・陶器	H19年試掘
38	麻生古墳群	伝承地								不明	全壊
39	猿橋遺跡	不明								須恵器・土師器・陶器	
40	末国遺跡	散布地								須恵器・土師器・陶器	
41	麻生流田遺跡	散布地								須恵器・土師器・陶器・土錘	
42	七反田遺跡	散布地								須恵器・土師器・陶器・土錘	
43	宮代砦跡 宮代中世墓群	城郭 墓地								帯曲輪群・竪堀・土塁・虎口 五輪塔・石仏・宝篋印塔	
44	宮代遺跡	散布地								須恵器・土師器・陶器	
45	五十谷遺跡	散布地								須恵器・土師器	
46	寄戸遺跡	出土地								石剣	S9不時発見
47	坂尻遺跡	散布地								不明	

第1表 興道寺廃寺周辺遺跡一覧

(小浜市)と共通し、後に付近に白鳳寺院が建立されるなど地域の中心地として古代に継続していくことが特徴的である。

古墳時代後期の祭祀遺跡として松原遺跡がある。7世紀前葉、TK209 型式並行期に土器製塩の場に転用される以前、海上を前面に臨む浜堤上で土製模造品による継続的な祭祀が行われている。土製模造品の分布は、製塩土器が出土した土器溜と一部重複し、その下層から鏡、管玉、勾玉、船、釧、容器、短甲という7器種総数148点が出土した。土師器製の年代から5世紀後半、TK23 型式並行期に在地小首長である獅子塚古墳被葬者層の管掌下で祭祀が開始され、その背景として開始期の模造品の組成が鏡・船・短甲であることから、軍事的行動を伴う海上活動に関わる祭祀として始まり、土器製塩開始直前の6世紀末葉には旧来の地域首長権の表象としての伝統的祭祀を放棄することになったものと評価されている[網谷2009bなど]。

古墳時代後期、6、7世紀の耳川下流域の、特に左岸段丘域においては、集落形成、土器製塩や須恵器生産などの生産部門の掌握、海上祭祀の執行、古墳造営など、流域を支配領域とした在地小首長層の動態の痕跡が色濃く残っており、後の白鳳寺院、興道寺廃寺(11) 建立の素地は既に養われていたものと理解できる。

### C. 若狭国三方郡の成立と三方郡家の所在

孝徳期の全国立評の動きの中で7世紀後半には三方立評がなされたものと考えられるが、三方立評の直接的な時期を示す史料はない。ただし、国郡郷里の表記に関して、天武10年(681)頃までは国一評一五十戸の構成であったことが知られており[市2009]、現在、確認できる若狭国最古の紀年銘木簡に持統元年(687)、「若佐小丹評木津ア五十戸」があり、これ以外にも紀年銘そのものはないが、飛鳥京跡出土木簡に「三形評三形五十戸」、藤原宮跡出土木簡に「□□評耳五十戸」の記載が見られるなど、7世紀第IV四半期には既に三方評が立評していたものと考えられている。大宝元年(701)、若狭国は遠敷郡、三方郡の2郡から始まり、天長2年(825)に遠敷郡西部から大飯郡が分立した。

三方郡家の所在地に関しては、城縄手遺跡(若狭町三方)が有力である。近辺に古代祭祀との関わりが想定される「郡神」、式内の三方神社の旧社地があったと伝えが残る「館藪」などの小字地名が遺存し、「郡厨」「郡」「三方」などと墨書された8世紀末葉から9世紀前半の所産の須恵器杯・杯蓋の存在から、その頃の郡家が城縄手遺跡付近に所在する可能性が大きいと考えられてきた[美浜町教育委員会2006など]。

一方、初期郡家を耳川下流域の興道寺廃寺周辺に求める新たな見解が近年、提起されている。その根拠を整理すると、①興道寺廃寺が7世紀後半まで遡る郡内唯一の白鳳寺院で、後に本格的な伽藍を備えた寺院として整備されており、付近に郡領氏族の存在が考えられること、②興道寺廃寺の南西に郡家に関わると思われる下屋敷という小字地名が遺存すること、③興道寺廃寺建立前夜、6世紀～7世紀前半までの耳川流域と鱒川流域とを比較して、古墳の築造と土器製塩の活動に関して耳川流域に優位性、先進性が認められ、耳川流域を本拠とした在地氏族がそのまま郡領となった可能性が考えられること、④城縄手遺跡所在説の根拠となっている出土墨書須恵器の年代が9世紀前後に降るなど、初期郡家が当初からこの地にあったと断言はできず、後の郡家の移動を想定する必要があること、⑤付近の興道寺遺跡検出遺構は官衙施設として評価できないが、遺跡出土土器の組成が国府関連遺跡と目される西縄手下遺跡と共通し、特に土師器食膳具の中に畿内から直接的にもち込まれたとみられる一群が存在することから遺跡周辺に官衙の存在が考えられることなどである。これらの見解に対して、郡名となった三方という地名は若狭町三方に見られ、三方地域にその所在を考える方が妥当であるという反論も示されているなど、郡家の所在比定については決着を見ていない[美浜町教育委員会2006、美浜町教育委員会2011など]。

三方郡においては、田名遺跡、角谷遺跡など硯、墨書土器、木簡などの識字層の存在を示す遺物や、斎串・人形の木製祭祀具、銭貨などの官衙的な遺物が出土するなど、旧三方湖畔に一般集落とは考えにくい8・9世紀の郷里に伴うような官衙施設が存在した可能性、郡家のいろいろな機能を郡内各地に分散させた結果である可能性が指摘されている[美浜町教育委員会2006、松葉2009など]。

郷里名については、『倭名類聚抄』郷里部の記載から10世紀段階の郷名が知られており、三方郡の郷名を挙げ

ると「能登、彌美、餘戸、三方、驛家」と3郷、1駅、1余戸がある。3郷のうち、若狭町能登野が遺称地と考えられる能登郷は旧三方町の西部域に、中世段階の三方郷が旧三方町域にあり、三方郷が東部域に、弥美郷は耳川や式内弥美神社の「ミミ」という遺称に関連して耳川流域にそれぞれ所在が比定されている。余戸郷の所在を敦賀半島西岸から美浜町東部域に充てる意見は比較的多く、駅家郷は『延喜式』兵部省駅伝条記載の弥美駅に関連する可能性が高いことから、駅路に沿って弥美郷の中に独立的に存在していたものと考えられている[芝田2005、森田2010など]。

一方、『和名類聚抄』以前、7世紀後葉～8世紀の郷里名については藤原京跡、平城京跡、平城宮跡などの出土木簡の記銘に見ることができ、三方郡には前述の3郷・1駅家・1余戸の他に竹田(部)郷、葦田駅が所在したことが知られている。竹田郷はその下位の丸部里の存在から、式内和迹部神社が鎮座するとされる美浜町佐柿付近に所在が考えられているが、郷である以上、敦賀半島西岸を含む一定の面積を占めるエリアを想定しておく必要もある。葦田駅は駅間距離の復元から、また駅名の遺称地として若狭町相田付近を考える説が強いが、これは弥美駅と葦田駅が『延喜式』以前から並存したことを前提としている。ちなみに、美浜町に関する木簡記銘郷里名として、藤原京跡出土木簡には郷名として餘戸郷、里名として耳五十戸、耳里、竹田部里人、美々里があり、平城京跡・平城宮跡出土木簡には郷名として耳郷、弥美郷、竹田郷、里名として美々里、耳里、中村里、竹田部里、竹田里、丸部里、坂本里がある[芝田2005、森田2010など]。

#### D. 古代若狭の交通路と駅

『延喜式』兵部省駅伝条によれば、若狭国は北陸道に属し、馬5匹を備えた弥美・濃飢の2駅があったとされる。弥美駅は耳川下流域の郷市、河原市の付近に比定されることが多い。濃飢駅の所在比定は若狭町新道小字野・野木、小浜市平野などいくつかの説がある。

平城宮跡出土木簡の記銘に見られる8世紀段階の駅として玉置、葦田、野の3駅がある。野駅と濃飢駅が同一の駅であるという前提に立ち、須恵器、土師器、緑釉陶器、灰釉陶器、木簡などとともに、「乃井村」と墨書された10世紀前半の灰釉陶器が出土した木崎遺跡(小浜市)の近辺に濃飢駅家が所在する可能性も示されている[松葉2009など]。

若狭国の駅路復元に関しては、①初期の駅路整備の段階から近江国(湖西地域)から越前国松原駅へと至り、さらに加賀国以北へと向かう道と、西に進んで若狭国へと入る道(若狭支路)とに枝分かれするとする『延喜式』の記述にそのまま従う見解と、②延暦14年(795)、中央政府が使者に近江・若狭両国の駅路を調べさせた後に駅路を廃したという『日本紀略』の記述を基に、これ以前は近江国高嶋郡から北進して若狭国に入り、さらに越前国へと続く道が駅路として機能していたと考える2つの見解が示されているが、決着は見えていない。近年の大伴廃寺、今津舟橋遺跡、弘部野南海道遺跡(いずれも滋賀県高島市、旧今津町)の調査成果は後者の見解を補強するものとなるのか[今津町史編集委員会編1997、今津町史編集委員会編2003]。

後者の見解に従って8世紀の近江・若狭間駅路を見ると、近江国高嶋郡の郡家近接駅家から山間を抜けて約16kmで若狭町三宅付近の玉置駅へと至り、西に進めば国府などの官衙群を通過して約10kmで小浜市木崎付近、濃飢(野)駅へと至り、逆に玉置駅から東に進路を取ればそれぞれ約10kmで葦田駅、弥美駅、さらに10km強で越前国松原駅へと至る自然な駅間距離が復元されているが[馬場2007]、玉置駅を濃飢駅の前身と考える説もあり、駅路および駅の所在確定までには至っていない。

弥美駅家は『延喜式』、『和名類聚抄』に記載が見られ、駅名が示すとおり耳川下流域、三方郡弥美郷に所在が考えられている。これまで、特に歴史地理学研究の立場から郷市の「馬作」「早子」、河原市の「大道ノ下」「駒ヶ田」など駅、駅路をイメージさせる小字地名が遺存することを根拠に美浜町郷市、河原市の付近に駅の所在が想定され、旧丹後街道、あるいは国道27号の付近に駅路復元がされてきた[真柄1978]。

しかし、耳川流域の駅路復元に関して、近年、高橋美久二氏によって新たな見解が示され、小字図や古地図を基に耳川下流域の条里地割を復元し、その基軸と考えられる東西線を駅路に想定した。すなわち佐柿の椿峠から

木野の南、そして土井山の北端に沿って西進し、久々子湖東岸の段丘の切り通しを抜けたのち、久々子湖に沿って南々西に折れて宇波西神社の前へと至るラインを古代の駅路に想定したものである。この場合、駅路が耳川流域を何の障害もなく東西に突き抜けることができ、目的地を最短距離で結ぶ直線道であったという駅路の実態と合っている。美浜町木野の近くに計画道路の痕跡と思われる「大石」「縄手」「辻」などの小字が残ることもこの説を強めている[高橋 2000、松葉 2009 など]。

その後、門井直哉氏は高橋説の駅路が耳川下流域の中でも地形的に低湿地域、ラグーン付近を通過しなければならないこと、ロケーション的に興道寺廃寺背後を駅路が通過することなどに注目し、美浜町興道寺に見られる「縄手」「南街道」「東街道」「前田」など駅路に関する小字地名に注目し、高橋説よりさらに南方に東西に延びる地方主要道として駅路の可能性を指摘した。弥美駅の所在について、高橋説に立った場合、駅路復元線に面する2つの律令期遺跡が弥美駅の候補となる。藤ノ木遺跡は9世紀の須恵器杯が採集され、木野遺跡は式内木野神社に近接し、8世紀の須恵器、製塩土器、鉄塊が採集されている。門井氏は、駅田からの転訛地名としての「前田」という小字が所在する美浜町中寺付近の微高地に弥美駅の所在を推定し、自身の駅路説の可能性を強めている[美浜町教育委員会 2011]。

耳川流域の南北に延びる交通路に関して、白鳳寺院の興道寺廃寺、式内の弥美神社や伊牟移神社などの所在を考えれば、南方の近江へと向かう道、つまり江戸期に粟柄越えと呼ばれた美浜町新庄から近江（旧マキノ町）へと山間部を抜けていく南北の道が存在した可能性は高い。また、8世紀以後、若狭国の主要な津として繁栄したとされる気山津が三方郡家推定地の城縄手遺跡の東方約2km付近に位置するものと考えられており、若狭湾から久々子湖を経由して気山津に至る水上ルートの存在も想定されるなど、多様な地域交通の実態が考えられる[美浜町教育委員会 2006、松葉 2009 など]。

## E. 古代三方郡の寺社

三方郡における古代仏教信仰に関する遺跡として、まず白鳳期まで遡る寺院として興道寺廃寺がある。一連の調査で7世紀後葉の創建期、8世紀後半以後の再建期があり、再建期には金堂、塔、中門、講堂、南門などからなる堂塔を本格的に備えた伽藍をもつ寺院であったことが判明している。これ以外に、若狭町三方に所在する臥龍院では昭和8年(1933)に境内地(庫裏)から古代の丸瓦、平瓦、埴などが出土しており、古代寺院の存在も考えられるが、時期的には平安期まで降る可能性がある[美浜町教育委員会 2006 など]。

古代神祇祭祀の場となった三方郡の式内について、『延喜式』神祇、神名帳によれば、三方郡19座(大1座、小18座)が記されている。美浜町に関係する11座は大社の宇波西神社を除いていずれも小社で、須可麻神社、伊牟移神社、丹生神社、織田神社(佐田・北田)、和尔部神社、佐支神社、高那弥神社、仁布神社、木野神社、弥美神社がある[芝田 2005 など]。

## F. 興道寺廃寺周辺の奈良・平安時代遺跡

興道寺廃寺周辺の律令期の集落遺跡として、興道寺遺跡、上野遺跡(20)、秋名古遺跡(37)などがある。

興道寺遺跡では興道寺廃寺の北方から北西方にかけて8世紀前半を主体とする竪穴建物跡、掘立柱建物跡などが検出され、須恵器・土師器の食膳具・煮炊具、製塩土器、鉄釘や鉄製紡錘車などの鉄器、鞆羽口や鉄滓などの鍛冶関連遺物などが出土する。竪穴建物と掘立柱建物が組となり、建物小群を構成することや、若狭地方の他の古代遺跡に比べて畿内産(系)土師器や製塩土器の出土が比較的多いことが興道寺遺跡の特色である[松葉 2009]。

上野遺跡は8～9世紀の須恵器、土師器、製塩土器が採集され、秋名古遺跡は8世紀中葉の須恵器、9～10世紀の須恵器、土師器などが採集されている。秋名古遺跡では蛇行する旧河川も確認されており、近くから須恵器が出土するなど、付近の微高地に集落が立地する可能性が高い。

耳川下流域に視野を広げても律令期の集落遺跡は弥生時代、古墳時代から続く遺跡が多く、段丘や微高地などの地域的な安定基盤を選地した集落形成が進んだものと考えられる。遺跡採集土器の年代を見ると、耳川下流域



で古墳時代後期から奈良時代まで継続した集落が平安時代、さらに中世へと継続していく消長のパターンと、古墳時代後期以後に廃絶していた集落が平安時代以後、再び集落形成されるというパターンとがあるようで、後者は耳川下流域の右岸に見られ、付近に式内の弥美神社、和尔部神社、木野神社が所在することが特徴的である。

### G. 耳川下流域の条里復元

耳川下流域の条里復元は『福井県史』の絵図・地図編に詳しい[田中・大森 1992、田中 1992]。耳川下流域の条里地割は、北 20 度西の方位を基本として美浜町木野から宮代にかけての沖積地や、東山、麻生、中寺、佐柿などの微高地や自然堤防などの右岸に約 55 町と比較的よく遺存している。左岸では郷市から松原にかけての低位河岸段丘末端から浜堤背後のラグーンにかけて約 60 町の地割が残っているが、古代のどの段階にラグーンなどの低地帯を水田として整備したものか、検討の余地がある。

### H. 三方郡の古代から近世に至る領域変遷

『和名類聚抄』記載の三方郡の郷の枠組みが中世以後、どのように移行、変化していくかについては、『東寺百合文書』中、文永 2 年(1265)作成の国衙作成の土地台帳の案文である「若狭国惣田数帳」に詳しい[外岡 2010]。大体の区分で言えば、弥美郷のうち、耳川以西の国衙領を耳西郷と総称し、耳川左岸域の一部から耳川右岸にかけては弥美神社、廿八所社を鎮守とする山西郷(織田荘)、能登郷は能登浦に継承され、そのまま郷名を引き継いだのは三方郷のみであった。敦賀半島西岸基部付近は山東郷(織田荘)、敦賀半島西岸は北から丹生浦、馬背竹波、菅浜浦、日向湖周辺は日向浦となった。

興道寺廃寺が所在した後の興道寺村については、「若狭国惣田数帳」に「天台宗四王院 興道寺十二町」の記述があり、天台宗四王院の平安初期には天台宗興道寺が創建されていた可能性が示唆され、正中 2 年(1325)、「承鎮法親王附屬状」(『三千院文書』)の「若狭国興道寺」の記述からすれば、中世寺院としての天台宗興道寺が 14 世紀にも存続していることとなり、広義で山西郷の領域に含まれる興道寺という所領単位としての地名が 13 世紀中葉の文献に荘郷としてそのまま収録されている背景と考えられる。ちなみに、天台宗興道寺の消長は天文 6 年(1537)、「梶井門跡目録」(『三千院文書』)中、「一 若狭国興道寺証文之事 当時守護押領」の記述から、この時期には寺院の存続が困難となり、中世末には廃絶したものと推測されている[美浜町教育委員会 2006]。

織田荘は山東郷と山西郷の一部からなり、「若狭国惣田数帳」には山東郷 8 町余、山西郷 15 町余からなるという記述が見られる。11 世紀には成立したと考えられている延暦寺領の荘園で、荘園領主として青蓮院、天台常寿院などの名が史料に見える。

これが 13 世紀までの荘郷の実態であるが、13 世紀、耳西郷の春日社領化以後の状況は、山西郷と興道寺においては変遷がなかったが、耳西郷と日向浦は耳西郷となり、丹生浦から山東郷までの範囲は山東郷となった。15 世紀、文安年間の東寺修造料勸進以後、山西郷と興道寺は耳荘となり、近世、『若狭郡県史』の記載ではそれまでの領域をほぼ引き継いで、耳庄(耳庄組)、山西郷(西郷組)、山東郷(山東組)となり、前者は弥美神社の氏子圏とほぼ重複するエリア、中者は宇波西神社の氏子圏とほぼ重複するエリアとなった。近代には美浜町合併までの旧村であった耳村、西郷村、山東村へとそのまま移行していったが、通史的に概観すると古代の郷里、中世の荘郷の枠組みが後世の行政区分に遺制として残存していく様相がうかがえる。

### I. 興道寺廃寺周辺の中世遺跡

興道寺廃寺や興道寺古墳群で 13 世紀の遺構、遺物が断片的に確認されている。13 世紀代の掘立柱建物跡 2 棟、土坑、小穴、旧河道に沿う柱列が検出され、柱穴から土師器皿 4 枚が積み重なって出土するなど、建物廃棄に伴う地鎮痕跡も確認されている。掘立柱建物の周辺や古墳の周溝内、興道寺廃寺寺域内の溝から越前焼の甕や土師器皿・甕・鍋などが出土するなど、興道寺古墳群、興道寺廃寺などの古代遺跡は埋没し、集落形成を促したものと推測される[美浜町教育委員会 2002 など]。

## 第2節 調査の経緯・経過と調査の概要

### 第1項 興道寺廃寺における既往の調査研究

興道寺廃寺における既往の調査研究に関しては、平成19年(2007)3月に発行した『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅱ』(以後、『2007年報告』という)第2章第2節で概述したが、遺漏点、新知見を含めて以下に再度、整理する。興道寺廃寺に関する調査研究を振り返ると、いくつかの時期に整理できる。

#### A. 昭和初期～中頃の調査研究

継続的に古代瓦が採集され、興道寺廃寺の存在が内外に周知された時期である。

昭和初期、興道寺廃寺の西側で行われた福井県園芸試験場(福井県農事試験場)建設に伴い、凹面に布目が残る瓦片が多く出土し、初めて遺跡の存在が明らかとなった。興道寺廃寺に関する調査研究の初見は、昭和8年(1933)、上田三平氏が『越前及若狭地方の史蹟』において、「観音畑」からの瓦片の出土を紹介し、素弁十葉蓮華文軒丸瓦の写真を掲載しながら簡単な資料報告を行ったことであろう[上田 1974]。上田氏の記述を引用すると「三方郡耳川沿岸の興道寺地籍の観音畑と稱する地域には多数の古瓦を出土し蓮華紋のものも発見されて居る。其一個は十瓣にて瓣間に契状凸起を挟み中房に蓮子九個を有し、一般に原料は粘質過多、紋様は鈍重、著しく地方色を帯びたものである。」とある。

その後も継続的な古瓦の出土採集があったようで、昭和33年(1958)、興道寺8号中町26番地から出土の素弁十葉蓮華文軒丸瓦が美浜町教育委員会で保管されている。

学会に興道寺廃寺の存在が発信されたのは、昭和45年(1970)、『飛鳥白鳳の古瓦』に古瓦関係遺跡として「観音畑」の名称が収録されたことによる[奈良国立博物館編 1970]。地元では美浜町文化財保護委員会の委員職にあった武田久二氏が興道寺廃寺での古瓦採集を精力的に進め、昭和51年(1976)、地域誌に遺跡の概要を紹介した[武田 1976]。なお、武田久二氏が採集し、所蔵されてきた資料の一部は福井県立歴史博物館に永く寄託されていたが、武田久二氏がお亡くなりになられた翌年の平成22年(2010)にご子息の武田豊氏のご厚意によって、その寄託資料とご自宅で所蔵されていた興道寺廃寺採集資料を一括して美浜町教育委員会に寄贈いただいた。

#### B. 昭和50年代～平成初期の調査研究

興道寺廃寺で初めての掘削調査が実施されるとともに、出土採集瓦に対していろいろな研究が進められたのは土地改良(圃場整備)事業が町内各所で始められた昭和50年代以後、平成8年頃までの約20年間の時期である。

昭和52年(1977)、興道寺廃寺周辺の土地改良事業に伴い、福井県教育委員会による試掘調査が実施された。興道寺廃寺における初めての掘削調査である。調査時の写真記録を確認すると、過去に軒丸瓦が出土した美浜町興道寺8号中町26番地の西側と北側で部分的なトレンチ調査が実施されたようで、軒瓦を含む多量の瓦片が出土し、基壇の一部と思われる地面の高まりが確認されたとのことで寺院遺構が良好に遺存する可能性が指摘されたという伝聞も伝わっているが、それ以上の詳細は不明である。この時に出土した瓦は福井県立若狭歴史民俗資料館で収蔵されており、一部は美浜町教育委員会が保有している。

その後、幸いなことに土地改良事業が興道寺廃寺の中核部まで及ぶことなく、遺跡の大部分が茶や野菜の畑地としてそのまま残されたことから近年まで目立った開発事業が及ぶことなく、遺跡をほぼ現状のまま伝えている。ただし、興道寺廃寺が立地する微高地では過去、中学校、病院などの建設候補地となったことも伝え聞か、遺跡に観音という小字地名が残り、郷土史研究者らを中心に観音畑(廃寺)と呼ばれ、比較的早くから古代寺院の存在が認識されてきたこと、おそらく行政内の当時の文化財保護担当者および内外の文

写真3 興道寺廃寺試掘調査(福井県教育委員会実施)  
福井県立若狭歴史民俗資料館提供

化財保護関係者の手によって保護のための協議や措置が図られたことなどで、結果として開発計画が浮上しながらも遺跡の現状保存を促してきたと言えよう。

興道寺廃寺出土採集瓦に関する基本的研究として、軒瓦を資料提示し、軒丸瓦、軒平瓦ともに3型式に分類の上、それぞれの対応関係と年代観を示した水野和雄氏の研究が挙げられる[水野 1987]。瓦の帰属年代から7世紀第Ⅲ四半期の建立、7世紀第Ⅳ四半期までの存続という寺院の消長に踏み込んだもので、瓦の年代観については修正が必要な部分もあらうと思われるが、型式分類に関しては近年の興道寺廃寺の調査所見を勘案しても現在でも十分妥当な内容を備えている。

遺跡の概要に関することとして、大森宏氏によって『福井県史』に興道寺廃寺が紹介されている[大森 1992]。

### C. 興道寺廃寺を取り巻く近年の調査研究

美浜町、美浜町教育委員会が平成18年(2006)2月に開催した歴史シンポジウム「興道寺廃寺の謎に迫る」、同じく美浜町教育委員会がその翌週に開催した歴史シンポジウム「興道寺遺跡の謎に迫る」では、内外の学識者を招聘し、興道寺廃寺第7次調査までの成果や興道寺廃寺北方の律令期集落の調査内容を踏まえ、耳川流域に留まらず、三方郡、あるいは若狭国全体に関する古代寺院、古代集落、土器製塩、官衙など若狭地方の古代社会全般に関する問題にまでに波及した多角的な報告、議論が行われた。特に興道寺廃寺に関して言えば、初めて内外に遺跡の周知が大規模に行われるとともに、それまでの調査を総括し、遺跡に対しての価値づけが行われる場となった[美浜町教育委員会 2006、美浜町教育委員会 2009]。翌年、平成19年(2007)1月には興道寺廃寺第8次調査出土の古代銭貨をテーマに歴史シンポジウム「古代銭貨の謎に迫る」を開催するなど、興道寺廃寺を活用した調査研究、普及啓発の実施の兆しが見え始めた。

出土瓦に関する個別具体的な研究として、佐々木志穂氏は興道寺遺跡から出土した丸瓦、平瓦を製作技法、焼成の諸属性を検討し、興道寺廃寺の軒瓦と丸・平瓦との対応関係の一例を提示した[福井県埋蔵文化財調査センター2003]。松葉は『2007年報告』において第8次調査までの出土瓦の制作技法などを検討し、水野和雄氏による軒瓦の分類を基本として丸・平瓦の対応関係、それぞれの年代観を示し、以前に佐々木氏が示した対応関係を概ね追認した[美浜町教育委員会 2007]。大脇潔氏は、瓦当を丸瓦凹面の広端付近にはめ込むことで作られる軒丸瓦の分布と系譜を検討する中で、その1事例として興道寺廃寺出土軒丸瓦第Ⅱ型式を取り上げた[大脇 2007]。

その他、興道寺廃寺に関する総論的な記述に関しては、『美浜町誌』における芝田寿朗氏の記述がある[芝田 2005]。

## 第2項 調査に至る経緯と経過

興道寺廃寺第9～13次調査は、平成19年度(2007)から同23年度(2011)の5年間において実施した。発掘調査に至るまでの契機、第8次調査まで(第1期調査)の概要、第9～13次調査の目的、調査に伴う外部有識者会議の開催、興道寺廃寺をめぐる調査途上での評価、調査の経過、興道寺廃寺調査に関わる普及啓発事業の実施について、以下に概説する。

### A. 興道寺廃寺の発掘調査に至るまでの契機

興道寺廃寺における本格的調査の主要因は、平成9年以後の興道寺廃寺北方、北西方における昨今の開発事業の増加である。第2表で示すとおり、平成9年(1997)以後、興道寺遺跡北縁部での記録保存のための発掘調査や開発計画に伴う事前の試掘調査が美浜町教育委員会、福井県教育庁埋蔵文化財調査センターによって不定期に進められた状況があり、これらの開発事業自体が興道寺廃寺にまで及ぶ可能性が予見された。

『2007年報告』で概説したとおり、平成10年(1998)に浮上した興道寺廃寺を横断する農道敷設計画について

は、関係機関の努力によって計画路線が興道寺廃寺の北方に変更され、結果として興道寺廃寺の金堂と塔の基壇は現状保存することにつながったが、興道寺廃寺の将来的な現状保存が憂慮されたため、早急な存否・内容確認調査実施の必要に迫られることとなった。

## B. 興道寺廃寺第1期調査の目的、成果と課題

第1次調査から第8次調査までの第1期調査は、興道寺廃寺の遺構や遺物の存否や遺存状況を確認し、古代寺院として認識されている遺跡の性格を明らかにすること、調査を蓄積することで興道寺廃寺に開発事業が波及した場合の保護のための基礎資料を収集することを目的として、存否・内容確認調査の一環として美浜町教育委員会が調査を実施した。

調査は、平成14年度(2002)の第1次調査以後、平成15～18年度(2003～2006)の4年間において第8次までの調査を実施し、金堂、塔、中門の基壇を部分的に検出し、古代寺院の存在を明らかにするとともに、伽藍配置を想定するに至るなど、存否・内容確認を目的とした調査として所定の成果を上げ、当初の目的を果たした。

平成14年度(2002)の第1次調査については、平成15年3月発行の『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』(以後、『2003年報告』という)で報告し、平成15～18年度の第2次調査から第8次調査については、『2007年報告』に収録している。興道寺遺跡と興道寺廃寺第1期調査までの概要を調査回数・地点ごとに第3表にまとめた。

平成18年2月11日、文化庁文化財部記念物課(以下、文化庁という)、玉田芳英文化財調査官の視察を受け、第7次調査までの成果に基づき、今後の調査で伽藍や寺域の様相が把握されれば、若狭国分寺跡を除き、福井県内の古代寺院で初めてとなる国史跡としての指定を目指す旨の助言をいただき、平成19年度以後の継続調査の実施を示唆されるなど、興道寺廃寺の第1期調査は、町内外に古代寺院としての遺跡の重要性を示した。

『2007年報告』第2章第8節に第8次調査までの調査成果と課題を収録したが、興道寺廃寺の第1期調査の総括として、以下に再録する。

### 〔調査成果〕

#### ・基壇遺構について

塔、金堂、中門の基壇を確認した。金堂基壇では掘り込み地業、版築痕跡が明瞭に残り、基壇の東辺、西辺では8世紀後半の改修痕跡が確認された。塔基壇ではおそらく上面は削平されているものと考えられ、地山削り出しによる基壇痕跡が確認された。中門基壇は金堂基壇改修と連動した造り替えの痕跡が確認された。伽藍整備段階には方位に載る基壇が存在したものと考えられるが、基壇北辺、西辺から出土した銭貨、神功開寶の初鋳年代から若干降り、実年代で770年、780年頃の中門再建が想定される。今後の調査によって講堂、僧坊群といった寺院関連施設が確認される可能性は高い。

#### ・出土瓦について

軒瓦を含めた多量の瓦を検討することで、軒瓦の新旧、量的多寡が把握された。軒瓦Ⅰ型式は山田寺式軒瓦の範疇に含まれるもので、その導入背景は近江、越前からの影響が考えられる。軒瓦Ⅱ型式は量的主体をなし、伽藍整備段階に大量生産されたものと考えられる。また軒瓦Ⅲ型式は一定の出土量を占め、興道寺廃寺補修に用いられた一群であるものと考えられる。軒瓦のみでなく、丸瓦、平瓦に関しても叩き目、製作調整からおおよそ軒瓦と対比できる新旧関係が把握された。

#### ・寺院の創建、改修、廃絶年代について

軒瓦の年代観から7世紀第Ⅳ四半期の寺院建立、8世紀前後の伽藍整備、そして8世紀後半の寺院改修が窺える。また、基壇に付随する瓦溜まり出土土器の年代観から9世紀後半以後の寺院衰退、10世紀後半には確実に寺院が廃絶しているものと考えられる。

#### ・興道寺遺跡律令集落の広がりについて

興道寺遺跡における既往の調査において興道寺廃寺北方における律令集落が確認されていたが、今回の調査において寺院南方にも広がりを示すことが判明した。

### 〔今後の課題〕

#### ・伽藍、寺域の範囲について

現段階では中心伽藍域の南辺に関しては中門基壇の確認により明らかとなった。南北約70mの伽藍域を想定できるが、東西辺についての手掛かりは全く掴めていない。

遺跡名(地区名)	主体	①調査地点 ②調査面積 ③調査期間 ④調査原因 ⑤特記事項	主な時期	検出遺構・遺物の概要	文献
興道寺遺跡 (土井ノ上1区)	町教委	①美浜町興道寺9号土井ノ上9・9・9番地 ②1,087㎡ ③1997(H9)年11月～1998(H10)年1月 ④社屋建設に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に町教委が試掘調査を実施	7世紀末～ 9世紀	遺構…堅穴建物跡5棟、土坑、溝、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器や瓦、輪刃口、鉄滓、鉄釘、鉄製紡錘車など	町教委1998
興道寺遺跡 (土井ノ上2区)	町教委	①美浜町興道寺9号土井ノ上8番地 ②56㎡ ②2001(H13)年7月 ④土地造成に伴う確認調査	8世紀前半	遺構…土坑、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器	町教委2003
興道寺遺跡 (土井ノ上3区)	町教委	①美浜町興道寺9号土井ノ上2番地 ②40㎡ ②2001(H13)年5月 ④町水防倉庫建設に伴う確認調査	不明	遺構…土坑、小穴など	—
興道寺遺跡 (中町1区)	町教委	①美浜町興道寺8号中町37番地 ②464㎡ ②2000(H12)年8～9月 ④診療所建設に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に町教委が試掘調査を実施	8世紀前半	遺構…堅穴建物1棟、土坑、溝、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、鉄釘など	町教委2003
興道寺遺跡 (A～C区)	県埋文	①美浜町興道寺3号孤塚・4号観音・8号中町・9号土井ノ上 ②1,670㎡ ③2001(H13)年4～8月 ④農道敷設工事に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に県埋文が試掘調査を実施	6世紀後半～ 7世紀初頭 8世紀 13世紀	遺構…堅穴建物跡1棟、堅穴建物跡1棟、掘立柱建物跡1棟、土坑、溝、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、緑釉陶器、無釉陶器、鉄製箆、土鏝、瓦、越前焼など	県埋文2003
興道寺古墳群 (内町1区)	町教委	①美浜町興道寺10号内町52番地、12号茶ノ木18番地 ②1,436㎡ ③2000(H12)年10～12月 ④農道敷設工事に伴う発掘調査(記録保存) ⑤事前に県埋文が試掘調査を実施	6世紀 13世紀	遺構…円墳3基(2基は周溝を備え、堅穴系小石室をもつ1基は小円墳)、 掘立柱建物跡1棟、柱穴列1条、土坑、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、耳環など	町教委2002
興道寺古墳群 (内町2区)	町教委	①美浜町興道寺10号内町46番地 ②87㎡ ②2002(H14)年4月 ④建物建設に伴う確認調査	不明	遺構…自然流路1条	町教委2003
興道寺廃寺 (第0次調査)	町教委	①美浜町興道寺3号孤塚33番地、4号観音23・28-1・47-3番、 9号土井ノ上4番地 ②77.5㎡ ③1999(H10)年7～8月 ④農道敷設に伴う事前調査	6世紀後半	遺構…溝1条、土坑、小穴など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器など	町教委1999
興道寺廃寺 (第1次調査)	町教委	①美浜町興道寺6号洲ノ上15・26番地 ②192㎡ ②2002(H14)年7～8月 ④存否・内容確認調査	7世紀初頭 8・9世紀	遺構…須穴建物跡1棟、塔基壇南東隅部、溝1条、柱穴列1基、土坑4基、小穴9基など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、瓦など	町教委2007
興道寺廃寺 (第2次調査)	町教委	①美浜町興道寺4号観音1-11・5・26番地 ②202㎡ ②2003(H15)年7～8月 ④存否・内容確認調査	6～9世紀	遺構…塔基壇東西刃、礎石掘り方、溝4基、土坑7基、柱穴・小穴9基など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、瓦、鉄滓など	町教委2007
興道寺廃寺 (第3次調査)	町教委	①美浜町興道寺4号観音30・35-1・38番地 ②28㎡ ②2004(H16)年1～2月 ④存否・内容確認調査	6世紀後半	遺構…堅穴建物跡1棟、溝1基、土坑1基、柱穴・小穴7基など 遺物…須恵器、製塩土器など	町教委2007
興道寺廃寺 (第4次調査)	町教委	①美浜町興道寺4号観音5・27-1・27-2番地、6号洲ノ上 8・9・16番地、7号砂河原9番地、32号東長5番地 ②251㎡ ③2004(H16)年7～8月 ④存否・内容確認調査	6～9世紀	遺構…塔基壇西刃・礎石据え付け掘り方1基、溝2基、土坑14基、柱穴・小穴55基など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、瓦など	町教委2007
興道寺廃寺 (第5次調査)	町教委	①美浜町興道寺4号観音8号中町20番地 ②81㎡ ②2004(H16)年12月 ④通信施設建設に伴う事前調査	不明(近世か?)	遺構…溝2基、柱穴・小穴11基	町教委2007
興道寺廃寺 (第6次調査)	町教委	①美浜町興道寺4号観音1-1・2・9・13番地、6号洲ノ上18番地 ②142㎡ ③2005(H17)年7～8月 ④存否・内容確認調査	6～9世紀 13世紀	遺構…金堂基壇東西刃、掘立柱建物跡1棟、溝1基、土坑5基、柱穴・小穴20基など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、瓦、鉄釘など	町教委2007
興道寺廃寺 (第7次調査)	町教委	②36㎡ ③2005(H17)年11月～2006(H18)1月 ④存否・内容確認調査、住宅増築に伴う事前調査	6～9世紀	遺構…金堂基壇東刃、塔基壇東刃、溝3基、土坑1基、小穴6基など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、瓦など	町教委2007
興道寺廃寺 (第8次調査)	町教委	①美浜町興道寺6号洲ノ上12・20・21番地 ②55㎡ ③2006(H18)年7月～2006(H18)9月 ④存否・内容確認調査	6～9世紀	遺構…中門基壇西半、土坑1基、小穴6基など 遺物…須恵器、土師器、製塩土器、瓦、鉄釘、銅銭など	町教委2007

凡例 美浜町教育委員会→町教委、福井県教育庁埋文センター→県埋文

第2表 興道寺廃寺・興道寺遺跡における既往の調査一覧

#### ・伽藍配置について

塔基壇が西側、金堂基壇が東側に位置することから、现阶段では「法起寺式」あるいは「観世音寺式」伽藍配置が窺えるが、金堂南北辺が大きく削平を受けているため、伽藍配置の確定までは至っていない。

#### ・調査対象および調査面積について

今回の調査では結果として寺院中心伽藍の一端が明らかとなったが、僧坊群、雑舎群などの関係施設は確認されていない。また、一連の調査では内容確認のトレンチ調査に終始しているため、面的調査は行なわれていない。遺跡地の地権者は細分されており、面的調査の実施には難しい面があるが、今後の史跡指定を考えた場合、広域的な内容確認は必要不可欠である。

#### ・寺院関連遺跡について

今回の調査を通じて新たに提起された三方郡衙、耳川流域所在説を裏付ける遺構、遺物は興道寺廃寺周辺からはこれまでに全く確認されていない。同様に興道寺廃寺に瓦を供給した瓦窯も未確認である。関連遺跡を含めた史跡指定を視野に置く必要がある。

### C. 興道寺廃寺第9～13次調査の目的

美浜町教育委員会は第8次調査を終えた段階で、それまでの成果と課題を整理した上で、将来的な史跡指定を視野においた現況保存を目的として、平成19年度以後の興道寺廃寺の第2期調査として、さらなる継続的な内容確認調査を計画した。

調査の主眼は、①興道寺廃寺の伽藍域および寺域を確認し、内外の遺構分布、遺存度の様相を明らかにすること、②寺院の建立から廃絶までの通史的な変遷を明らかに、地域の古代史の中に位置付けることであった。

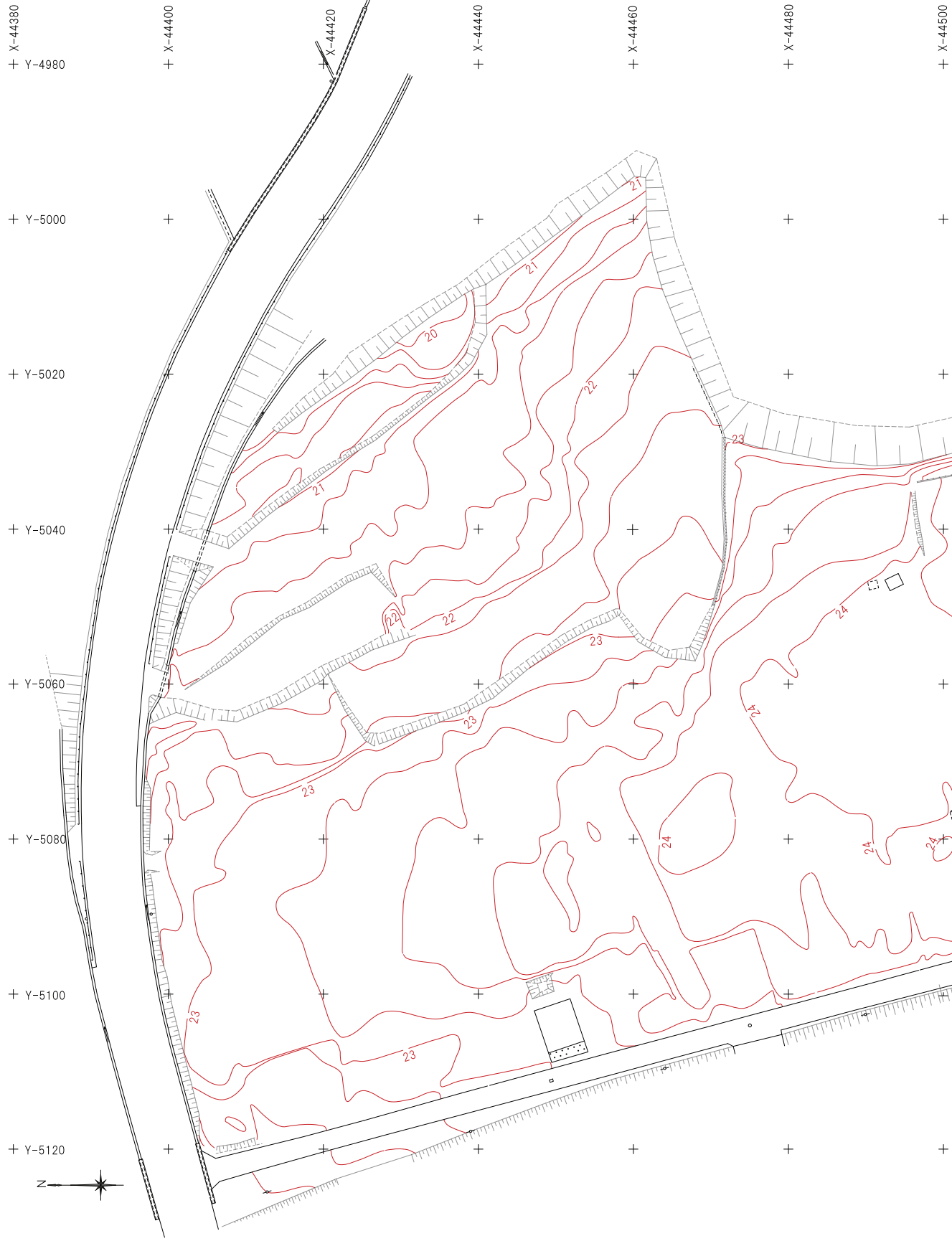
①については、各次調査を通じて、a. 伽藍の様相確認、b. 寺域の様相確認という2つの調査目的が継続的に設定され、前年度の調査内容を踏まえて、調査次（年次）別に具体的な目標を掲げて、適宜、調査箇所、調査面積などを設定した。調査区（トレンチ）設定の根拠については、本章第3節以後で調査報告を行う中で概述する。②については、各次調査の検出遺構、出土遺物の検討を通じて明らかになる事柄であるが、くしくも第9次調査着手前の平成19年5月1日、文化庁、坂井秀弥主任文化財調査官の視察を受け、金堂基壇の後世の削平が激しく、地表面に見える遺構の遺存状況から判断すると寺院単体での国の史跡指定が現状では難しいと判断されるため、周辺に存在するであろう瓦窯、官衙、古墳群、集落などの関連遺跡を含めた一括指定を考慮すべき旨の指導を受けたため、以後の興道寺廃寺の調査を通じて、寺院を核とした周辺の古代社会の様相を明らかにしていくという命題に意識を向けていかざるを得ない状況ともなったことと関係している。

### D. 興道寺廃寺調査会議の開催

興道寺廃寺の調査が大きく進展し始めたのは、平成20年度の第10次調査以後のことであった。この契機となったのは、平成20年5月23日、文化庁の清野孝之文化財調査官の視察を受けたことによる。それまでの調査面積が限定的で、建物基壇の構造、時期が不確かであることを踏まえて、面的調査の実施が難しい現在の土地利用形態であることを理解した上で、外部学識者による調査委員会を設置し、指導、助言を得ながら可能な限りの面的調査の実施を継続的に実施すべきである旨の指導を受けたことによる。事実、それまでの興道寺廃寺の調査では、遺跡の現況が複数の個人所有の畑地で、その地割も細分されており、後の土地の境界紛争を考慮すれば畑地の境界部分を調査で掘削することができなかつたため、調査面積が狭小にならざるを得なかつた。また、調査手法や遺跡に対する評価、今後の調査の方向性などに関して外部学識者などによる適切な指導助言を得る機会も限られるなど、差し迫った調査上の課題も浮上していた。

清野文化財調査官の指導を受け、美浜町教育委員会では直ちに学識者会議の設置を検討し、将来的な興道寺廃寺の保存活用を考える上で計画的な発掘調査の実施が必要であることを再認識し、調査方針、調査計画の立案、調査視察による遺構に対する解釈、調査内容に関する検証や総括、遺跡の評価、価値づけについて、外部学識者、地域住民、文化財保護行政関係者に指導助言を受けることを目的として、平成20年度から平成23年度までの4年間、計11回の興道寺廃寺調査会議を開催した。





第4図 興道寺廢寺現況地形





凡例	
普通建物	
30分一棟	
70分一棟	
石積被覆	



外部学識者として、歴史学の立場から大阪市立大学大学院文学研究科の栄原永遠男氏、考古学の立場から京都府立大学文学部歴史学科の菱田哲郎氏、歴史地理学の立場から福井大学教育地域科学部の門井直哉氏に暖かいご指導、ご助言をいただいた。地域住民の代表者として興道寺区の歴代区長（一瀬繁紘氏、田村泰三氏、澤田富士男氏、木村幹雄氏）に、また文化財保護行政関係者として福井県教育庁文化課文化財保護室の中川佳三氏、美浜町文化財保護委員会委員長の山口悦子氏に調査を通じてご理解、ご援助をいただいた。



写真4 第7回興道寺廃寺調査会議

## E. 興道寺廃寺をめぐる調査途上での評価

興道寺廃寺調査会議の席上で出席者から調査に関する学術的な指導助言、あるいは評価を受けやすくなったこと、調査上の課題抽出が容易となったことなどと併せて、従来、調査で表土置き場としていた部分を反転して調査を実施することで少しでも調査面的を確保するという調査方法に移行していったことで、特に平成21年度の第11次調査においては興道寺廃寺の既往の調査で過去最大の調査面積を確保することができ、また主要堂塔部分を面的調査したことで多くの知見を得た。

この調査の終盤、平成21年9月25日には幸いにも文化庁の渡辺丈彦文化財調査官の視察、指導を受けることができ、それまでの遺跡の遺存度が低いのではないかという内外の低評価を払拭することができたのではないかと思われる。渡辺丈彦文化財調査官の指導内容は、この数年の調査で中心伽藍に関して様相把握が進み、遺構の平面復元が可能となったことは望ましい反面、寺院の外郭施設などの様相把握が不十分であること、今後、中心伽藍や外郭施設などの様相把握が進めば、当然、寺院単体での史跡指定の可能性について再度検討されるべきであること、今後の調査は中心伽藍の様相把握を第一とし、それ以後、寺域を含めて広い範囲で考えていくべきことなどであった。

それまで興道寺廃寺の調査に取り組んできた町にとって今後の遺跡の保存活用を考える上で重要であり、また今後の継続的な調査と史跡指定に対して道筋を示唆するものであった。

## F. 調査の経過

調査における文化財保護法に関する手続きについて、それぞれの調査の実施にあたっては文化財保護法第99条の規定に基づき、関係書類を添えて埋蔵文化財発掘調査通知書を福井県教育委員会に提出した上で調査に着手した。調査終了後は、遺失物法第13条の規定により敦賀警察署長に対して埋蔵文化財発見届を速やかに提出するとともに、福井県文化財保護条例第57条の2第1項の規定により福井県教育委員会に対して埋蔵文化財保管証を提出した。福井県教育委員会から敦賀警察署長に対する文化財認定を経た後、随時、福井県教育委員会から埋蔵文化財の譲与を受けている。

調査報告書の刊行にあたって、当初、興道寺廃寺第9次調査から第12次調査までの調査内容をとりまとめ、『美浜町内遺跡発掘調査報告書Ⅲ』として平成22年度に調査報告書の刊行を予定した。しかし、平成22年度の第12次調査において、寺域北南限の様相、伽藍内外を区画する外郭施設の様相の確認が不足していたことから、興道寺廃寺調査会議において外部学識者らから調査報告書の作成を平成23年度に繰り越し、第13次調査で補足的な調査を実施することが強く求められたため、文化庁、福井県教育庁文化課文化財保護室と協議の上、事業計画を変更し、平成23年度に調査報告書（本書）の作成を行うこととなった。

【第9次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号観音15番地の1、17番地、36～38番地、45番地、同6号淵ノ上15・16番地、18番地、21番地
調査面積	272.84㎡ (1tr…17.58㎡、2tr…34.74㎡、3tr…13.74㎡、4tr…53.38㎡、5tr…24.91㎡、6tr…12.86㎡、7tr…29.89㎡、8tr…38.20㎡、9tr…29.64㎡、10tr…7.83㎡、11tr…9.86㎡)
調査期間	平成19年8月20日～平成19年11月20日
備考	

【第10次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号観音1・2番地、5・6番地、14番地の1、15番地の1、16番地、18番地、27番地の1、34番地、同6号淵ノ上14番地の1
調査面積	552.29㎡ (1tr…96.03㎡、2tr…60.00㎡、3tr…35.36㎡、4tr…13.37㎡、5tr…15.60㎡、6tr…17.03㎡、7tr…33.73㎡、8tr…35.37㎡、9tr…102.86㎡、10tr…74.27㎡、11tr…41.28㎡、12tr…27.39㎡)
調査期間	平成20年8月4日～平成20年11月28日
備考	(来跡者)網谷克彦氏、上杉和央氏、門井直哉氏、榮原永遠男氏、杉山大晋氏、杉山拓己氏、中川佳三氏、西島伸彦氏、菱田哲郎氏、森本輝久氏、山口悦子氏

【第11次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号観音2番地、5番地、11番地の1、28番地の1、同6号淵ノ上19番地、21番地
調査面積	511.03㎡ (1tr…111.26㎡、2tr…70.99㎡、3tr…19.09㎡、4tr…123.37㎡、5tr…70.55㎡、6tr…4.77㎡、7tr…10.79㎡、8tr…3.92㎡、9tr…2.49㎡、10tr…5.69㎡、11tr…58.51㎡、12tr…3.64㎡、13tr…25.96㎡)
調査期間	平成21年6月1日～平成21年9月30日
備考	(来跡者)門井直哉氏、北村圭弘氏、工藤俊樹氏、小林裕季氏、榮原永遠男氏、杉山大晋氏、竹原伸二氏、中川佳三氏、菱田哲郎氏、水野和雄氏、森本輝久氏、山口悦子氏、渡辺丈彦氏

【第12次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号観音2番地、5番地、11番地の1、12番地、28番地の1、同6号淵ノ上19番地、21番地
調査面積	191.72㎡ (1tr…7.85㎡、2tr…35.55㎡、3tr…13.80㎡、4tr…68.87㎡、5tr…19.34㎡、6tr…9.12㎡、7tr…6.78㎡、8tr…14.56㎡、9tr…15.85㎡)
調査期間	平成22年5月17日～平成22年9月30日
備考	(来跡者)市大樹氏、門井直哉氏、小林裕季氏、榮原永遠男氏、芝田寿朗氏、中川佳三氏、菱田哲郎氏、山口悦子氏、山口遥介氏、吉永柱志氏

【第13次調査】

調査箇所	福井県三方郡美浜町興道寺4号観音2番地、9番地、27番地の1、28番地の1、同6号淵ノ上24番地の1
調査面積	73.82㎡ (1tr…19.58㎡、2tr…6.32㎡、3tr…40.38㎡、4tr…3.87㎡、5tr…2.51㎡、6tr…1.16㎡)
調査期間	平成23年6月1日～平成23年9月30日
備考	(来跡者)門井直哉氏、亀田修一氏、小林裕季氏、榮原永遠男氏、中川佳三氏、菱田哲郎氏、山口悦子氏、山口遥介氏

第3表 興道寺遺跡第9～13次調査概要一覧



第5図 興道寺廃寺調査位置図 (縮尺1/1,000)

内部の調査視察として、平成21年9月28日に町長、副町長、教育長の町三役が第11次調査を、また平成22年9月17日には同じく町三役が第12次調査を視察している。

なお、第9～13次調査の概要については、調査次ごとに第3表にまとめ、調査箇所を第5図に示した。

### G. 興道寺廃寺調査に関わる普及啓発事業

第9次調査以後、第13次調査までの調査概要については、調査途上の段階で報道機関への情報提供や調査地の公開、地域住民や内外の歴史愛好家を対象とした発掘調査現地説明会を実施し、これ以外にも興道寺廃寺にまつわる歴史フォーラムの開催など、定期的な普及啓発事業の実施に努めてきた。

実施事業の概要を第4表に示したが、例えば町内外の学識者を招聘して開催した計3回の歴史フォーラムでは地域住民、歴史愛好者、研究者など延べ人数180人ほどの参加があり、フォーラムの内容もこれまでの興道寺廃寺の調査や遺跡の評価に対する総括的な内容を備えたものであったことから、遺跡の普及啓発の面から見ても効果的な活動であったと考えられる。



写真5 平成23年度歴史フォーラム



写真6 第10次調査現地説明会



写真7 第12次調査現地説明会

実施日	実施内容	実施場所	人数等
2007(H19).11.8(木)	第9次調査報道機関公開	興道寺廃寺	—
2007(H19).11.10(土)	第9次調査現地説明会	興道寺廃寺	20人
2008(H20).10.15(水)-16(木)	第10次調査報道機関公開	興道寺廃寺	—
2008(H20).10.18(土)	第10次調査現地説明会	興道寺廃寺	30人
2009(H21).3.31	美浜町歴史シンポジウム記録集4「興道寺廃寺と古代銭貨」発行	—	—
2009(H21).8.7(金)	第11次調査(前期)報道機関公開	興道寺廃寺	—
2009(H21).8.9(日)	第11次調査(前期)現地説明会	興道寺廃寺	15人
2009(H21).9.17(木)-18(金)	第11次調査(後期)報道機関公開	興道寺廃寺	—
2009(H21).9.19(土)	第11次調査(後期)現地説明会	興道寺廃寺	30人
2010(H22).9.5(日)	平成22年度美浜町歴史フォーラム「ここまで分かった！興道寺廃寺～耳川流域に大伽藍が現る～」開催	美浜町中央公民館	80名
2010(H22).9.22(水)	第12次調査報道機関公開	興道寺廃寺	—
2009(H22).9.25(土)	第12次調査現地説明会	興道寺廃寺	20人
2010(H22).9.25(土)	平成22年度美浜町歴史フォーラム「ここまで分かった！興道寺廃寺～耳別氏、耳川流域に起つ～」開催	美浜町中央公民館	50名
2011(H23).3.31	美浜町歴史シンポジウム記録集5「ここまで分かった！興道寺廃寺」発行	—	—
2011(H23).8.30(火)	第13次調査報道機関公開	興道寺廃寺	—
2009(H22).9.3(土)	第13次調査現地説明会	興道寺廃寺	中止
2011(H23).10.15(土)	平成23年度美浜町歴史フォーラム「古代、耳川流域に造仏師がやってきた！～興道寺廃寺出土塑像をめぐって～」開催	美浜町役場	約50名
2012(H24).3.31	美浜町歴史シンポジウム記録集6「古代、耳川流域に造仏師がやってきた！」発行	—	—

第4表 興道寺廃寺調査関連普及啓発事業実施一覧

### 第3項 調査の方法

『2007年報告』で述べたように興道寺廃寺の初期の調査時においては、建物基壇などの寺院遺構の位置が明らかでなく、また大半の畑地では耕作が行われていたことから調査地点の選定に苦慮し、休耕地の地割りに沿ったトレンチ設定に終始したため、結果として建物基壇の方位に対して斜めにトレンチを設定するなどの過失が発生した。また、表土直下に分布した基壇積み土や整地土を後世の堆積層、遺物包含層と誤認し、地山面まで掘削を行うなどの過失もあった。このことから、従来の調査方法について反省を踏まえて再検討し、第9次調査以後、以下のとおり調査を進めた。

#### A. 現地調査の方法

興道寺廃寺第8次調査までにおいて金堂、塔、中門の基壇が部分的に検出されており、特に金堂では地表面に基壇の高まりをそのまま残しているように、中心伽藍域では総じて表土（耕作土）から遺構検出面まで極めて浅く、極端に言えば表土を除去した段階で基壇などの遺構が検出されるような深度であったため、基本的には重機による表土掘削を行いながらも、建物基壇付近においては必要に応じて人力による表土掘削を行った。

調査範囲は土地の地割や一筆ごとの畑地などの土地面積に左右されたため、トレンチ調査を基本としたが、原則的には東西、南北軸を意識したトレンチ設定を行うとともに、調査区と排土置き場を反転させながら調査を進めるなど面的調査の実施に努めた。また、調査に際しては検出遺構の性格に応じて、必要に応じてトレンチの拡張を行うことで遺構の全体像を把握することに努め、一部の遺構はその性格、構築および廃絶年代を把握するために必要最小限度の断ち割りを行った。調査の性質上、将来へ遺構を伝えることを考慮して、柱穴・小穴などの小規模遺構の掘削は半裁に留め、土坑、溝などもセクションベルトなどとして未掘部分を設けた。

調査終了時のトレンチの掘削土埋め戻しは、後の畑地での耕作に影響が出ないように発生土を下位にそのまま埋め戻し、耕土が最上位となるよう配慮したが、耕土下にあった拳大の礫が耕土に混じるなど、後の耕作に支障が出ることもあった。

遺構平面図、遺物等出土状況平面図、遺構土層断面図、トレンチ土層断面図、遺構エレベーション図、遺構立面図など調査図面の作成については、随時、調査担当者と作業員が協力して進めた。調査地内、トレンチ内の遺構検出面に杭を直線状に複数本設定し、それを図根点として遣り方測量を基本として、一部は平板測量を併用して原則として1/20の縮尺の平面図の作成を行ったが、瓦溜まりなどの遺物等出土状況図の作成においては1/10、1/20の縮尺を併用した。土層断面図、エレベーション図などの断面図、遺構立面図などは1/10、1/20の縮尺を併用して作成した。

なお、平成19年度に町事業として実施した興道寺廃寺現況地形測量業務で設置した世界測地系に基づく3級基準点、4級基準点が遺跡内外に10点ほど分布しているため、調査で作成した平面図の図根点に座標を割り付け、測量平面図に合成した。

写真は、記録用として35mmモノクロフィルム、35mmリバーサルフィルムを使用して撮影し、調査のメモ写真はデジタルカメラを用いて撮影した。基本的には調査地、トレンチごとに表土の除去段階、遺構の検出段階、遺構の掘削（半裁）段階、調査の最終段階で全景の写真撮影を行い、必要に応じて、個別遺構の詳細写真、遺構の土層断面、遺物等出土状況の写真撮影を行った。

調査面積は牛方商会製 エリアカーブメーター X-PLAN360i を使用して計算した。

#### B. 遺構番号の割り付け

遺構の記号として、基壇遺構…SB、堅穴建物跡…SB、掘立柱建物跡…SH、柱穴列…SA、土坑…SK、溝…SD、基壇礎石据え付け掘り方・柱穴・小穴…P、集石・性格不明遺構…SX など、遺構種別ごとにそれぞれ略号を付した。本書収録の遺構図などは基本的に略号で表示した。遺構番号については、現地調査時に検出順に遺構番号を付しているが、第8次調査までの調査地を再調査し、再検出を行った遺構もあることから、今回の報告を行うにあた

り、第1次調査から第13次調査までの全ての調査において遺構番号を再度振り直すものとし、調査次数の2桁＋トレンチ番号＋遺構番号という6桁の遺構番号の表示とした。例えば平成16年度（2004）の第6次調査2トレンチで検出されている金堂基壇はSB060201という遺構番号となり、第8次調査までに検出されている遺構の番号は『2003年報告』『2007年報告』収録の遺構番号と同一とはならないので、留意されたい。また、平成16年度（2004）の第6次調査2トレンチで検出の金堂基壇SB060201が後の平成21年度（2009）の第11次調査5トレンチで金堂基壇として再検出されており、この場合、SB060201とSB110502とは同一の金堂基壇を指すこととなる。このように同一遺構に対して複数の遺構番号が割り振られることは煩雑であるが、本文および収録図に可能な限り併記することでお赦しいただきたい。

### C. 整理作業の方法と調査報告書の作成

整理作業は、福井県三方郡美浜町金山14-1の美浜町文化財保護・町誌編纂室 出土品整理棟で実施した。第9次調査以後の各次調査終了後、出土遺物の洗浄、注記、接合、復元、実測、採拓の諸作業を随時、進め、平成23年度の調査報告書の作成に備えた。

遺物の実測に際しては、細片資料を含めて数千点以上の瓦が出土するなど基壇に伴う瓦の出土量が膨大であり、この過半が伽藍内の中心堂塔周囲の堆積層（瓦溜まり層）などに伴う小片資料であり、接合関係がほとんど見られず、資料の残存度も高くないことから、原則として一辺が10cm以上残る資料で、表面の摩滅が見られない瓦を中心に図化した。基本的には全ての瓦を観察し、各辺が5cm以上のものを中心に（軒）丸瓦、（軒）平瓦に細別し、種別ごとにカウントした。それ以下の大きさの、種別を判別しかねる小片資料は瓦小片と一括した。

瓦の報告に際して、「横ナデ」としたものは側縁間の方向にナデ調整を施すもの、「縦ナデ」としたものは狭端と広端の方向にナデ調整を施すものを示し、同様に瓦の凸面叩き調整に関して側縁部に平行、直交して施すものは「直交する」ものとし、側縁部に対して斜めに施すものは「斜交する」と記述した。また、瓦の側面、側縁、狭端・広端面の調整については煩雑になるため本文では逐一触れていない。第12～21表「興道寺廃寺第9～13次調査出土瓦観察表」を参照されたい。

土器などのその他の遺物については、総じて破片資料であるが、口径、器形復元が可能な資料を極力抽出し、図化した。また、細片資料であっても遺構の構築および廃絶年代を示すと思われる資料についても極力図化した。なお、表土出土遺物については特に注目すべき遺物を除いて図化を行っていない。なお、これらの出土点数には同一個体を構成すると考えられるものを含んでいるが、接合関係にあるものは接合後の状態で、また肉眼観察上、明らかに同一個体と考えられるものはそれらを一括して1点とカウントした。以下、本章の報告中、特に断りがない場合は同様である。

調査で出土した鉄製遺物については、調査後の錆の剥落等が著しく、対象遺物の文化財認定を受けた後、町事業として専門業者に委託の上、保存処理業務を行った。

本書を作成するにあたり、遺構・遺物実測図の製図（トレース）および遺構・遺物などの図版作成は Adobe 社 Illustrator. ver10 を使用し、デジタルデータとして作成した。

第3節で報告する第9～13次調査の検出遺構については、周辺遺構との関連を含めた事実記載が必要であるものと判断し、調査次数、調査トレンチごととせず、寺院内外の各エリア別にまとめる形とした。本書は、興道寺廃寺のこれまでの調査成果を踏まえた総括的な調査報告書となることを勘案して、『2007年報告』と本書と遺構、遺物などに関する記述が重複する部分もあり、また検出遺構、出土遺物に対する再検討を踏まえて『2002年報告』『2007年報告』で示した見解の一部を改める場合もあるが、ご容赦いただいた上で本書の報告が現段階での興道寺廃寺に関する公式見解であることを理解されたい。



### 第3節 興道寺廃寺第9～13次調査の遺構と遺物

#### 第1項 検出遺構の概要

第9～13次調査までの調査面積は1,601.7㎡である。第1～8次調査の面積が約987㎡で、合算して約2,588㎡となるが、遺跡が所在する畑地の面積が約32,000㎡であることを考えれば、畑地全体の8%、水田部分を含めばさらに少ない面積を調査したに過ぎない。

検出遺構については次節以後で報告するが、報告の前提として『2007年報告』で既に金堂、塔、中門の各基壇が検出されており、また平成22年(2010)9月に開催した歴史フォーラム『ここまで分かった!興道寺廃寺』において、第12次調査までの成果に基づいて遺跡、調査、周辺環境に対する検討、位置づけが図られていることから、寺院建物の中でその機能、時期が明らかなものについては、金堂、塔などの施設と創建期、再建期などの時期を具体的な個別名称で記述する。第6～11図に第13次調査までの検出遺構平面図を縮尺1/220で示した。

第13次調査までの検出遺構として、古代寺院に関係する中核的な施設として、創建期・再建期金堂基壇、創建期・再建期塔基壇、(創建期)・再建期中門基壇、再建期南門基壇、創建期・再建期講堂基壇などがあり、これらに伴う掘込地業痕、整地面を付随的に検出している。あるいは、寺城南限を示すと考えられる創建期の2条の東西溝、伽藍域の南面回廊に付随すると考えられる再建期中門基壇南西側の東西溝、伽藍域北限を示すと考えられる東西溝、寺域北限を示すと考えられる創建期の地形的な落ち込みと再建期の東西溝、雑舎群の一部と考えられる伽藍北限から寺域北限に展開する複数時期の掘立柱建物跡5棟と区画痕跡1基、柱穴列1基などを検出している。塔基壇の東側で検出した竪穴建物2棟、掘立柱建物跡1棟、柱穴列3基は創建期に伴うと考えられる工房的施設の一部と考えられる。

古代寺院以前の遺構としては、6世紀前半、TK10型式並行期の掘立柱建物跡1棟、6世紀後半から7世紀前半、TK43～TK209型式並行期の竪穴建物2棟、掘立柱建物跡1棟、柱穴列6基などを検出しており、寺院以後の遺構として中世、13世紀とみられる掘立柱建物跡2棟、溝などを検出した。

前節第3項、B. 遺構番号の割り付けの項目で触れたように、同一遺構に対して複数の遺構番号が付されることとなるため、報告の前段として以下にその重複遺構番号を列記する。

創建期金堂基壇	SB070401—SB100401—SB100501—SB110501—SB120601
再建期金堂基壇	SB060201—SB060301—SB100402—SB100502—SB110502—SB110601
創建期塔基壇	SB020201—SK0202004—SB040701—SB110401
再建期塔基壇	SX010201—SB110301—SB110402
塔基壇礎石据付掘り方	P020205—P110403、P040701—P110402
創建期中門基壇	SB090201
再建期中門基壇	SB080301—SB090202
創建期講堂基壇	SB110503—SB111301—SB120701—SB120801—SB130201
再建期講堂基壇	SB120702—SB130202
再建期南門基壇	SB111101—SB120201
創建期寺城南限溝	SD110103—SD11101(溝1)、SD110104—SD11102(溝2)
掘立柱建物跡	SH090501—SH101001—SH101101(掘立柱建物1)、SH020201—SH100201(掘立柱建物8)、SH091101—SH100901(掘立柱建物8)、SH101102—SH110701(掘立柱建物9)
竪穴建物跡	SB010201—SB090401(竪穴建物1)、SB100101—SB010201—SK020203(竪穴建物4)
柱穴列	SA090901—SA091001(柱穴列5)、SA090902—SA091002(柱穴列6)、SA090301—SA090401(柱穴列7)





第 7 図 興道寺廢寺塔基壇・伽藍東限遺構平面図 (縮尺 1/220)



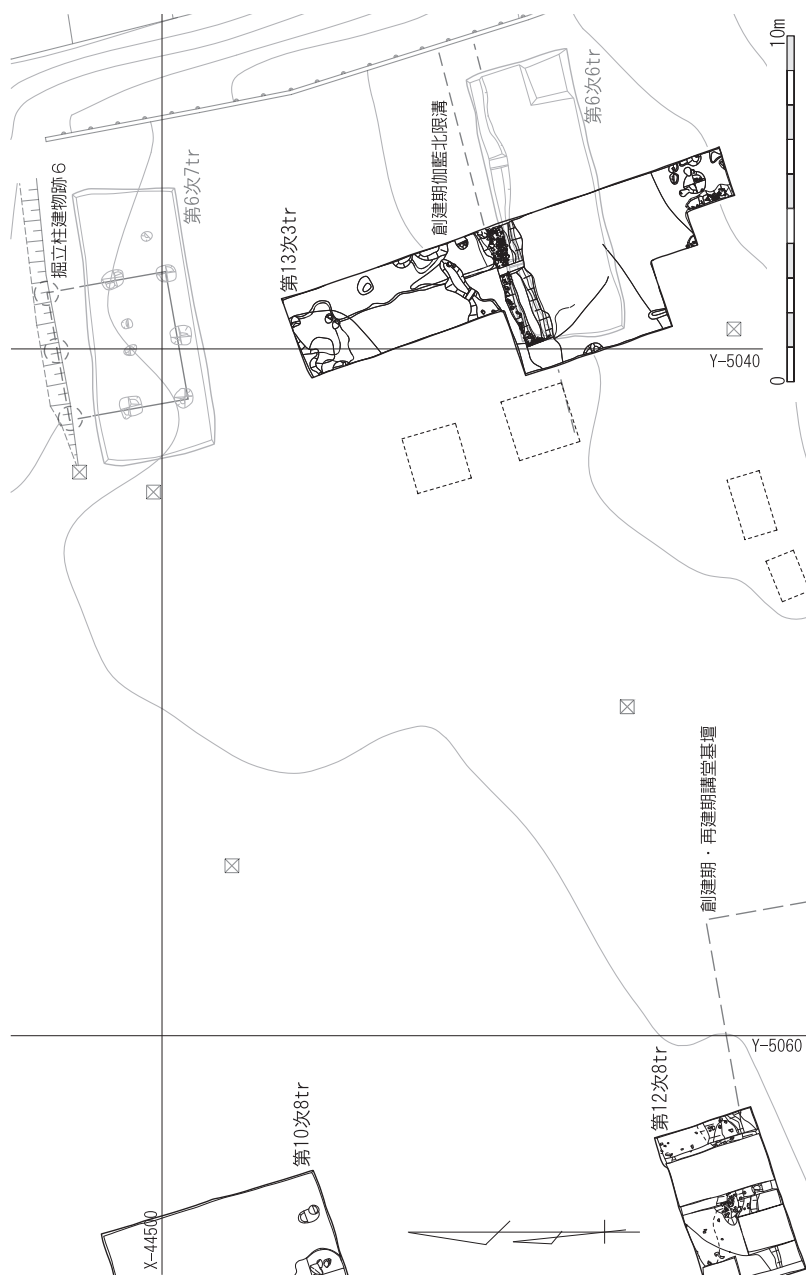
第 8 図 興道寺廃寺中門・南門基壇遺構平面図 (縮尺 1/220)

溝 SD020201—SD100201、SD060601—SD130301(溝3)、  
SD110701—SD120901—SD130401—SD130501—SD130601(溝7)

土坑 SK060103—SK090202、SK060104—SK090203

柱穴・小穴

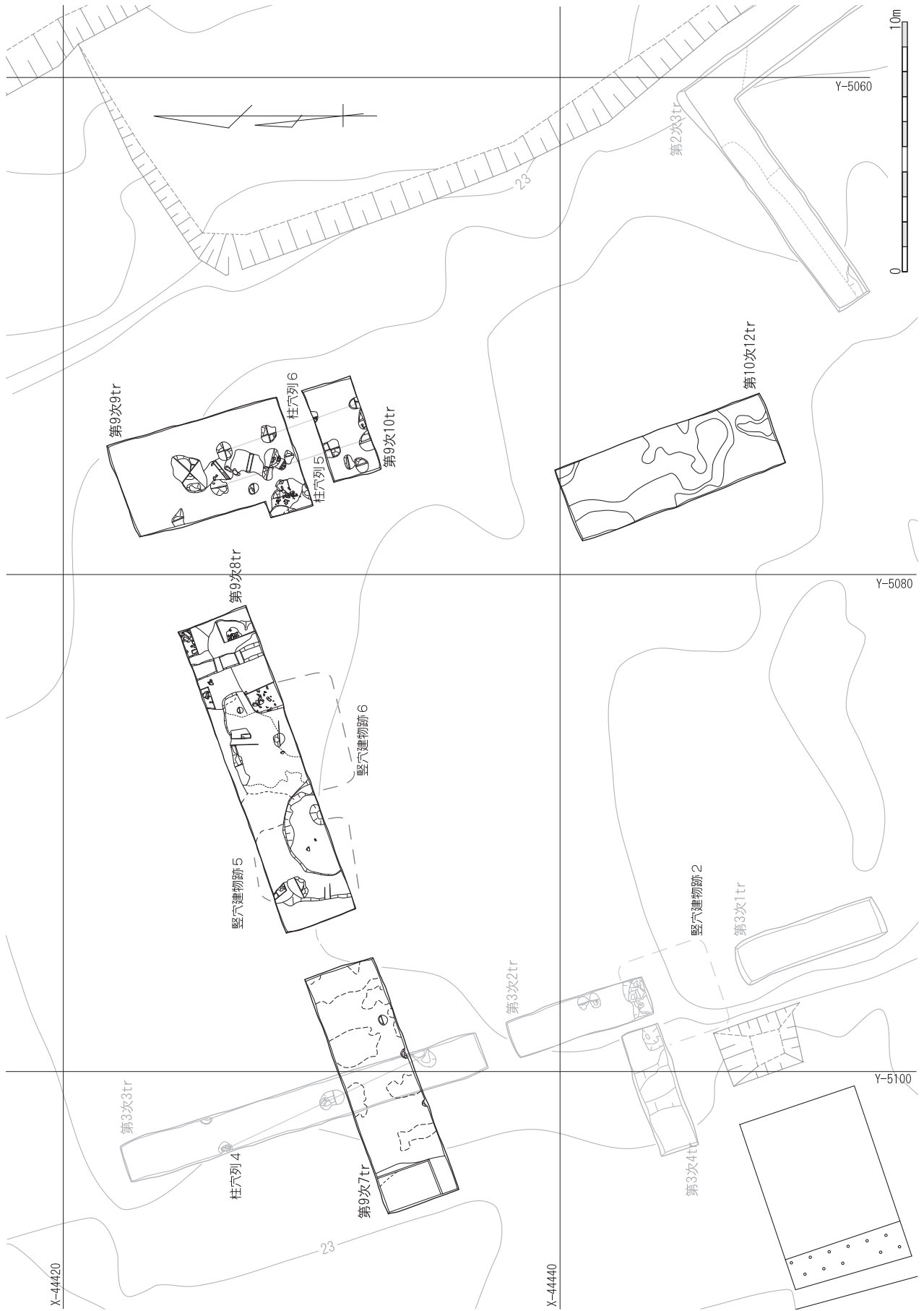
P010204—P090406、P010205—P090407、P010206—P090402、P010207—P090410、P010208—P090412、  
P010209—P090413、P020202—P100214、P010304—P090703、P041001—P101103、P041002—P101115、  
P041003—P101117、P041004—P101116、P041005—P101102、P041006—P101118、P041007—P101119、  
P041008—P101105、P060502—P120802、P060106—P090207、P060107—P090208、P060108—P090209、  
P060109—P090210



第9圖 興道寺廢寺伽藍北限遺構平面圖 (縮尺1/220)



第10図 興道寺麩寺寺域北限遺構平面図 (縮尺1/220)



第11图 興道寺院寺域外北方遺構平面図 (縮尺1/220)

## 第2項 出土遺物の概要

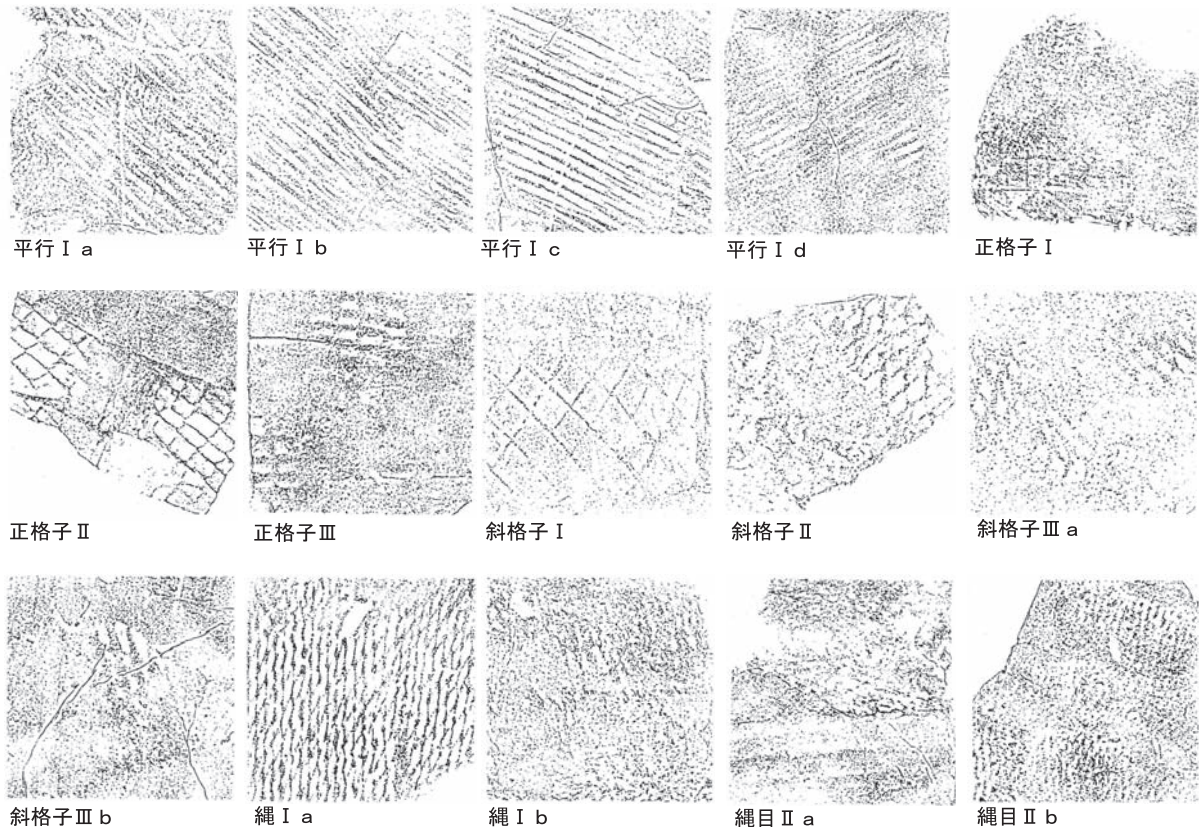
第9～13次調査の5年間にわたる調査で出土した遺物は、古代の瓦類がほとんどを占め、土器・陶磁器、金属製遺物などの出土量は少ない。出土総数はコンテナバットで100箱以上に及ぶ。

数千点に及ぶ瓦類の内、丸瓦、平瓦がほとんどを占め、軒瓦の出土は少ない。熨斗瓦と考えられるもの以外に道具瓦の出土はない。鷗尾もしくは鬼板瓦と考えられるもの2点が出土した。

軒丸瓦は『2007年報告』で既述したとおり、瓦当文様から単弁八葉蓮華文、素弁十葉蓮華文、素弁九葉蓮華文の3種、3型式に、軒平瓦は三重弧文、扁行唐草文の2種、3型式に分類できる。丸瓦は無段式（行基葺き式）のものが多数を占め、製作技法などから3型式からなることを『2007年報告』で報告したが、その後、新たに玉縁と筒部を一体に成形する有段式（玉縁式）のものが少量確認され、特に創建期・再建期金堂基壇北側の堆積層から出土する傾向があることが分かった。平瓦についても無段式丸瓦と同様に3型式からなる。

軒瓦を含めた無段式丸瓦、有段式丸瓦、平瓦の凸面に見られる叩き目は平行叩き1原体・正格子3原体・斜格子3原体・縄2原体の9原体である。『2007年報告』以後、新出のものはない。叩き目の種別を以下に加筆修正の上、示し、また拓影を第12図に再掲した。

平行I 叩き目の粗密差、叩きが施された瓦の種別によってa～dの4種に細分。いずれも同一原体によるものと思われ、原体の幅は2.1cm前後で、1単位4本の平行文で構成する。平行I a～平行I cは平瓦に用いられた叩き目。平行I aの叩き目の幅は0.3cm前後。平行I aは平行叩きの中で量的主体を占める。軒平瓦I型式の平瓦部凸面の剥離面にこの叩き目が残る。平行I bは叩き目の幅が0.4cm前後。平行I cの叩き目の幅は0.6cm前後と粗くなり、同一原体を使用し続けたために平行I aからI cへと原体の磨耗を招いたものと思われる。平行I dは丸瓦に用いられた平行叩きで、平瓦と同一原体と思われる。平瓦ではほとんどが端面・側面に対して斜向し、連続的に叩きを施すが、丸瓦は弧状、不定方向の叩き目を疎らに施した後、薄くナデ消している。



第12図 興道寺廃寺出土瓦凸面叩き目拓影



正格子Ⅰ～Ⅲ 正格子Ⅰは縦0.9 cm、横1.1 cmを1単位とする正方形に近い格子目である。原体の彫り込み線は細い。端面に沿って叩き締め、薄くナデ消される。平瓦のみに見られる叩き目である。正格子Ⅱは縦0.6～0.7 cm、横1.0～1.2 cmを1単位とする。原体に彫られた格子目がやや不整形であるが、彫り込み線は比較的細い。叩き目の方向は端面に対してやや斜向する。平瓦のみに見られる叩き目である。正格子Ⅲは縦0.4～0.5 cm、横0.8～1.0 cmを1単位とする長方形の格子目である。格子目は小さく、彫り込み線は太い。正格子Ⅲを残す瓦は比較的多いが、正格子Ⅱをナデ消した際に叩き目が潰れた可能性も考えられる。叩き目の方向は端面に対してやや斜向する。無段式丸瓦、平瓦に見られる叩き目である。

斜格子Ⅰ～Ⅲ 斜格子Ⅰは縦1.4～1.6 cm、横1.9～2.1 cmを1単位とする均整のとれた菱形の格子目である。彫り込み線は細く、斜格子目を大きく作る。平瓦に見られる叩き目である。斜格子Ⅱは菱形の斜格子目で、縦0.7～0.9 cm、横1.3～1.5 cmを1単位とする。格子目が小さくなり、彫り込み線はやや太くなる。平瓦に見られる叩き目である。斜格子Ⅲは叩き目の粗密差からⅢ a、Ⅲ bに細分した。斜格子Ⅲ aは縦0.6～0.7 cm、横1.2 cmであるが、やや形の崩れた菱形を呈する。斜格子Ⅲ bは磨耗のためⅢ aよりもさらに叩き目が崩れる。縦0.3～0.4 cm、横1.1～1.2 cmである。粗雑な叩き締めによって叩き目が広がったものも見られる。また、正格子Ⅲと同様にナデ消した際に叩き目が潰れた可能性も考えられる。平瓦に見られる叩き目である。

縄Ⅰ・Ⅱ 縄Ⅰは、同一原体であるが叩き目をそのまま残すⅠ aとナデ消すものⅠ bとに細分した。原体の幅は5.7 cm前後で、縄の幅は0.2 cm。1単位16条の縄を原体に巻き付けている。端面に沿って叩き締める。縄Ⅰ bはナデによって縄目が潰れ、細かく叩き目状を呈するが、縄目の幅がⅠ aの原体と一致する。量的には叩き目にナデ消しを施すものが多い。軒平瓦Ⅱ型式、平瓦に見られる叩き目である。縄Ⅱは、同一原体であるが平瓦に見られるものをⅡ a、丸瓦に見られるものをⅡ bとに細分した。基本的には叩き目をナデ消すためははっきりと確認できないが、縄目の幅は0.1～0.2 cm前後である。平瓦には端面に沿って叩き締めるが、端面に対して斜向するものも見られる。無段式・有段式ともに丸瓦には不定方向に叩きを施す。丸瓦、軒平瓦Ⅲ型式、平瓦に見られる叩き目である。

土器の大半は建物基壇周囲の堆積層(瓦溜まり層)から瓦片とともに細片化して、あるいは竪穴建物跡の埋土、掘立柱建物跡柱穴の埋土から破片化、細片化して出土した。再建期整地面から出土する古墳時代後期に伴う土器、建物基壇周囲の堆積層から出土する8、9世紀あるいは13世紀に伴う古代、中世の土器が多い傾向がある。塔基壇南西隅部の整地面の直上から出土した須恵器杯蓋1点は原位置を保つものである。

金属製遺物は、再建期金堂基壇の北側堆積層を中心に鉄製の釘が出土した。これ以外には鉄製の環状製品、鉄滓、銅滓なども出土した。

土製品として、再建期金堂基壇の北側堆積層を中心に塑像螺髪が出土した。創建期・再建期金堂基壇北側堆積層からは土壁状の遺物が出土しているが、塑像の断片である可能性もある。

## 第4節 興道寺廃寺伽藍域の調査

### 第1項 金堂基壇の調査

#### A. 金堂基壇の調査概要

『2007年報告』の中で基壇遺構2として示したとおり、第1期調査において既に金堂基壇を検出している。第2次調査1トレンチでは掘込地業が、第6次調査2トレンチで基壇積み土の版築と石積みを伴う基壇東辺が、同3トレンチでは石積みを伴う基壇西辺と石積みが削平された基壇北辺などを検出し、第7次調査4トレンチにおいても石積みが失われた基壇北辺を検出している。

現地形の観察からも明らかなように基壇の南側は後世に大きく削平されているが、第1次調査の段階では南北20.7m前後、東西17.8mの基壇規模をもち、南北に桁行を取り、東面する金堂建物を想定した。『2007年報告』の前年にあたる平成18年2月に開催した興道寺廃寺をテーマとしたシンポジウムでは調査担当者が南面する金堂建物であったことを指摘したが、調査途上にあり、『2007年報告』の段階においても基壇規模を把握しがたい状況であった。

第1期調査の大きな成果としては、基壇外装が石積みであること、軒平瓦Ⅲ型式（扁行唐草文軒平瓦）が基壇の東辺、西辺ともに石積みの基底石と整地面との間に差し込まれるなど、少なくとも基壇縁辺に対する改修痕跡を確認したこと、基壇の積み土として黄褐色砂礫土、黒褐色土を数cm単位で互層に叩き締めた版築痕跡を確認していたことであった。

ただし、第1期調査では金堂基壇の規模、構造、時期など不明な点も多く、さらなる継続的な調査が必要であった。このため、第10次調査では基壇の南西隅部、東辺、北西隅部の検出を目指して、それぞれ4～6トレンチを設定して調査を行ったところ、基壇積み土および周囲の整地層にかけての土層堆積の観察から、創建、再建の2時期の基壇が南北軸を違えながら南北に重複している可能性が高まった。第11次調査では土地所有者のご理解、ご協力によって金堂基壇の高まりが残る畑地で面的に調査する機会に恵まれ、5トレンチを設定して調査を行ったところ、前年度に確認した2時期の基壇の南北の重複を平面で確認するに至った。その後、第11～13次調査にかけて断続的に金堂基壇の調査を実施し、第11次調査6トレンチでは再建期金堂基壇の西辺が、第12次調査6トレンチで再建期金堂基壇の北面階段の痕跡が、同7トレンチでは再建期金堂基壇整地面の北への広がりを検出するなど、一定の成果を上げた。

#### B. 第11次調査5トレンチの調査

##### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.35～24.55m前後である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚約0.1～0.2m）下、トレンチの南側では標高24.5m付近で再建期金堂基壇の検出面に至り、北側では暗褐色土・黒褐色土（層厚約0.15m）からなる瓦溜まり層とも言える堆積層のが分布し、標高24.1～24.2m付近で暗褐色土からなる再建期の整地面に至る。再建期の整地面は東側の標高がやや高く、東端と西端で0.2mほどの比高差がある。

表土から須恵器杯（杯H）もしくは杯蓋（杯H蓋）2点、土師器甕1点、無段式丸瓦25点、平瓦46点、瓦小片13点、塑像螺髪1点が破片で出土した（第34図187）。







第15图 興道寺養年金基礎北側墻像曝出土位置圖 (縮尺 1/60)

## ② 検出遺構の概要

表土下で創建期金堂基壇 SB110501 の積み土と北辺の痕跡を検出するとともに、再建期金堂基壇 SB110502 の積み土と北辺石積み、これに伴う再建期の整地面と整地面を掘り込む溝 SD110501 を検出した。トレンチ北端の拡張部で創建期講堂基壇 SB110503 南辺を検出したが、このことについては後述する。

なお、トレンチ東端の一部は第6次調査2トレンチと重複し、再建期金堂基壇にあたる SB070401 の北辺を再検出するとともに、南端の一部は第7次調査4トレンチと重複し、創建期基壇の版築の積み土を再検出した。

## ③ 建物基壇および整地面

### 〈創建期金堂基壇 SB110501〉

SB110501 は基壇北東隅部および基壇北辺を平面で検出したが、基壇の範囲には版築状の締まった積み土が分布する。基壇の検出面は標高約 24.5m。この基壇版築は第6次調査2トレンチの基壇の断割部分の土層断面で初めて断片的に検出し、第10次調査5トレンチでは東に向けて版築の積み土の広がりを検出している。第10次調査で検出された版築部分では暗褐色土、暗褐色砂礫土、暗褐色粘土、黒色土、黒色砂質土、黒色粘土、黒褐色土、黒褐色砂質土、黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土、褐色粘土など多様な土砂を1～5cmほどの単位で水平に盛土し、叩き締めている。

基壇の北辺、東辺はSB110502 積み土の中にあるため、基壇外装の様相は不明であるが、平面で検出した基壇縁辺のラインは不定形であり、凹凸も激しいことから石積み基壇であれば、再建期に既に失われている可能性が高い。

### 〈再建期金堂基壇 SB110502〉

SB110502 は基壇北辺の東側3/4ほどを平面、土層断面で検出した。SB110502 の北辺付近はSB110501 の北辺からさらに北側に基壇の積み土を広げるように拡張し、基壇の方位をSB110501 からやや東に振って北辺の石積みを施す。基壇の検出面は標高約 24.5mで、SB110501 の検出面と同レベルであり、後世に一定の削平がされている。基壇積み土の部分は黄褐色粘砂土を主体として、黄褐色や黒褐色系の砂礫土、粘土とともに小ブロック状に積み上げて盛土で造り、北辺に石積みを施したものと考えられるが、基壇北辺から南に向けての基壇の断ち割りは行っていないため、土層断面では未確認である。

SB110502 北辺の基壇外装は石積みであり、基本的には基底石と2段目までが残るが、基底石上面は標高 24.25m前後、2段目上面は標高 24.45mに合わせた傾向がある。石積みの検出長は東西約 8.8m。ただし、第6次調査3トレンチ検出の基壇北辺でも石積みが失われていたように、トレンチ西寄り、つまり基壇の西半では基壇北辺の改変を受け、石積みが失われる。基壇北東隅部の石積みも現存しないが、基底石を据えた据え付け坑2基を平面で検出している。石積みの基底石は長辺 0.5m内外、短辺 0.2～0.3mほどの自然石を横に長く取って下面の再建期整地面に直接据え、2段目は 0.2～0.3mの自然石を横長手積み、あるいは小口積みする。石材の石種は花崗岩が主体を占める。

基壇北辺の中央付近の石積みが途切れる部分に北面階段が取り付く痕跡を検出した。横小口積みで積まれた石積みの2段目が東西ともに縦小口積みとなる部分に階段の側面が位置することが想定し、階段幅 2.4mと考えられる。周囲には階段の構成材とみられる自然礫が散在する。

基壇北辺から北側に向かつては堆積層が広がり、拳大から人頭大ほどの自然石とともに多量の瓦片、土器、塑像螺髪、鉄釘などが含まれる瓦溜まり層を構成する。瓦の出土量はかなり多いが、大ぶりの破片も乏しく、近接のもの同士の間接関係がない一方で、離れたところから出土した瓦同士が接合するなど、瓦溜まり層の攪拌も相応にあったようで接合率は低い。

堆積層の内、上位の層から杯（杯H）もしくは杯蓋（杯H蓋）3点、杯2点、須恵器小片2点、甕1点、杯蓋（杯B蓋）1点、土師器甕4点、皿23点、製塩土器2点、土師器小片3点、近世陶器1点、素弁十葉蓮華文軒平瓦2点、無段式丸瓦、有段式丸瓦、平瓦併せて1,242点が破片、細片で出土し（第16図1～6）、その下位

の層からは須恵器杯蓋（杯H蓋）1点、杯（杯H）もしくは杯蓋（杯H蓋）3点、杯（杯A）2点、杯蓋（杯B蓋）2点、皿1点、壺2点、須恵器小片5点、越前焼甕3点、土師器甕4点、皿11点、土師器小片6点、製塩土器1点、塑像螺髪3点、土壁4点、鉄釘11点、鬼板瓦もしくは鴟尾1点、単弁八葉蓮華文軒丸瓦3点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦2点、素弁九葉蓮華文軒丸瓦3点、三重弧文軒平瓦（Ⅰ）6点、三重弧文軒平瓦（Ⅱ）3点、扁行唐草文軒平瓦2点、無段式丸瓦694点、有段式丸瓦26点、平瓦1,506点、熨斗瓦1点、瓦小片66点が破片、細片で出土した（第16図7～25、第17～34図）。SB110502北側の堆積層から出土した塑像螺髪については、後の第12次調査6トレンチ、第12次調査7トレンチ、第13次調査2トレンチ出土のものと併せて、第15図に出土地点を示した。

なお、この堆積層から出土した瓦片などの遺物は、後世に遺跡を残すという観点からトレンチの東端を除いては検出面で出土したもののみを取り上げの対象とし、再建期の整地面まで全面的に堆積層を掘削し、遺物を取り上げる措置は執らなかつた。ただし、後の第12次調査以後に5トレンチと調査区が重複した箇所については、再建期整地面までの掘り下げを行っているので、結果として遺物を取り上げたことになる。

標高24.2mには基壇北辺の周囲に再建期の整地面が分布する。前述のとおり基壇北辺の石積み基底石はこの整地面に据えられたものであるが、この整地面は粘砂質な精緻な暗褐色土層からなり、層厚も最低でも0.3mに及ぶなど厚く、瓦片を密に含むという特徴がある。第6次調査2トレンチ、再建期金堂基壇SB110502東辺に付随する暗褐色粘質土で完形に近い大ぶりの瓦が密に混入していた層と対比が可能である。整地面はSB110502北辺の下に潜り込んで南に延び、SB110501北辺に接続するものと考えられる。

#### ④ 溝

SD110501はSB110502北辺から北に1.3mほど離れた再建期の整地面で検出したもので、南北幅0.39mと東西に細長く延びる。深さは未掘であるため不明であるが、整地面の断割部分で深さ0.15m、溝の断面形状は船底状で、暗褐色土を埋土にもつ。SB110502北辺に平行する溝で基壇の雨落ち溝の一部である可能性もあるが、あまり東西に伸張した痕跡もない。

#### ⑤ 出土遺物

第34図187は表土から出土。

187は塑像螺髪。砲弾形を呈し、型作りで作る。螺線は幅が広く、底面から右巻きである。底面径23mm。底面は径7mmの孔を穿ち、底面を斜めに削る。側面に2箇所の押さえナデを施している。

第16図1～6は再建期金堂基壇SB110501北側、堆積層上層から出土。

1・2は素弁十葉蓮華文軒平瓦。1の外縁幅20mm。丸瓦部の広端面をそのまま外縁とし、丸瓦部の側面の広端付近に瓦当接合に用いた粘土が被覆する。丸瓦部の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、横ナデを加える。2の蓮弁、間弁ともに肉厚である。

3～5は無段式丸瓦。3の凸面は強い横ナデを施す。4の凸面は側縁に平行した縄叩きを施し、強い横ナデを加える。5の凸面は縄叩きの後、削り状に強い縦ナデを施し、叩き目が微かに残る。

6は平瓦。6の凸面は側縁に平行する斜格子叩きを重複させながら施し、横ナデを加える。

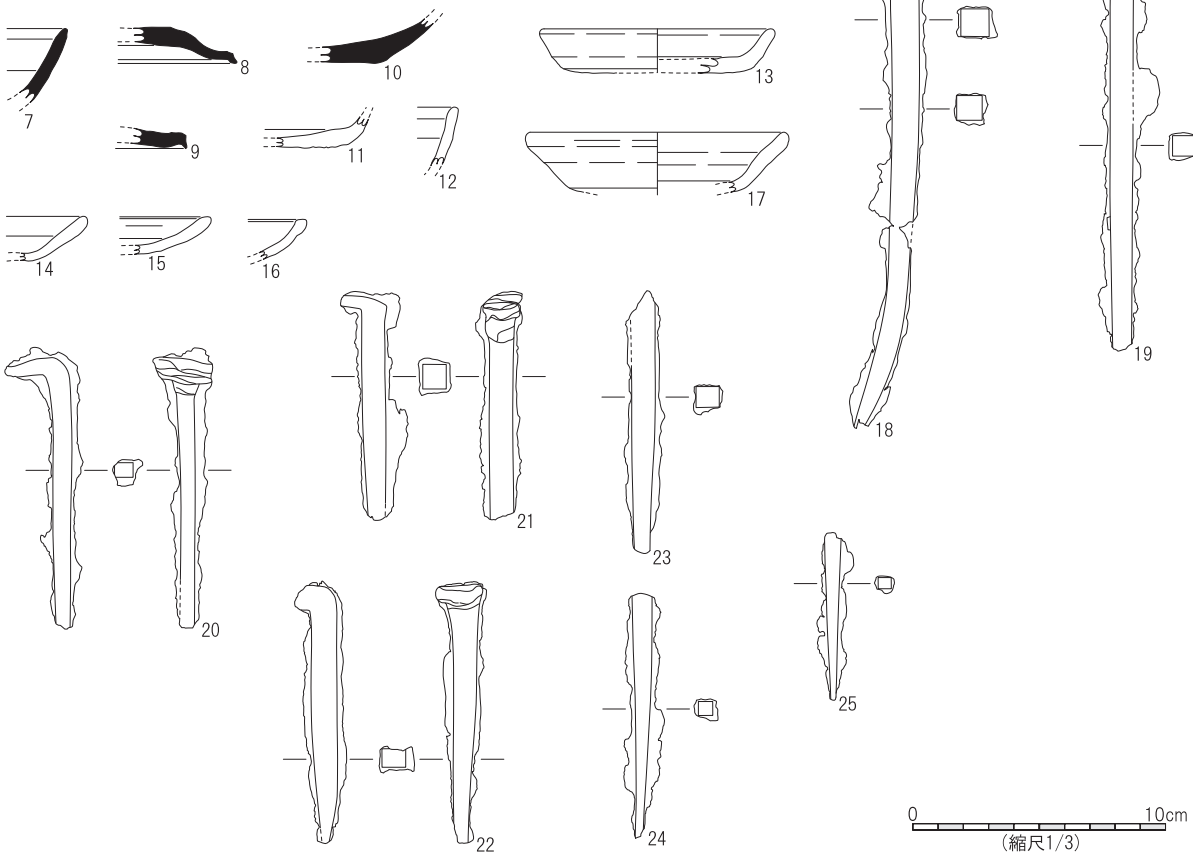
第16図7～25・第17図～第34図186は再建期金堂基壇SB110501北側の堆積層から出土した。

7は須恵器杯（杯A）。口縁部は外上方に延びる。8・9は須恵器杯蓋（杯B蓋）。8は平らな天井部から強く屈曲して口縁部に至り、口縁端部を外下方に鋭く折り返す。9の口縁端部は下方に鋭く折り返す。10は須恵器皿。底部は平らで、回転糸切りを施す。

11～17は土師器皿。11は口縁部が丸みを帯びて立ち上がる。底部外面にヘラ切り痕が残る、内外面とも全体的に煤が付着する。12の口縁部は上方に真っすぐ立ち上がる。13は口縁部が外方に短く立ち上がり、口縁端部を鈍く収める。口縁部の内外面ともに横ナデを施す。14～16の口縁部は外方に低く延び、口縁端部を丸く収め



1~6 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層上層  
 7~25 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層



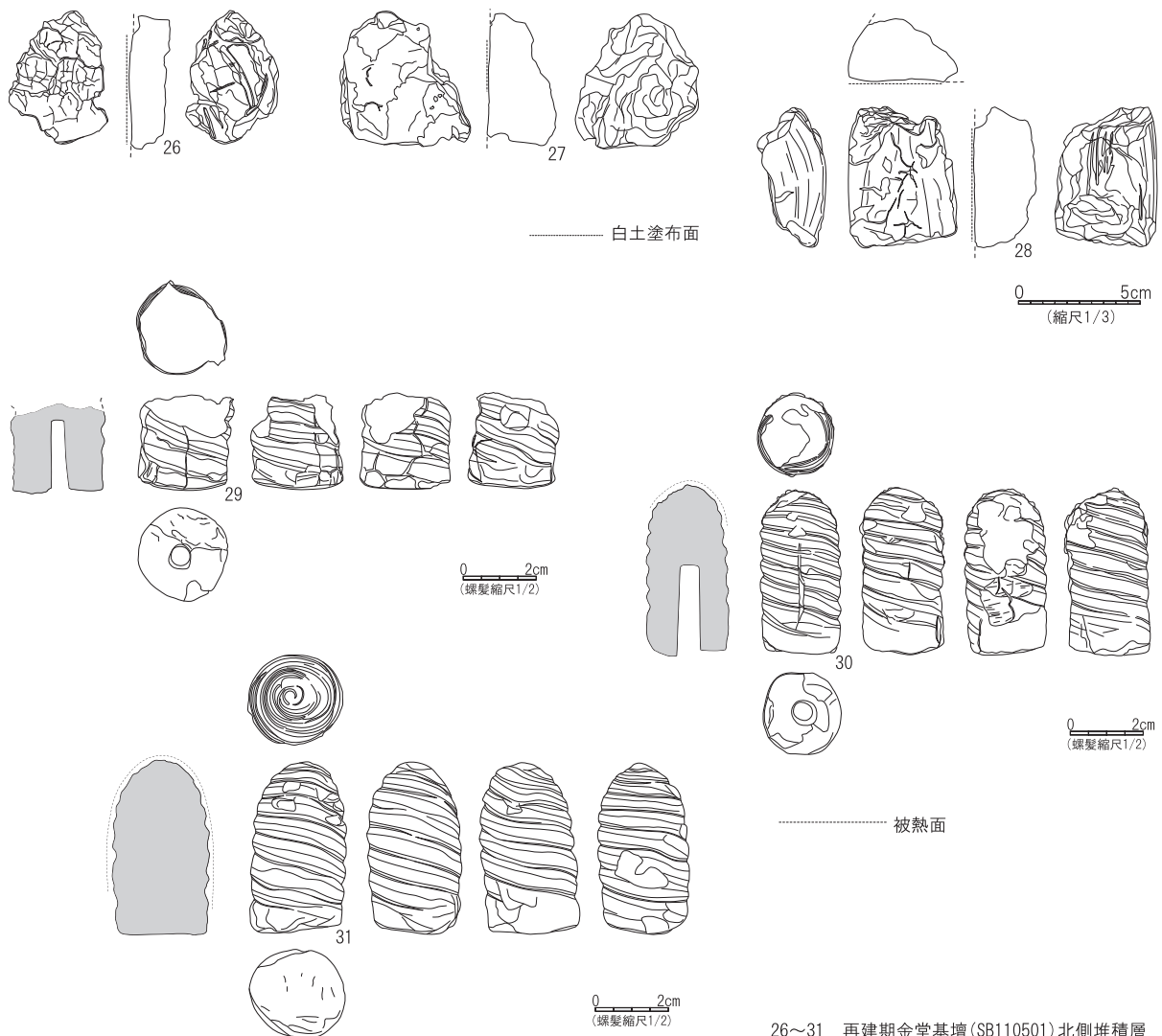
第16図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図1



る。17は口縁部が外反しながら外方に立ち上がり、口縁端部は短く内湾しながら丸く収める。口縁部内外面に横ナデを施す。

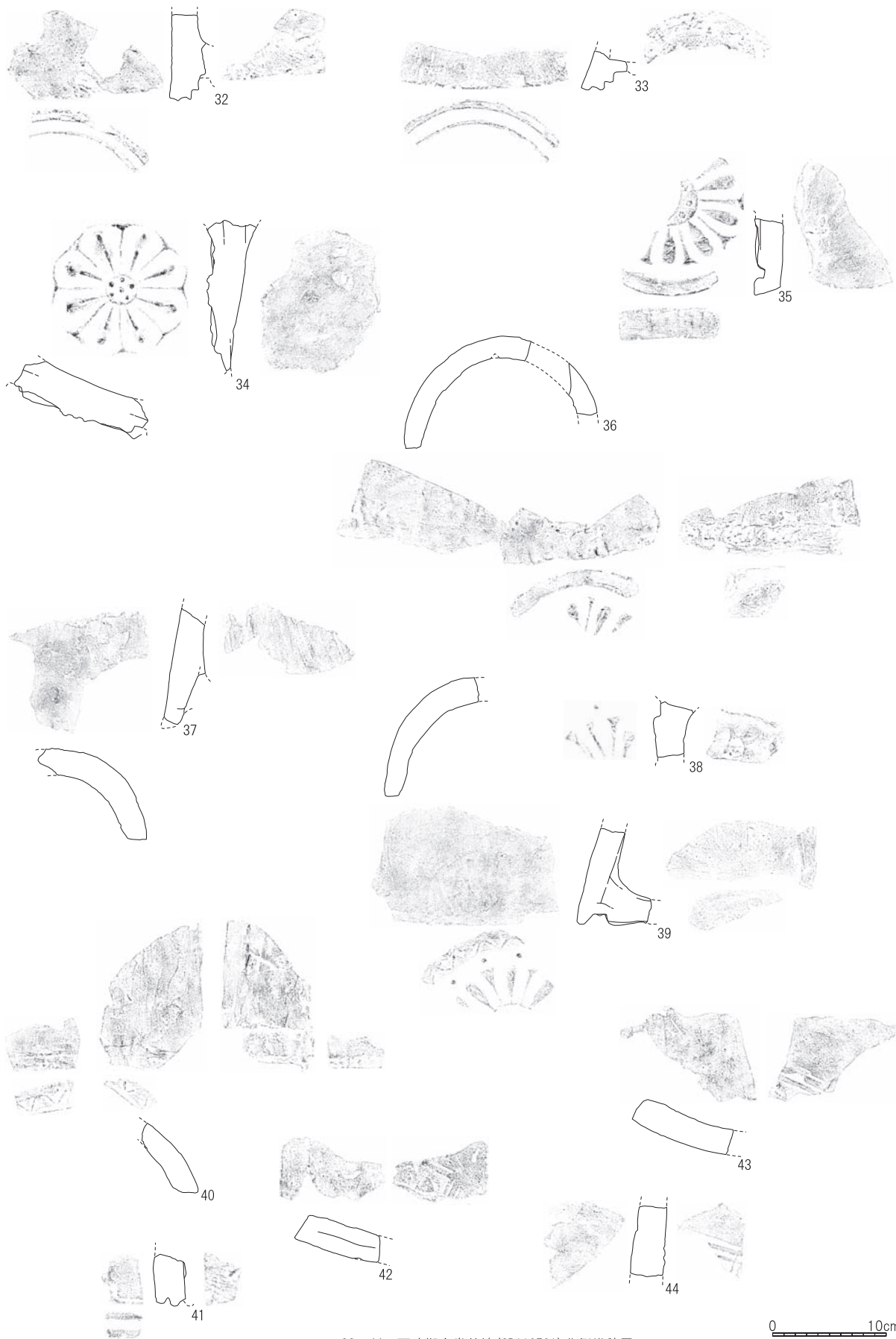
18～25は鉄釘。18は現存長19.2cm。犬釘で、頭部を叩いて扁平にした基部の端を折り曲げて頭部を作り出す。基部の断面は1.1cm×1.1cmで、正方形を呈する。基部から脚部にかけて緩やかに折れる。19は現存長16.2cm。基部の断面は0.8cm×0.9cmで、ほぼ正方形を呈する。20は現存長10.8cm。折釘で、基部の端を同じ太さのまま折り曲げて頭部を作り出す。基部の断面は0.6cm×0.8cmで、長方形を呈する。21は現存長8.7cm。犬釘で、基部の断面は0.9cm×0.9cmで、正方形を呈する。22は現存長10.2cm。折釘で、基部の断面は0.7cm×0.9cmで、長方形を呈する。23は現存長10.5cm。基部の断面は0.8cm×0.9cmで、ほぼ正方形を呈する。24は現存長9.6cm。脚部の断面は0.5cm×0.6cmで、ほぼ正方形を呈する。25は現存長6.7cm。脚部の断面は0.4cm×0.5cmで、ほぼ正方形を呈する。

26～28は土壁。26は現存長5.6cm×4.0cm、現存最大厚1.4cm。27は現存長5.4cm×5.4cm、現存最大厚2.8cm。28は現存長4.2cm×6.8cm、現存最大厚2.6cm。いずれも平坦面をもち、その上に白土を薄く塗布する。28は白土が載る平坦面に接して凸状に膨らむ別の平坦面をもつが、白土の塗布は見られない。胎土はやや緻密で、どの資料にも藁スサを含むとともに、紙スサ痕と考えられる極小の孔が部分的に残る。



26～31 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

第17図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図2



32~44 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

第18図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図3



45~57 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

第19図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図4



第20図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図5

29～31は塑像螺髪。いずれも砲弾形を呈し、型作りである。螺線は幅が広く、底面から右巻きである。採色の痕跡は見られない。29は底面径25mm、底面は径7mmの孔を穿ち、底面の全体に削り状の調整を施している。1箇所型の合わせ痕が残る。30は器高47mm、底面径22mm、底面は径7mmの孔を穿つ。2箇所の型の合わせ痕があり、頂部付近に被熱による釉付着が見られる。31は器高48mm、底面径27mm、底面の穿孔はないが、底面を斜めに2面に削る。頂部から側面にかけて被熱による釉付着が見られる。

32～34は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。32・33の瓦当外縁は二重圏線で、丸瓦部の凸面は強い横ナデを施す。32の瓦当接合部分の凹面には強い横ナデを施す。34の瓦当は蓮弁、間弁ともに肉厚であるが、部分的に範傷がある。瓦当そのものの厚みは1cm弱と薄く、丸瓦との接合にあたっては瓦当の裏側に粘土を充填し、瓦当裏面は不定方向にナデを施す。



69～72 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

第21図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図6



73~79 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

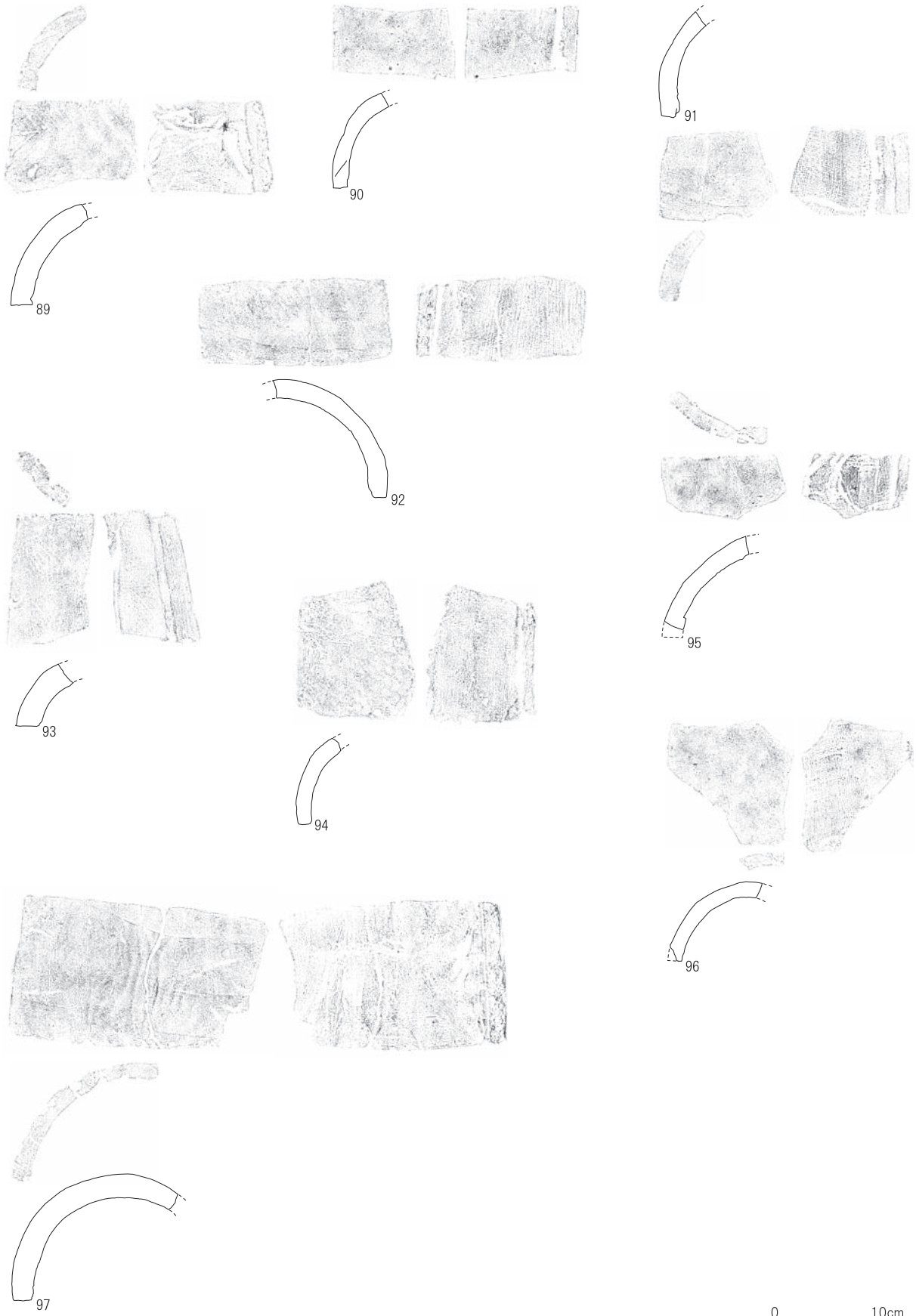
第22図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図7



80~88 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

第23図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図8



89~97 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

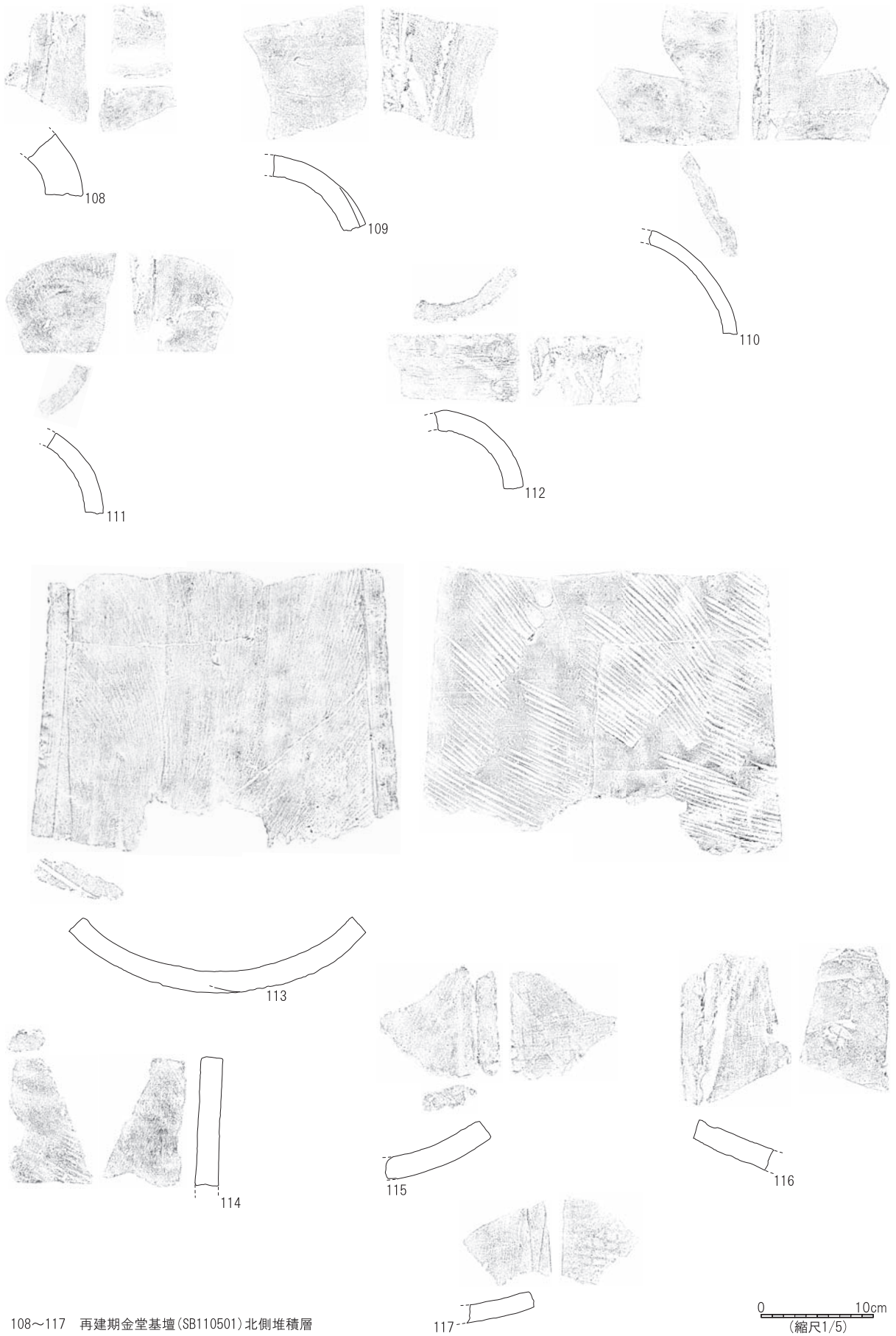
0 10cm  
(縮尺1/5)

第24図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図9



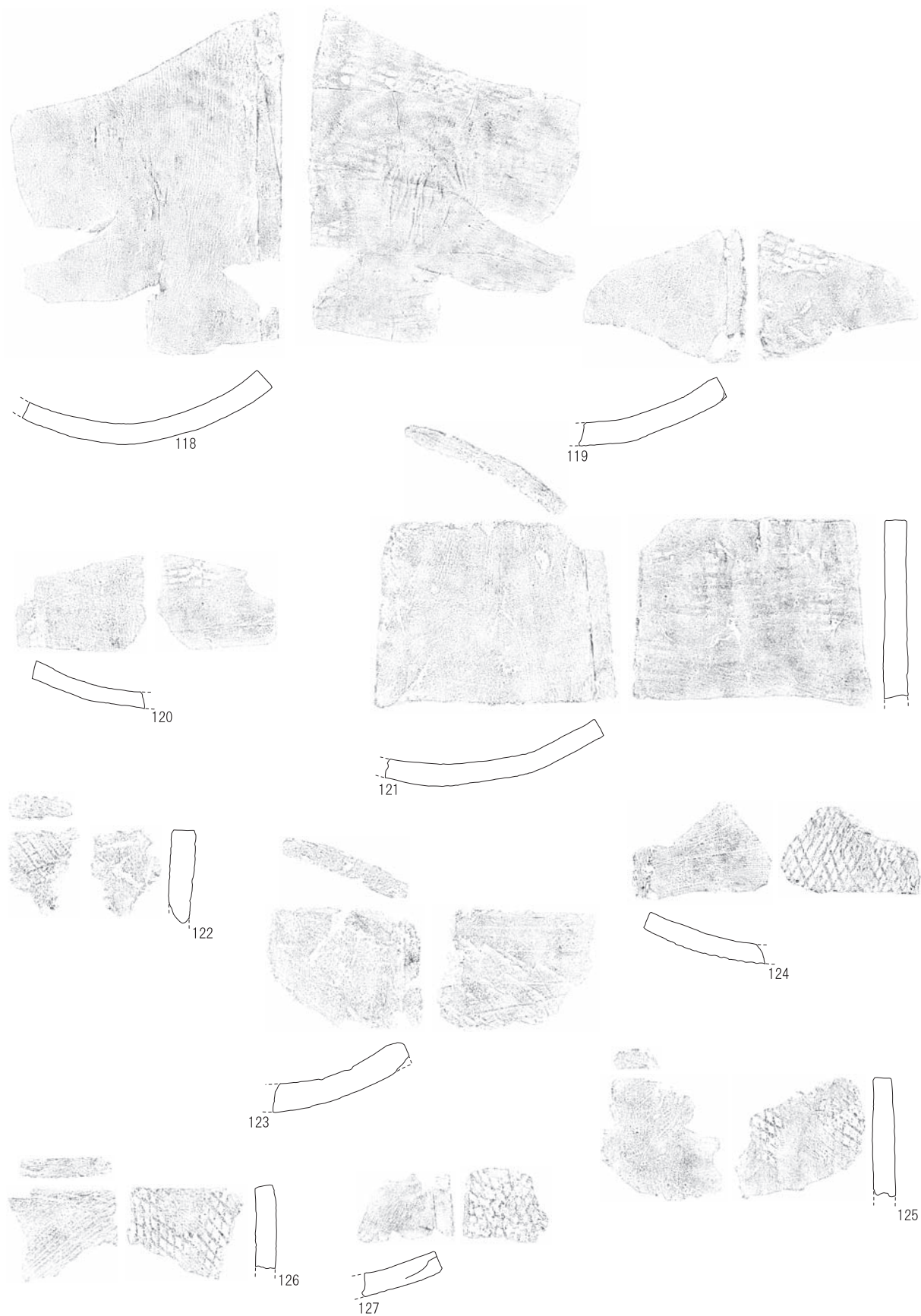


第25図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図10



108~117 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

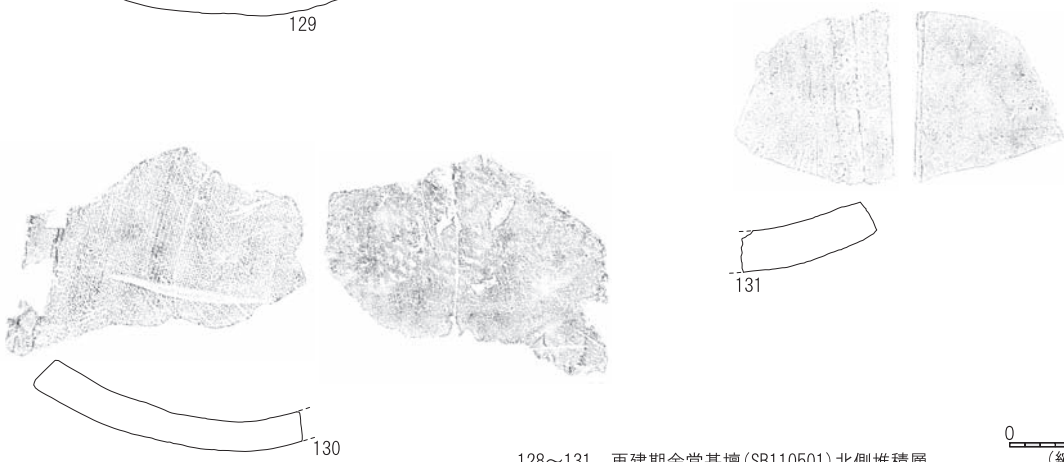
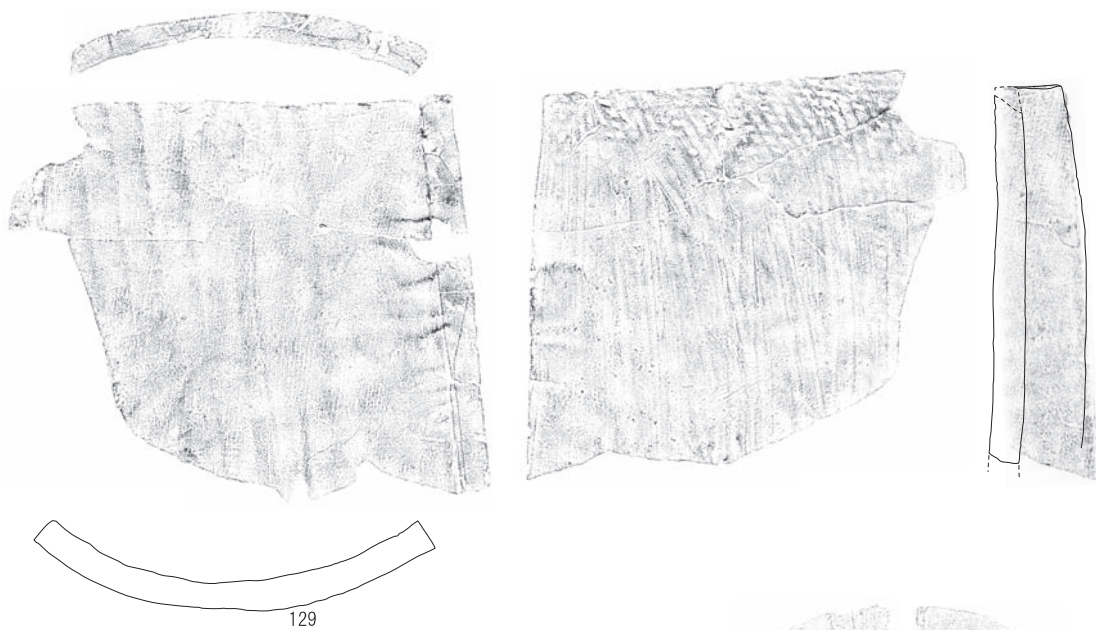
第26図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図11



118~127 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

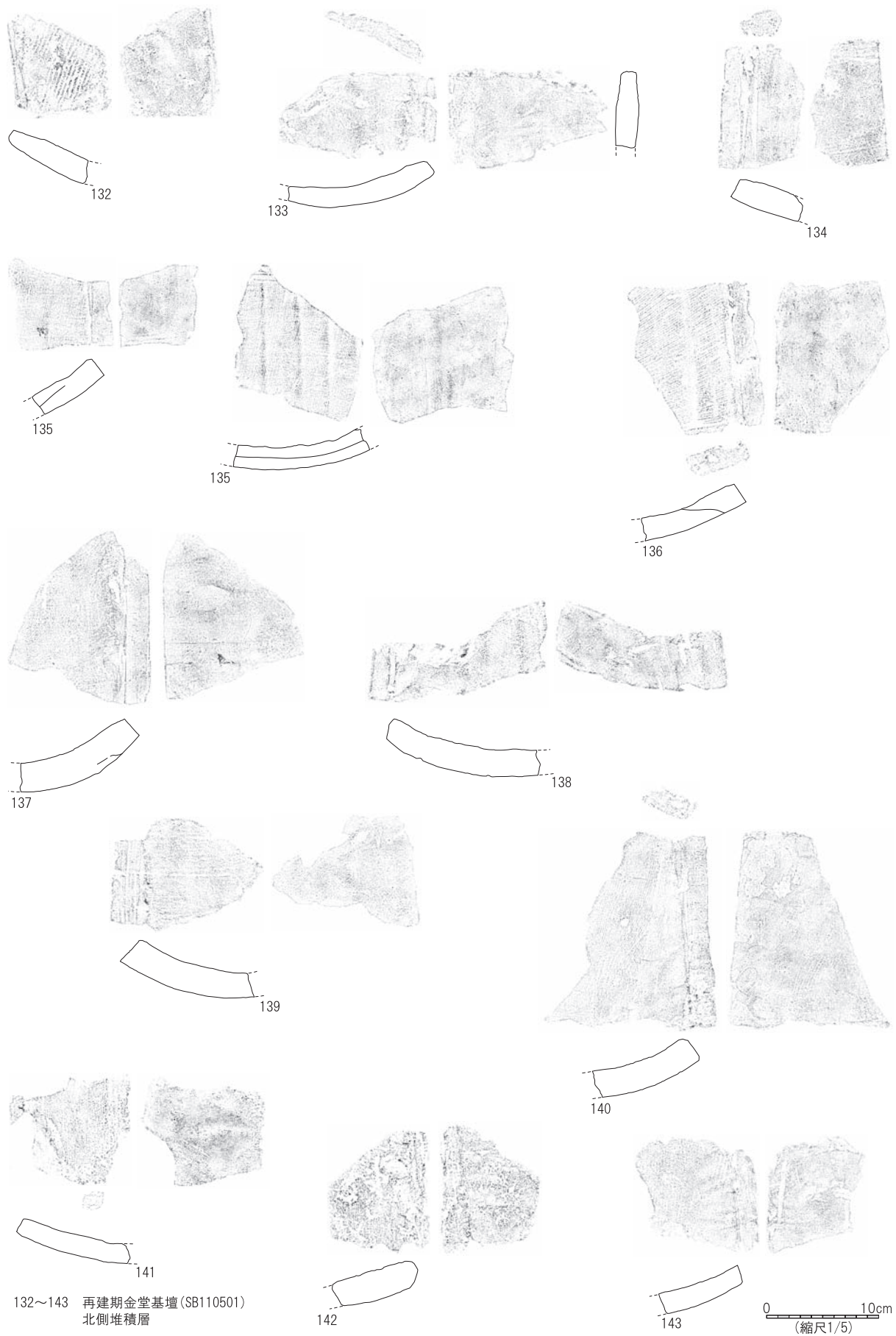
第27図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図12



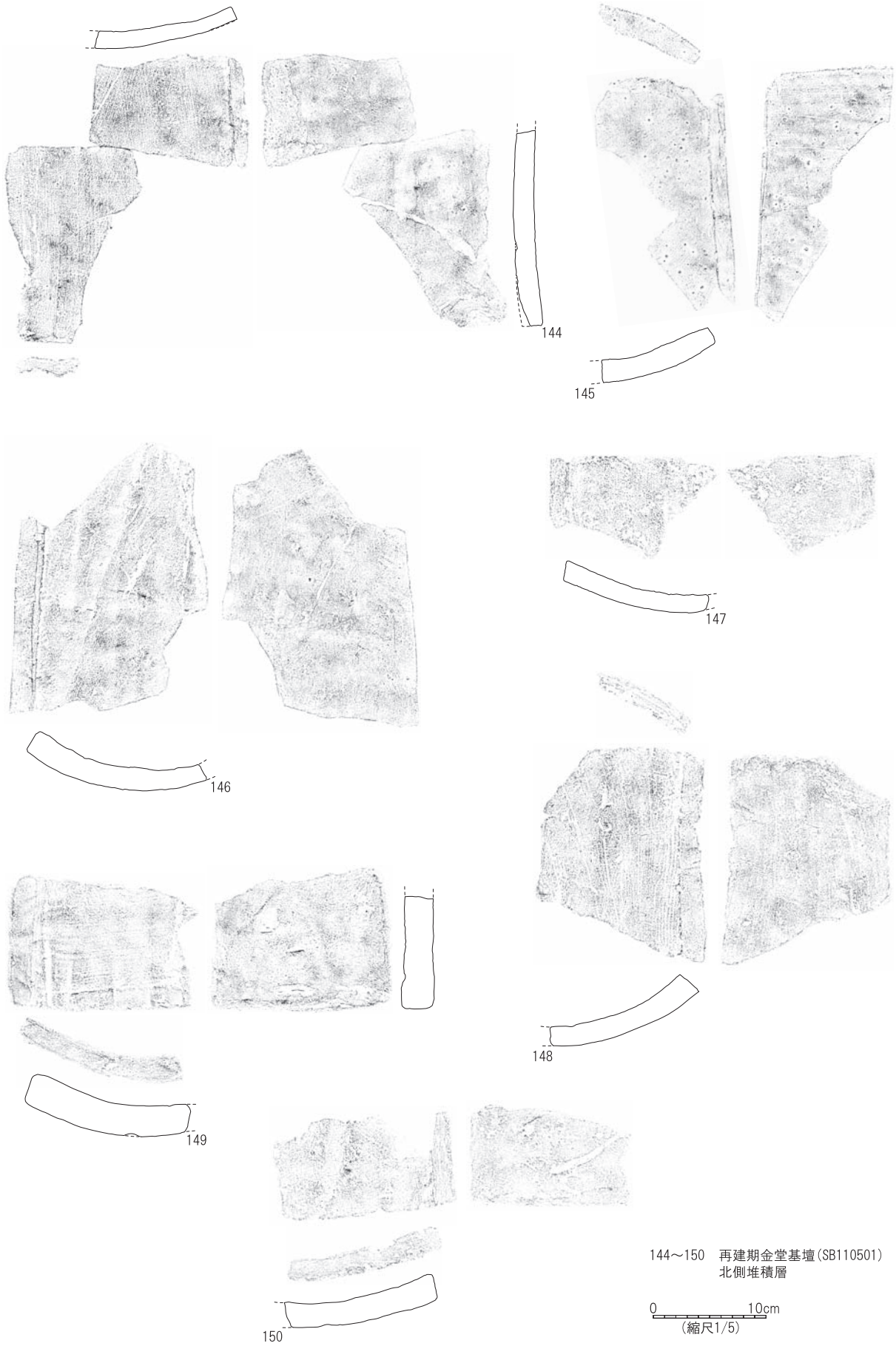
128~131 再建期金堂基壇(SB110501)北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

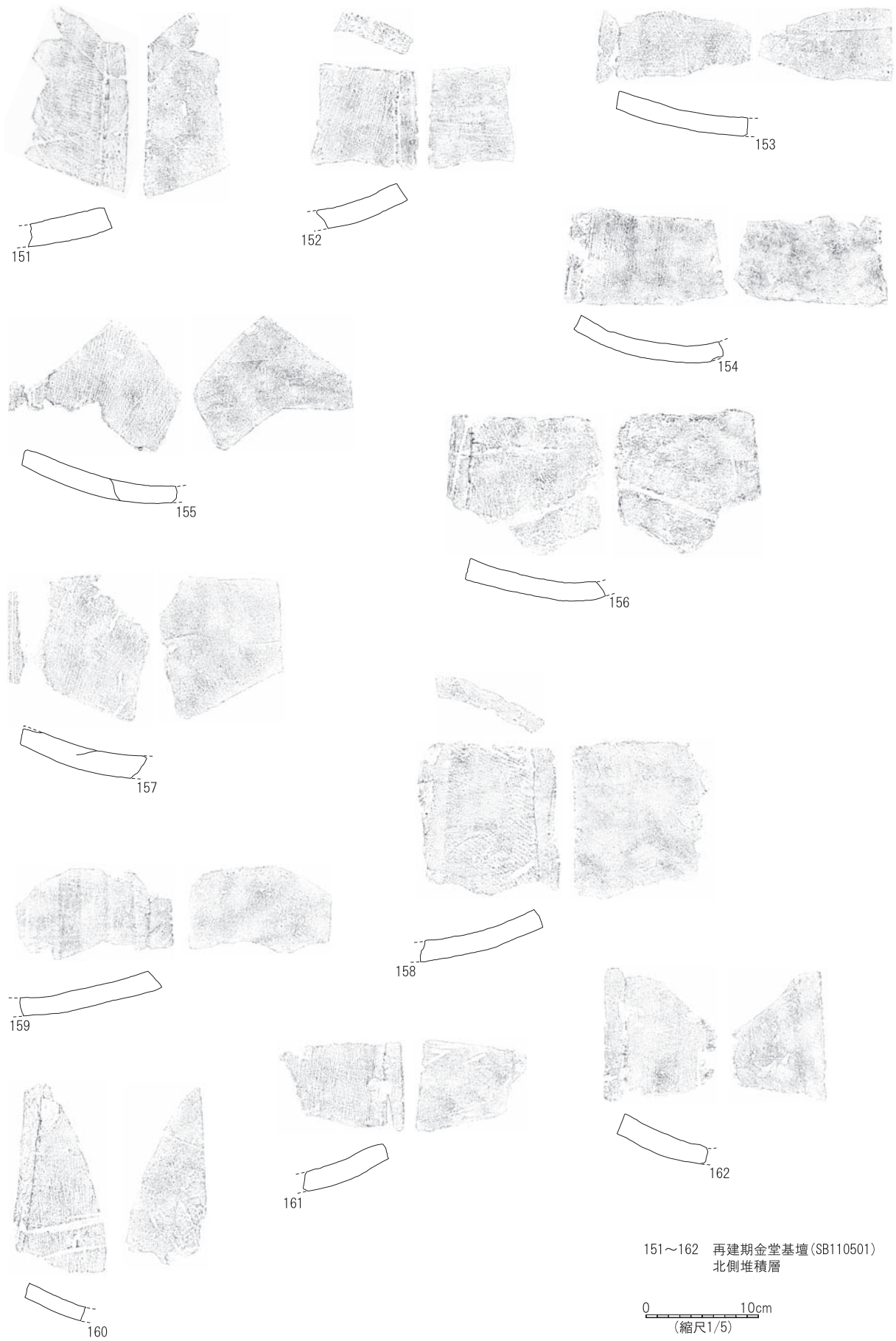
第28図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図13



第29図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図14



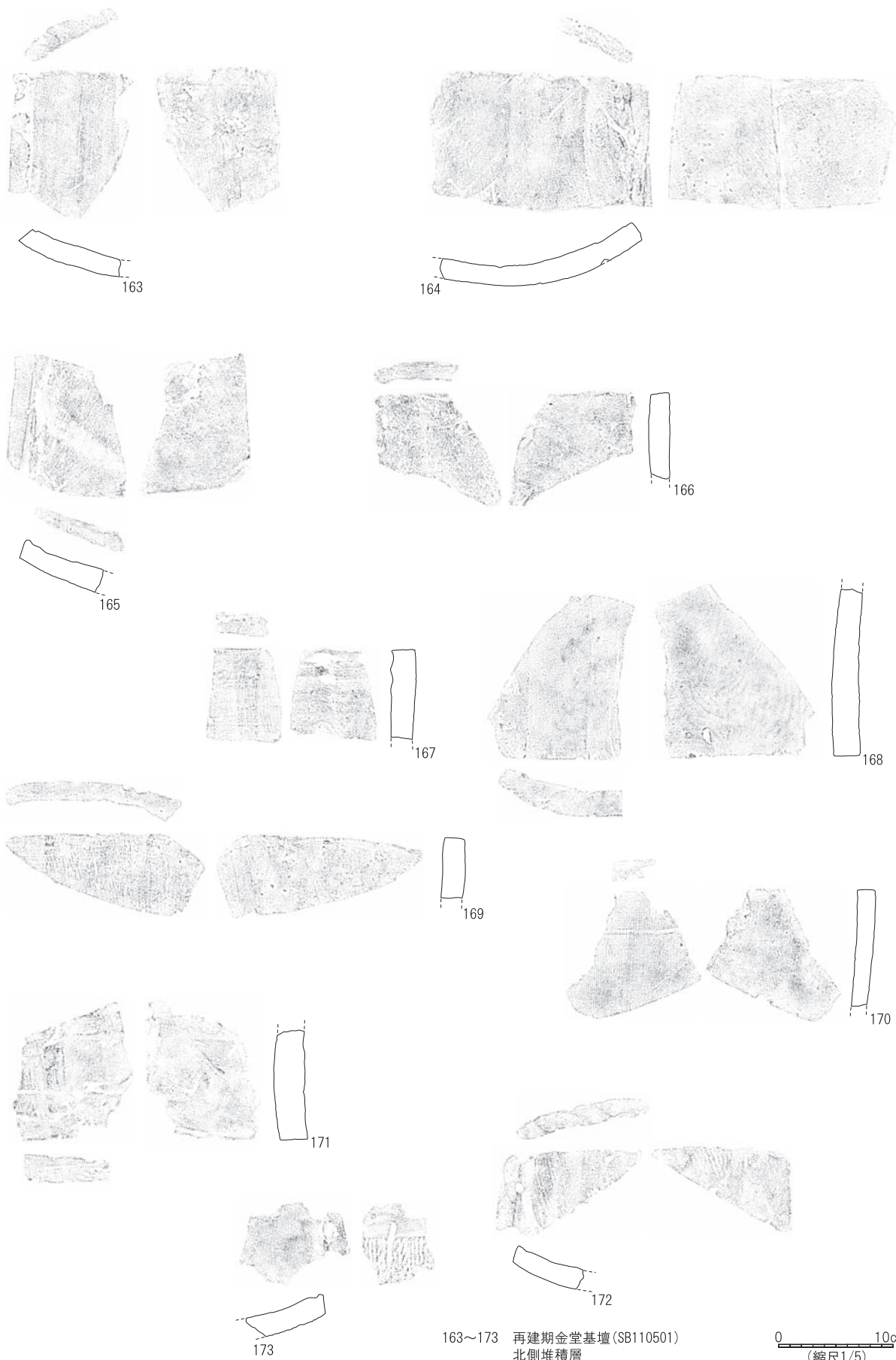
第30図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図15



151~162 再建期金堂基壇(SB110501)  
北側堆積層

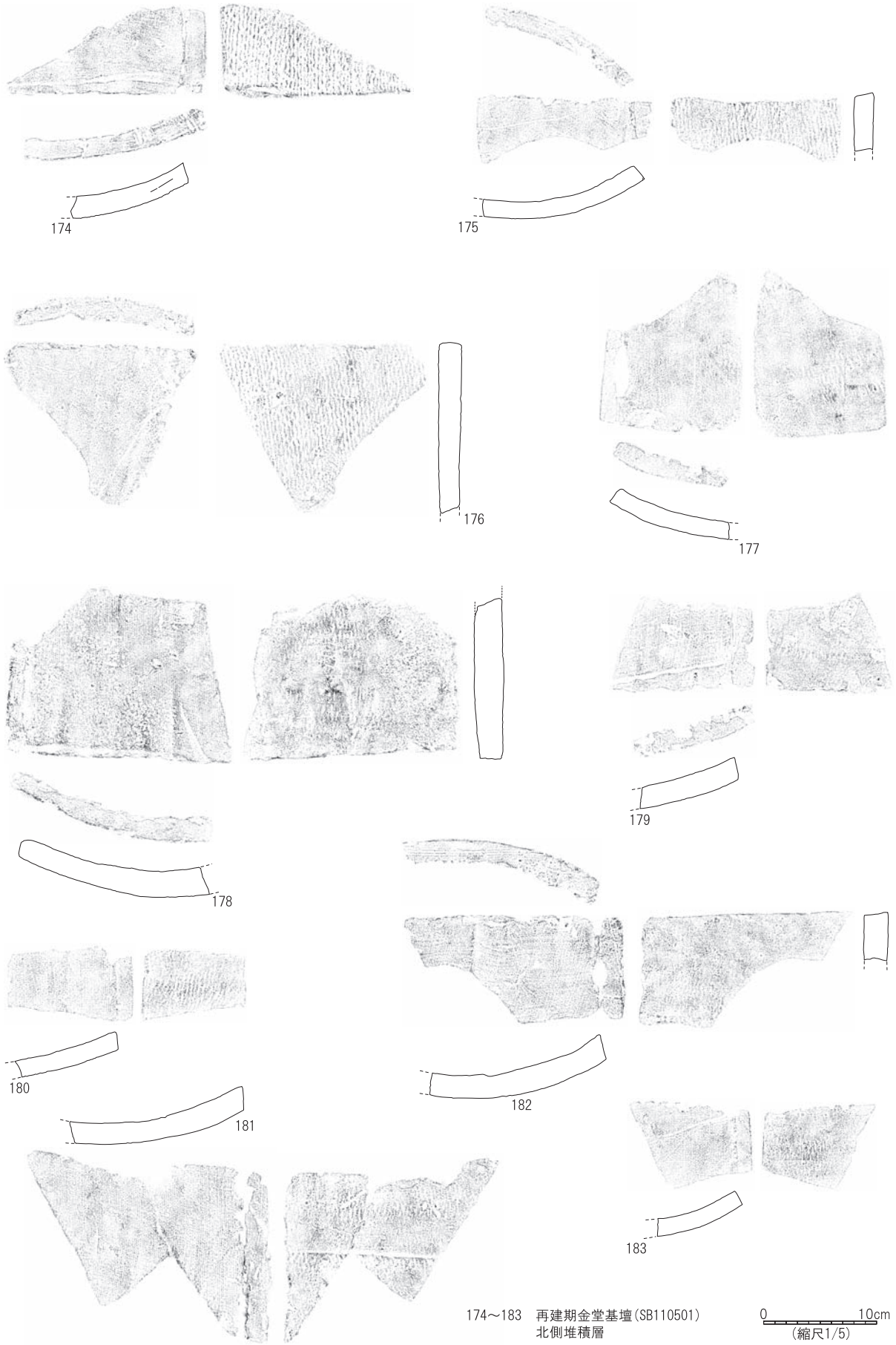
0 10cm  
(縮尺1/5)

第31図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図16



第32図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図17

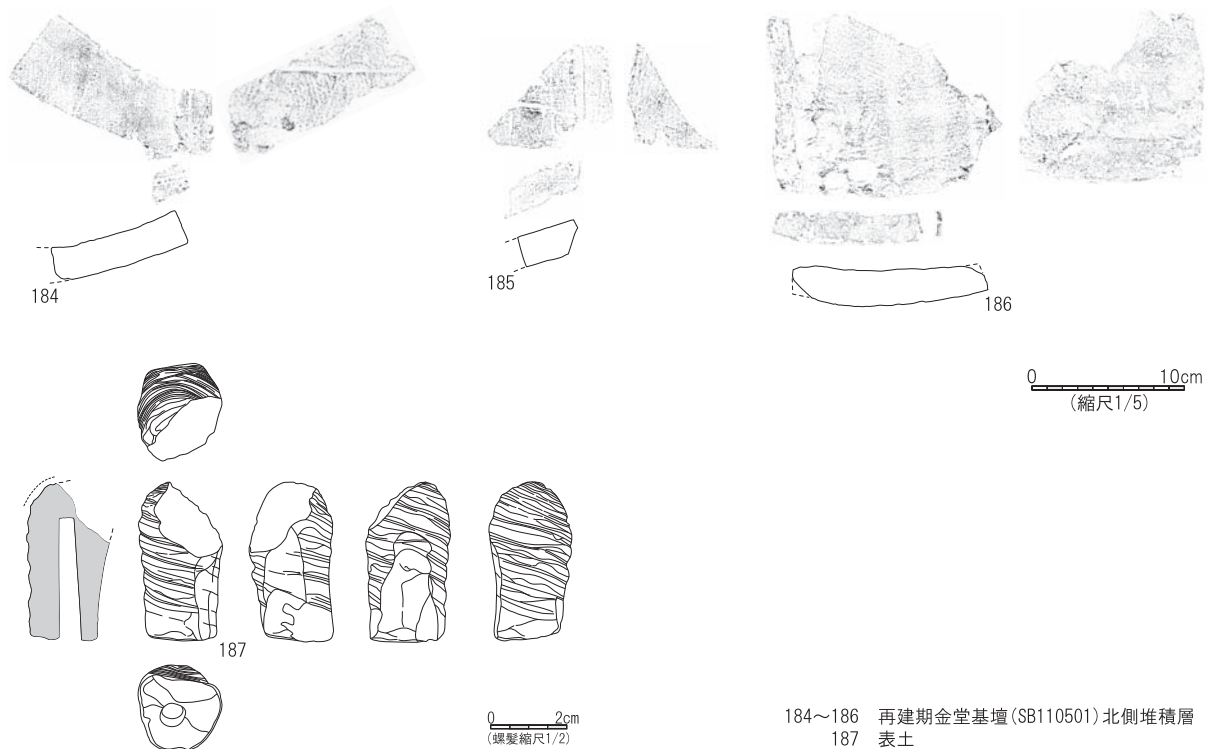




174~183 再建期金堂基壇(SB110501)  
北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

第33図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図18



第34図 興道寺廃寺第11次調査5トレンチ出土遺物実測図19

35~37は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。35の蓮弁、間弁は厚いが、中房の蓮子に潰れがある。外縁幅16mmで、一部に粘土の継ぎ足しがあり、瓦当裏面は不定方向のナデを施す。36の瓦当外縁は薄く作り、蓮弁、間弁ともに肉厚である。瓦当裏面は不定方向に粗いナデを施し、丸瓦部の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。同一個体の別資料の丸瓦部の頂部に釘穴がある。37は丸瓦部の広端部。凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は瓦当接合のため強い縦ナデを施す。

38~40は素弁九葉蓮華文軒丸瓦。38の瓦当裏面は不定方向にナデを施す。39は蓮弁、間弁が肉厚で、範傷はない。丸瓦部の凸面は横ナデを施す。40の瓦当外縁には凸線の鋸歯文を施す。丸瓦部の凸面は強い縦ナデを、凹面は不定方向のナデを施す。

41~45は弧線が厚いI型式の三重弧文軒平瓦。41の凹面は縦ナデを施す。42・43・44の凸面は花卉型押しを施し、凹面は強い縦ナデを施す。45の弧線は丁寧に作り、凸面は花卉型押しを施すが、剥離した部分の平瓦部の凸面には側縁に沿って平行叩きを施している。凹面は部分的に縦ナデを施す。

46~48は弧線が鋭いII型式の三重弧文軒平瓦。46の丸瓦部の凸面は横ナデを施す。47の丸瓦部の凸面は縦ナデを施し、凹面は瓦当付近で横ナデを施す。48の弧線はやや鈍く、平瓦部の凹面は模骨痕を留める。

49は扁行唐草文軒平瓦。49の瓦当文様は精緻に作り、平瓦部の凸面は横ナデを施し、凹面は瓦当付近で横ナデを施す。

50は鬼板瓦もしくは鴟尾の一部と思われる。50の外面は蓮華文をモチーフとした文様の型押しを施す。内面は縦ナデを施し、一部に布目を留める。

51~97は無段式丸瓦。51~58の凸面は側縁に斜交した平行叩きを施し、横ナデを加えるが、53・57のナデは強い。全体的に叩き目を薄く残す。51・54の凹面は模骨痕を留める。53・57の凹面の一部に縦ナデを施す。55の凹面に粘土板の接ぎ痕、56の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。

59の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、部分的に横ナデを施す。興道寺廃寺出土の無段式丸瓦の凸面叩きに正格子原体が用いられた唯一の確認例である。59の凹面は模骨痕を留める。

60・61・63の凸面は横ナデを施す。62の凹面は布綴じ合わせ痕、63の凹面は模骨痕、糸切り痕を留める。64・

65の凸面は強い横ナデ、66の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。67の凹面は布綴じ合わせ痕が残る。68～73の凸面は横ナデを施し、69の凸面は部分的に指頭圧痕を留める。69の凹面は模骨痕、70・72・73の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。71の凹面の一部に縦ナデを施す。74の凸面は強い横ナデを施し、凹面は模骨痕を留め、部分的に縦ナデを施す。75・76の凸面は強い横ナデを施す。75の凹面は部分的に縦ナデを施す。77の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は布綴じ合わせ痕を留める。79・80の凸面は横ナデを、81・82の凸面は強い横ナデを施す。83・84の凸面は横ナデを施し、83の凹面は糸切り痕を留める。85の凸面は強い横ナデを施し、凹面は一部縦ナデを施し、凹面側縁に幅の広い削りを加える。86は側縁に向かって薄く作る。凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は不定方向にナデを施す。87の凸面は横ナデを施す。88の凸面は強い横ナデを施し、凹面の一部に縦ナデを施す。89の凸面は横ナデを基本に、一部、不定方向にナデを施す。なお、側面の凹面側のみ削りを加え、凸面側は未調整であることから有段式丸瓦の可能性もある。90の凸面は横ナデを、91・92の凸面は強い横ナデを施す。92の凹面に布綴じ合わせ痕を留める。92の側面の一部で凸面側のみ削りを施さず、未調整としていることから有段式丸瓦の可能性もある。93の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。94は摩耗が激しい。95の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。95の凹面は側縁付近に強い縦ナデを施す。96の凸面は横ナデを施す。97の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は布綴じ合わせ痕を留める。

98～112は有段式丸瓦。基部から玉縁部までの凹面は段をもたず、緩やかに作る。側面の凹面側のみ削りを施し、凸面側は未調整のため、凹凸が激しいものがほとんどである。

98～100の凸面は強い横ナデを施す。99の凹面は布綴じ合わせ痕、100の凹面に模骨痕を留める。101・107・110の凸面は横ナデを施す。102は全体的に摩耗が激しい。103・105・106・108・109の凸面は強い横ナデを施す。104の凸面は横ナデに基本に部分的に不定方向に強いナデを施す。105・109の凹面に布綴じ合わせ痕、110の凹面の広端付近に模骨端部の痕跡を留める。111の凸面は横ナデを施し、部分的に縄叩きの痕跡を留める。112の凸面は強い横ナデを施し、ナデによる線条が顕著である。112の凹面の一部は縦ナデを施す。

113～186は平瓦。113の凸面は側縁に斜交して平行叩きを全体に施した後、部分的に横ナデを加える。1単位6本からなる叩き目原体が確認できる。113の凹面は全体に縦ナデを施す。114の凸面は側縁に斜交して平行叩きを施し、縦ナデを加え、叩き目が薄く残る。114の凹面の一部は縦ナデを施す。115～122の凸面は正格子叩きを施し、叩き目が薄く残る。115・118・119の凸面は側縁に平行して、122の凸面は斜交して正格子叩きを施した後、横ナデを加える。116の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、横ナデに加えて縦ナデを加える。116の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。117の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、弱い横ナデを加える。120・121の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施した後、強い横ナデを施す。123～130の凸面は斜格子叩きを施し、叩き目が比較的良好に残る。123の凸面は側縁に斜交して斜格子叩きを重複させながら施し、強い横ナデを施す。124～127の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、125の凸面は部分的に縦ナデを加える。125の凹面は縦ナデを施す。126の凹面は糸切り痕を留める。128の凸面は側縁に平行して斜格子叩きを施し、部分的に横ナデを加える。叩き目原体が確認できる。128の凹面は部分的に縦ナデを施す。129の凸面は側縁に斜交して斜格子叩きを施した後、狭端凸面付近を除いて強い縦ナデを加える。129の凹面は模骨痕を留める。130の凸面は側縁に斜交して斜格子叩きを施し、横ナデに加えて縦ナデを施し、叩き目が潰れる。

131の凸面は強い横ナデを施し、凹面は縦ナデを施す。132の凹面側縁に幅の広い削りを施し、器厚を減じる。132・133・141・150・151・156・157・160・161・167・171・172の凸面は横ナデを施す。132の凹面は糸切り痕を留める。133の凹面は一部に縦ナデを施す。134～139・153・158の凸面は強い横ナデを施す。134・159の凹面の一部は縦ナデを施す。135・138の凹面は模骨痕、136の凹面は模骨痕、糸切り痕を留める。140の凸面は横ナデに加えて強い縦ナデを施し、凹面は布綴じ合わせ痕を留める。142～144・147・154・155・159・165・168の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。144の凹面は模骨痕を留める。145・152・168の凸面は強い横ナデを施し、部分的に線条が残る。145の凹面は大部分に強い縦ナデを施す。146の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。146の凹面は布綴じ合わせ目を留める。148・170の凸面は削り状の強い縦ナデを施す。162の凸面は横ナデに加

えて強い縦ナデを施す。163の凸面は横ナデに加えて部分的に縦ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。168・169・171の凹面は模骨痕を留める。172～185は側縁に沿って縄叩きを施すが、172・173・176・178～181・183・184は横ナデを加える。174の凸面は縄叩きの後、狭端付近のみに強い横ナデを施す。182・185は強い横ナデによって段を作る。186の凸面は縄叩きを施し、不定方向に弱いナデを施す。172・173は部分的に叩き目が残る、177～185は叩き目が薄く残る。172・173・175・177・179・182・183・185の凹面は模骨痕が残る。186の凸面側の側面を斜めに大きく削る。

187は熨斗瓦と考えられる。凸面は強い横ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。

## C. 第12次調査6トレンチの調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.5～24.6mである。トレンチのほとんどが第11次調査5トレンチと重複する。

表土の耕作土となる暗褐色土（層厚0.15～0.3m）下、トレンチの南端では標高24.45m付近で再建期金堂基壇の検出面に至り、北側では黒褐色土（層厚0.1m）からなる瓦溜まり層である堆積層が分布し、標高約24.1～24.2mで暗褐色土からなる再建期の整地面に至る。第11次調査5トレンチ調査段階に堆積層の検出瓦を取り上げているため、表土がやや厚く、堆積層がやや薄くなっている。

表土から須恵器杯（杯H蓋）1点、須恵器杯（杯H）底部もしくは杯蓋（杯H蓋）天井部2点、土師器甕1点、製塩土器7点、土壁2点、鉄釘1点、無段式丸瓦15点、平瓦22点、瓦小片40点が破片で出土した。

### ② 検出遺構の概要

表土下で再建期金堂基壇SB120601の北辺を再検出し、北面階段の痕跡および周囲の再建期の整地面を再検出した。

### ③ 建物基壇および整地面

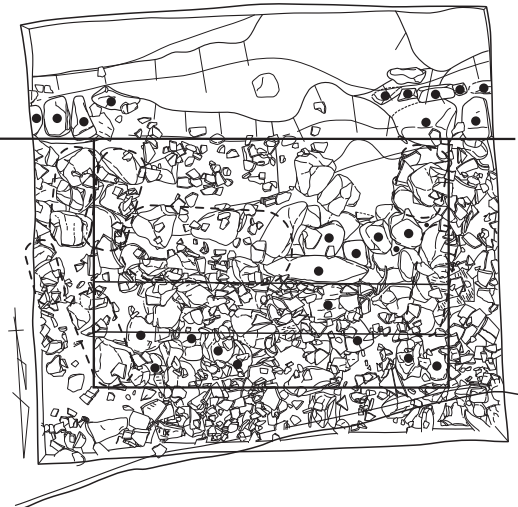
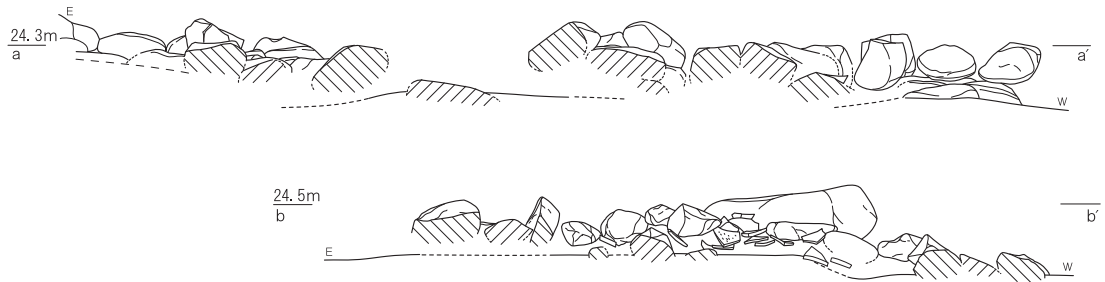
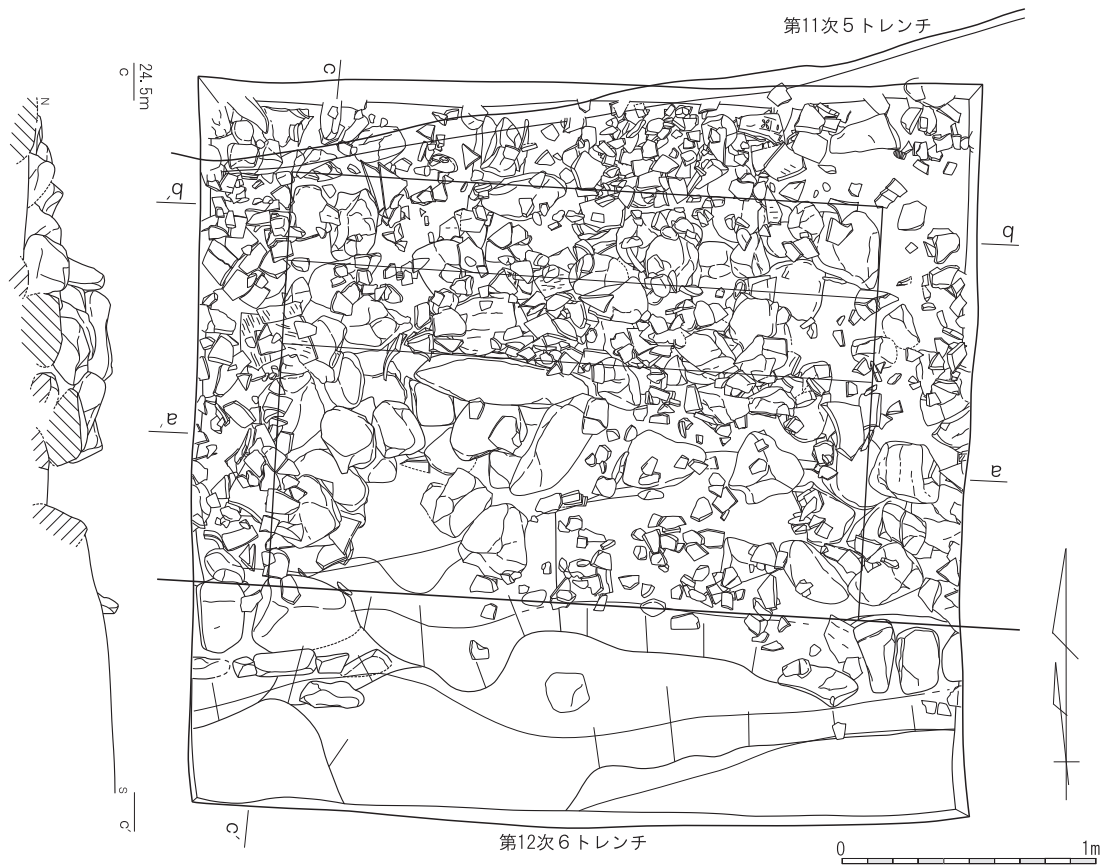
<再建期金堂基壇SB120601>

SB120601は第11次調査5トレンチ検出の基壇北辺の中央部分を再検出したものである。基壇北面の中央に取り付く階段は、階段部分に基壇北辺の石積みが見られないことから基壇構築時に基壇と階段を一体的に造ったものと考えられる。階段の踏み面の1段目、2段目が比較的良好に残り、階段の東西側面の崩れた痕跡を確認できる。

階段幅は東西幅2.35～2.4m、階段の出は南北1.64mである。階段の1段目、2段目の踏み面の幅がそれぞれ0.37m、0.35mほどで、1段目の標高約24.1m、2段目の標高約24.22mと高低差が0.2m強であることから、元々の基壇上面までの階段の踏み面を5段として、5段目の基壇上面までの高さは1m弱に復元できる。

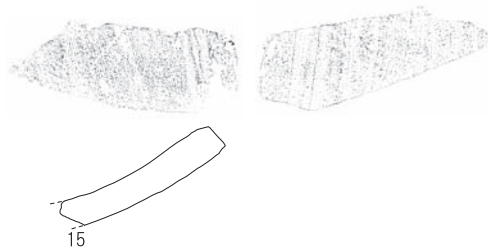
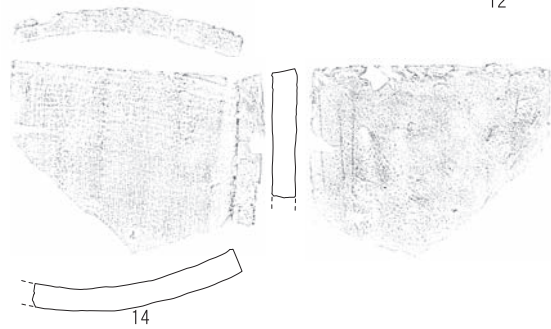
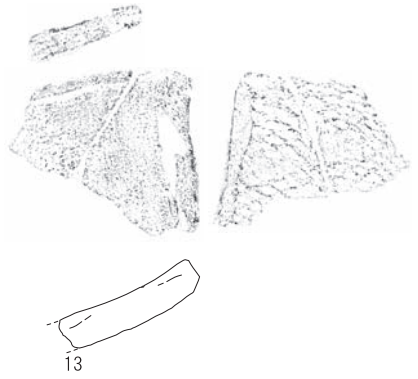
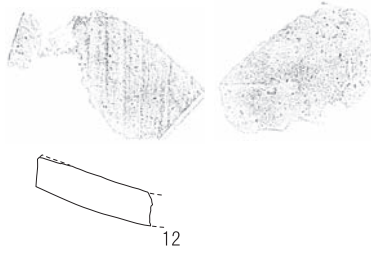
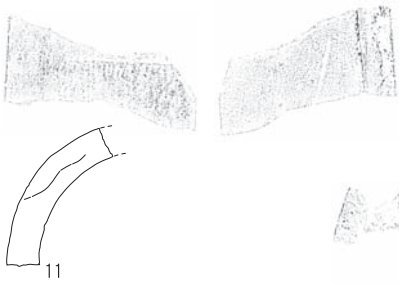
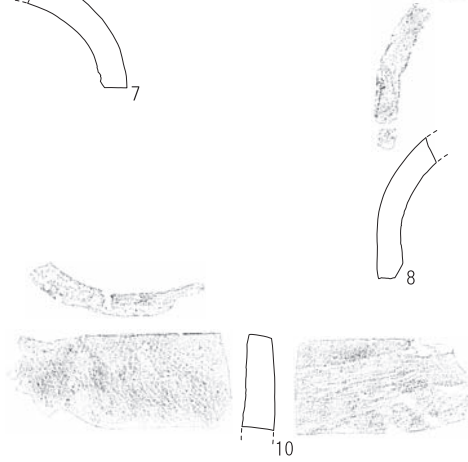
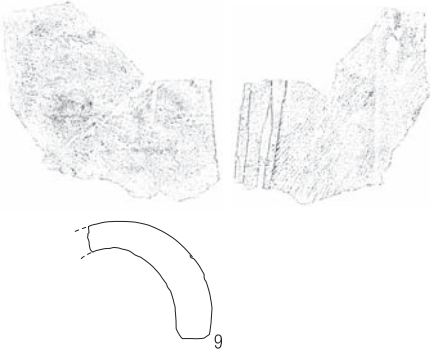
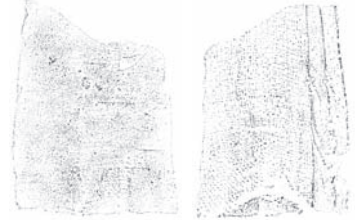
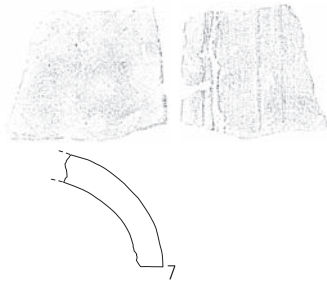
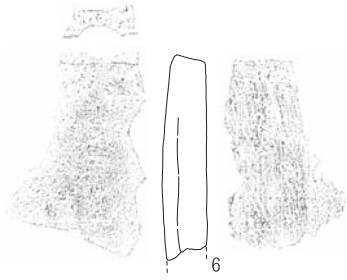
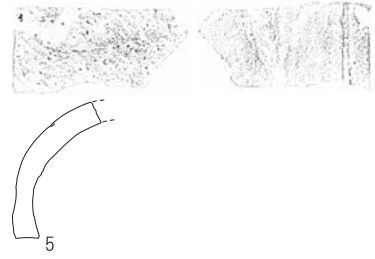
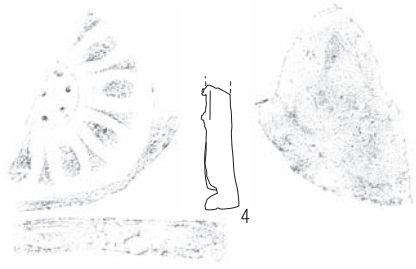
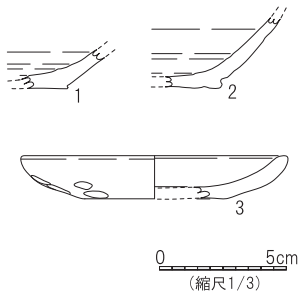
階段の踏み面の1段目は1辺が0.2mほどのやや小ぶりの石材の安定面を上に向けて敷き並べ、間に瓦片を水平に詰めたようにして踏み面としている。階段前面の整地面の標高24.0～24.1m、階段の1段目の石材の下部はこの整地面に据えられている状況を検出した。2段目と3段目の踏み面の一部にも敷き石の痕跡が認められることから、階段の踏み面は石敷きであった可能性が高い。2段目と3段目との間には幅0.7mほどの長い石を3段目の前壁として用いている。階段の3段目以上の改変が激しいが、基壇そのものが相当の削平を受けていることを考えれば、やむを得ないものと考えられる。階段が崩された部分から平高台をもつ土師器碗が出土しており、大体の寺院の廃絶時期を示している。

階段の側面は概述のとおり基壇北辺の小口積みで積まれた石積みの2段目が東西ともに縦小口積みとなる部分から北に階段の側面が延び、長辺0.3m内外の人頭大の自然礫の小口面を外側に向けながら基壇石積みと段数を合わせながら積み上げたものと考えられる。しかし、東西の側面ともに石積みが崩れており、西側の側面で辛

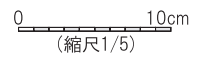


● 原位置を保つ、またはほぼ原位置を保つもの  
 ○ 比較的原位置に近いもの

第35図 興道寺廃寺金堂基壇北面階段平面図・立面図 (縮尺1/30)



1~15 再建期金堂基壇(SB120601)北側堆積層



第36図 興道寺廃寺第12次調査6トレンチ出土遺物実測図1

うじて石積みの痕跡を留めている。

階段構成材の石種は花崗岩、砂岩が主体を占めている。

基壇および北面階段の周囲の黒褐色土からなる堆積層から須恵器杯蓋（杯H蓋）1点、杯（杯H）1点、杯（杯H）底部もしくは杯蓋（杯H蓋）天井部1点、杯（杯A）1点、杯蓋（杯B蓋）1点、壺1点、土師器皿7点、製塩土器1点、砥石1点、鉄釘1点、素弁十葉蓮華文軒平瓦1点、無段式丸瓦28点、有段式丸瓦41点、平瓦136点、瓦小片105点が破片で出土した（第36図1～第37図26）。



16～26 再建期金堂基壇(SB120601)北側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

第37図 興道寺廃寺第12次調査6トレンチ出土遺物実測図2

なお、トレンチ北東隅部の付近には講堂基壇から延びてくる黒褐色土が、微細遺物の混じる興道寺廃寺特有の再建期の整地層の特性を示していることから、再建期の金堂基壇の北側の整地面の上に再建期の講堂基壇の整地面が被覆している可能性が考えられる。

#### ④ 出土遺物

第36図1～第37図26は再建期金堂基壇北側の堆積層から出土した。

1～3は土師器皿。1・2は平高台の底部をもち、外面に糸切り痕を留める。3は手捏ねで作り、口縁部から底部にかけての外面に指頭玉痕を密に留める。口縁部内面は横ナデを施す。

4は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。外縁幅は不定で、部分的に太くなる箇所がある。花卉、間弁の一部の肉厚が薄くなり、間弁の一部に範傷がある。瓦当の一部に被熱痕が残る。

5～10は無段式丸瓦。5の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、横ナデを加える。5の凹面に布綴じ合わせ痕を留める。頂部に釘穴がある。6の凸面は強い横ナデを施し、凹面の一部に縦ナデを施す。軒丸瓦の丸瓦部の一部である可能性もある。7の凸面は横ナデを施し、凹面は模骨痕、布綴じ合わせ痕を留める。8・9の凸面は強い横ナデを施す。9の凹面は模骨痕を留める。10の凸面は側縁に斜交する縄叩きを施し、強い横ナデを加え、叩き目が薄く残る。

11は有段式丸瓦。11の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、弱い横ナデを加える。

12～26は平瓦。12の凸面は強い横ナデを施し、凹面は強い縦ナデを施す。13の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、弱い横ナデを加える。14の凸面は斜格子叩きを施した後、横ナデに加えて強い縦ナデを加え、狭端に沿って叩き目が残る。14の凹面は模骨痕を留める。15の凸面は強い縦ナデを施す。16の凸面は横ナデを施し、凹面の一部にナデを施す。17の凸面は強い横ナデを施し、凹面は糸切り痕を留める。18の凸面は弱い横ナデを施し、凹面に模骨痕を留める。19～21・23の凸面は横ナデを施す。22の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面に模骨痕を留める。24～26の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、叩き目が残る。24は縄叩きに加えて弱い横ナデを施し、25は横ナデに加えて強い縦ナデを施す。26は縄叩きの後、強い横ナデを施す。24の凹面に模骨痕を留める。

### D. 第10次調査5トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地および削平された法面で、地表面の標高は24.65mである。トレンチの中央付近は第6次調査2トレンチと重複する。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.35～0.4m）下、トレンチの西側から中央にかけては標高24.35～24.4m付近で創建期および再建期の金堂基壇の検出面に至り、東側では黒褐色土（層厚0.2m）からなる瓦溜まり層である堆積層が分布し、標高24.1～24.3m付近で黒褐色土、暗褐色砂質土からなる再建期の整地面に至る。表土から須恵器杯蓋（杯H蓋）4点、杯蓋（杯B蓋）1点、壺1点、土師器甕2点、皿1点、無段式丸瓦53点、平瓦133点、瓦小片44点が破片で出土した。

トレンチの東側では再建期の整地面下、標高23.75～23.95mで創建期金堂基壇に伴う黒褐色土、暗褐色土、褐色砂礫土などからなる整地面に至り、標高23.6～23.75mで地山面となる暗褐色砂礫土層の上面に至る。

#### ② 検出遺構の概要

表土下で再建期金堂基壇SB100502の積み土と東辺石積み、これに伴う再建期の整地面を検出した。

後世に削平された法面の部分を断ち割り状に垂直に掘り下げ、創建期金堂基壇SB100501の積み土と東辺、再建期金堂基壇SB100502の積み土の位置関係を土層断面で検出するとともに、SB100502積み土から東側の整地面



にかけての2箇所東西に長い断ち割りを行ったところ、SB100501に伴う創建期の整地面とSB100501の東辺に沿って南北の延びる溝SD100501、断ち割りの最下層で創建期の基壇造営に伴うと考えられる掘込地業痕を土層断面で検出した。

### ③ 建物基壇および整地面

#### 〈創建期金堂基壇SB100501〉

SB100501の基壇積み土と東辺および整地面は上位に位置するSB100502の基壇および整地面を部分的に断ち割り土層断面で検出した。第11次調査5トレンチで検出したように基壇の範囲には版築からなる締まった積み土が分布し、その部分の断ち割りの土層断面を見ると標高24.15m前後に地山面が位置し、その上に暗褐色土、暗褐色砂礫土、暗褐色粘土、黒色土、黒色砂質土、黒色粘土、黒褐色土、黒褐色砂質土、黒褐色粘土、にぶい黄褐色粘土、褐色粘土など多様な土砂を1～5cmほどの単位で水平に盛土して締めている。ただし、基壇東辺から2mほどの範囲では褐色粘質土、褐色土、黒色土、黒褐色粘土、にぶい黄褐色砂質土、黒褐色土、暗褐色粘質土などの多様な土砂を小ブロック単位に盛土するが、積み方に法則性は見られず、基壇外装が石積みであったとすれば裏込め土として小単位ごとに盛土したものと考えられる。

基壇東辺の構造は不明であるが、掘込地業によって地山層が垂直に掘削された痕跡を留めており、この部分が基壇東辺に沿って廻る雨落ち溝の西側の立ち上がりとなれば、おおよそ水平をなす地山面と垂直に削られた地山層との間の斜めに削平された地山面に基壇東辺が位置したものと考えられる。

基壇構築に伴う掘込地業は基壇東辺から東に向けて約2.3mの範囲で施されたもので、前述のとおり基壇東辺側、つまり西側では垂直に地山面を掘削し、東側では斜めに立ち上がるように最深の標高が23.55m付近まで掘削する。その後、基壇東辺は溝SD100501としてそのままとし、東側に黒色土、黒褐色土、黒褐色砂質土、黄褐色砂質土を大ブロック単位で不規則に盛土して整地面を造る。創建期の整地面の標高23.9mで東に向けて標高が低くなる。

#### 〈再建期金堂基壇SB100502〉

SB100502は基壇東辺を平面、土層断面で検出した。SB100502の東辺付近はSB100501の東辺からさらに東側に基壇の積み土を広げるように拡張し、東辺の石積みを施す。第11次調査5トレンチ検出の再建期金堂基壇北辺と同様の構築方法である。基壇の検出面は約24.2～24.35mで、SB100501の検出面より若干標高が低い、ほぼ同レベルであり、北辺と同様に一定の削平がされている。基壇積み土の部分は創建期基壇東辺の溝を埋めるように大ブロック単位で水平に黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、褐色砂礫土、黒褐色砂礫土、黒色土などを積み上げて盛土で造り、東辺に石積みを施す。

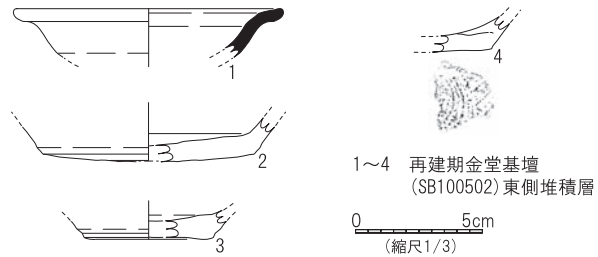
SB100502東辺の基壇外装は石積みで、基本的には基底石と2段目までが残るが、基壇縁辺から0.3mほど東にずり落ちるように2次的に移動している。基底石上面は標高24.3m前後、トレンチ北側の石積みは失われ、現存しない。石積みの基底石は長辺0.6m内外、短辺0.4mほどの大ぶりの自然石を横に長く取る。

SB100502東側の黒褐色土からなる堆積層から須恵器皿1点、土師器甕1点、皿5点、製塩土器3点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦1点、無段式丸瓦42点、三重弧文軒平瓦2点、偏行唐草文軒平瓦1点、平瓦118点、瓦小片47点が破片で出土（第38図1～第39図18）。

標高24.0～24.1mには基壇東辺の周囲に再建期の整地面が分布する。この整地面は黄褐色砂質土、黒褐色土、暗褐色土、暗褐色砂質土からなり、層厚も最大で0.35mに及ぶなど厚く、瓦片を多く含む。SB100502東辺の構築と併せて一連の地業の中で小ブロック単位に水平に積み、最上位に暗褐色砂質土を0.15mの厚みで水平に積んでいる。第6次調査2トレンチ、再建期金堂基壇SB100502東辺で完形に近い大ぶりの瓦が密に混入していたのはこの層にあたる。

#### ④ 溝

SD100501 はSB100501 東辺から東に0.5mほど離れて位置し、創建期の整地面で検出したこととなるが、溝の形成過程は創建期金堂基壇の東辺の構築に際して、掘込地業によって地山層を箱形状に掘りくぼめた後に東側に整地層を積み上げることで、結果として西側が基壇東辺に沿った溝となったものである。



第38図 興道寺廃寺第10次調査5トレンチ出土遺物実測図1

南北幅10.5m、南北に長く延びる。深さは創建期の整地面から0.33mであるが、北側では半分ほどの深さとなる。溝の断面形状は崩れた箱形で、前述のとおり埋土は再建期の金堂基壇東辺を造るにあたって溝を埋めるように大ブロック単位で水平に黒褐色土、暗褐色土、褐色土、黒褐色土、褐色砂礫土、黒褐色砂礫土、黒色土などを積み上げる。SB100501 東辺の雨落ち溝の一部と考えられる。

#### ⑤ 出土遺物

第38図1～第39図18は再建期金堂基壇東側の堆積層から出土した。

1は須恵器皿。復元口径10.5cm。口縁部を外方に強く引き出し、口縁端部を丸く収める。口縁部内外面に煤が付着する。

2～4は土師器皿。2の底部は中心がやや膨らむ平底で、外面はヘラ切り未調整である。底部内外面に煤が付着する。3の底部はややくぼみ、底部外縁に段をもつ。底部外面にヘラ切り痕が残る、底部内面に煤が付着する。4の底部は平底で、糸切り痕を留める。体部が外方に真っすぐ立ち上がる。

5は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。瓦当の外縁幅は不定で、中房の蓮子が欠損し、蓮弁、間弁の一部に範傷がある。

6～11は無段式丸瓦。6・7の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、強い横ナデを加え、叩き目がわずかに残る。凹面は模骨痕を留める。8の凸面は横ナデを施し、凹面は模骨痕、布綴じ合わせ痕を留める。9・10の凸面は強い横ナデを施す。11の凸面は弱い横ナデを施す。

12は三重弧文軒平瓦。瓦当の弧線は鋭く作る。平瓦部の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面に模骨痕が残る。

13～18は平瓦。13の凸面は側縁に直交する斜格子叩きを施し、全体に叩き目が残る。凹面は縦ナデを施す。14の凸面は斜格子叩きの後、横ナデを施し、潰れた叩き目がかすかに残る。凹面は模骨痕を留める。15の凸面は強い横ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。16の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面はわずかに模骨痕を留める。17の凸面は側縁に沿って縄叩きを施した後、横ナデに加えて縦ナデを施し、叩き目が辛うじて残る。18の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、横ナデを加える。凹面に模骨痕を留める。

### E. 第11次調査6トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.3～24.4mである。

表土の耕作土となる黒褐色土(層厚0.3～0.4m)下、トレンチの東側では標高24.0m付近で再建期金堂基壇SB110601の検出面に至り、西側では黒褐色土(層厚0.2m)からなる瓦溜まり層である堆積層が分布し、標高23.75～23.9m付近で黒褐色土からなる再建期の整地面に至る。

#### ② 検出遺構の概要

表土下で再建期金堂基壇SB110601の積み土と西辺を検出するとともに、これに伴う再建期の整地面を検出した。トレンチの東側に部分的に耕作攪乱が及んでいる。



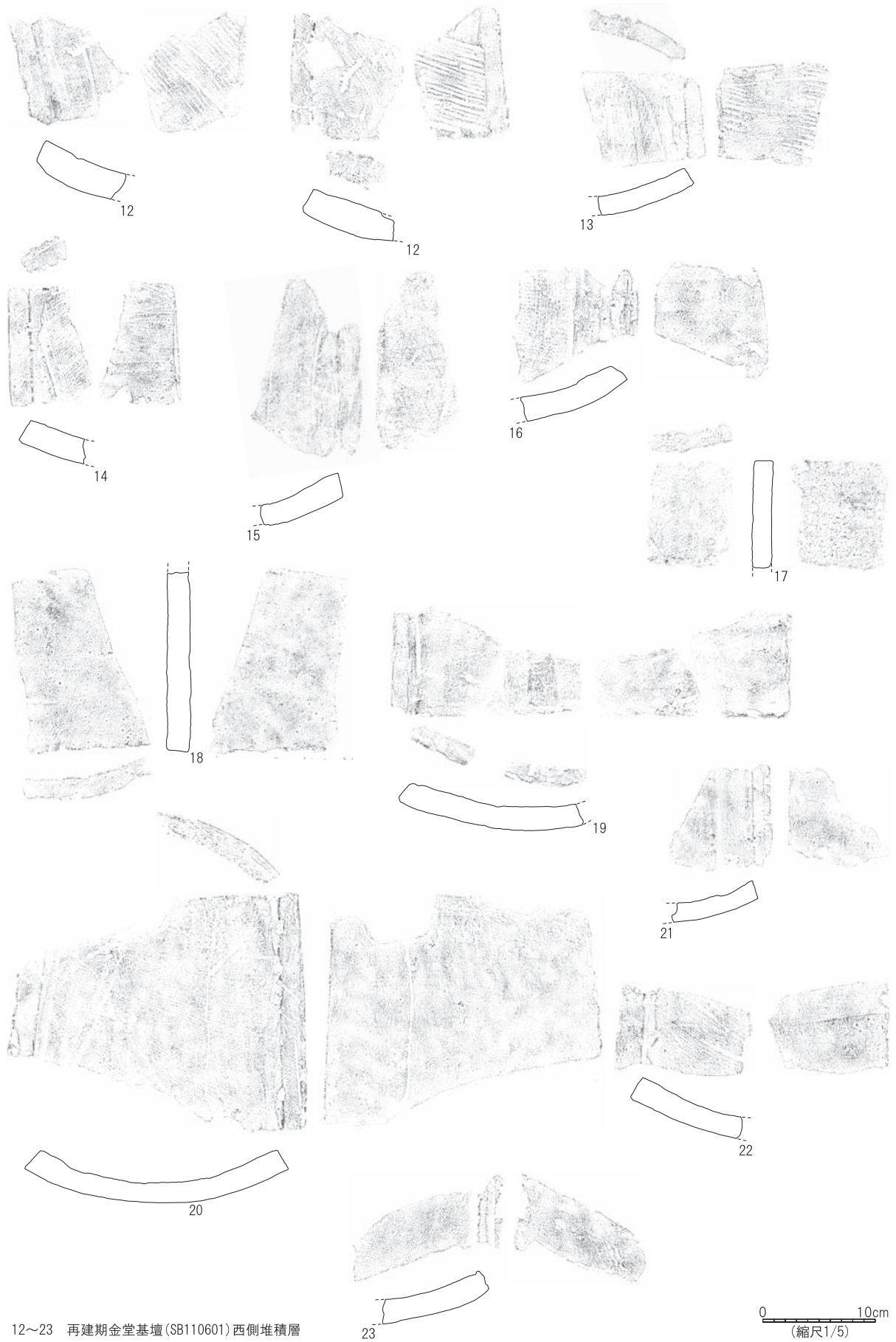
5~18 再建期金堂基壇(SB100502)  
東側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

第39図 興道寺廃寺第10次調査5トレンチ出土遺物実測図2



第40図 興道寺廃寺第11次調査6トレンチ出土遺物実測図1



12~23 再建期金堂基壇(SB110601)西側堆積層

第41図 興道寺廃寺第11次調査6トレンチ出土遺物実測図2

### ③ 建物基壇および整地面

〈再建期金堂基壇 SB110601〉

SB110601 は基壇西辺を平面、土層断面で検出した。再建期金堂基壇の北西隅部が位置する第 10 次調査 6 トレンチから基壇の西辺が南に延びている。基壇の検出面は標高約 24.0m で、基壇積み土は黄褐色土や黒褐色土の盛土で造ったものと考えられる。基壇西辺には石積みを施したようで、西側に約 0.4m ずり落ちた状態で基壇西辺石積みの基底石に相当すると思われる 3 石を検出している。長辺 0.3~0.4m の大ぶりの自然礫である。

基壇西辺から西にかけて拳大、人頭大の自然礫とともに瓦片が散在する。黒褐色土からなる堆積層から須恵器杯 (杯H) 2 点、甕 3 点、土師器甕 3 点、製塩土器 1 点、無段式丸瓦 66 点、有段式丸瓦 3 点、軒平瓦 3 点、平瓦 152 点、瓦小片 58 点が破片、細片で出土した (第 40 図 1~第 41 図 23)。

標高 23.75~23.9m には基壇西辺の周囲に再建期の整地面が分布する。整地面は黒褐色土層からなり、第 10 次調査 6 トレンチで検出した同種の再建期の整地面とほぼ同標高である。

### ④ 出土遺物

第 40 図 1~第 41 図 23 は再建期金堂基壇西側の堆積層から出土した。

1~7 は無段式丸瓦。1 の凸面は強い横ナデを施す。2 の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。3 の凸面は横ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。4 の凸面は横ナデを施し、凹面の布目は粗い。5 の凸面は弱い横ナデを施す。6 の凸面は強い縦ナデを施し、凹面は糸切り痕を留める。7 の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、強い横ナデを加え、わずかに叩き目が残る。

8 は有段式丸瓦。8 の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、横ナデを加え、薄く叩き目が残る。

9 は三重弧文軒平瓦。9 の弧線は鋭い。10・11 は扁行唐草文軒平瓦。10 の平瓦部の凸面は縄叩きの後、強い横ナデを施す。10・11 の平瓦部の凹面は模骨痕を留める。

12~23 は平瓦。12 の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、叩き目がよく残る。凹面は部分的に縦ナデを施す。13 の凸面は側縁に直交する平行叩きを施し、部分的に縦ナデを加え、叩き目を薄く残す。凹面は縦ナデを施す。14 の凸面は側縁に直交する平行叩きの後、横ナデを施し、狭端付近に叩き目が残る。凹面は縦ナデを施す。15 の凸面は側縁に斜交する斜格子叩きを重複させながら施し、縦ナデを施す。凹面は強い縦ナデを施す。16 の凸面は横ナデを施し、凹面は縦ナデを施す。17 の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、強い横ナデを加える。18 の凸面は弱い横ナデを施し、凹面は糸切り痕を留める。19 の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。20 の凸面は強い横ナデを施し、凹面は糸切り痕を留める。21 の凹面は模骨痕を留める。22・23 の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、強い横ナデを施す。

## F. 第 10 次調査 6 トレンチの調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 24.0~24.4m である。

表土の耕作土である黒褐色土 (層厚 0.2~0.45m) 下、上位に部分的に多くの礫が混じる黒褐色土 (層厚 0.25m) からなる礫層、下位に黒褐色土 (層厚 0.1~0.5m) からなる瓦溜まり層である堆積層が分布し、標高 23.5~23.85m 付近で黒褐色土からなる再建期の整地面に至るが、西端付近でさらに整地面が落ち込み、標高が急激に低くなる。

表土から須恵器甕 1 点、無段式丸瓦 10 点、平瓦 41 点、瓦小片 8 点が破片で出土し、表土下の礫層から須恵器杯蓋 (杯H蓋) 4 点、杯蓋 (杯G蓋) 1 点、杯 (杯A) 2 点、杯 (杯B) 2 点、皿 2 点、甕 2 点、須恵器小片 3 点、土師器甕 1 点、製塩土器 8 点、中世陶器 1 点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦 1 点、無段式丸瓦 87 点、平瓦 289 点、瓦小片 60 点が破片、細片で出土した (第 42 図 1~14)。

② 検出遺構の概要

堆積層下で再建期金堂基壇の北西隅部に伴うと考えられる整地面を検出した。トレンチの東端は第6次調査3トレンチと重複し、再建期金堂基壇 SB060301 の北辺を再検出した。

③ 整地面

トレンチの位置は再建期金堂基壇の北西隅部付近にあたるが、基壇そのものは未検出であり、基壇に伴う再建期の整地面が方形の壇状をなして分布する状況を確認した。トレンチ東側での整地面の標高23.85mで、西と北に向かって傾斜し、整地面の標高が急激に落ち込み、トレンチ西端では標高23.5m以下まで低下する。



1~14 再建期金堂基壇北西側堆積層(礫層)

第42図 興道寺廃寺第10次調査6トレンチ出土遺物実測図1

整地面上には拳大の礫とともに瓦片が多く分布し、瓦溜まり層を構成するが、これとは出土状況が異なり、整地面から0.2~0.3mほど浮いた状態で東西方向に1.5mほど延びる石列を検出した。この石材法量は長辺0.3m前後、短辺0.2~0.3mほどの自然礫で、どちらかと言えば南側に面を揃えている。後世の人為的な再建期金堂基壇の北辺石積みの2次的移動があったものと考えられる。



1~16 再建期金堂基壇北西側堆積層

第43図 興道寺廃寺第10次調査6トレンチ出土遺物実測図2



礫層下、堆積層からなる黒褐色土から須恵器杯蓋（杯H蓋）1点、杯（杯H）2点、杯（杯H）もしくは杯蓋（杯H蓋）2点、甕3点、壺2点、須恵器小片3点、土師器甕5点、皿4点、製塩土器3点、単弁八葉蓮華文軒丸瓦1点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦1点、無段式丸瓦40点、三重弧文軒平瓦1点、偏行唐草文軒平瓦2点、平瓦266点、瓦小片41点が破片で出土（第43図1～第44図24）。

④ 出土遺物

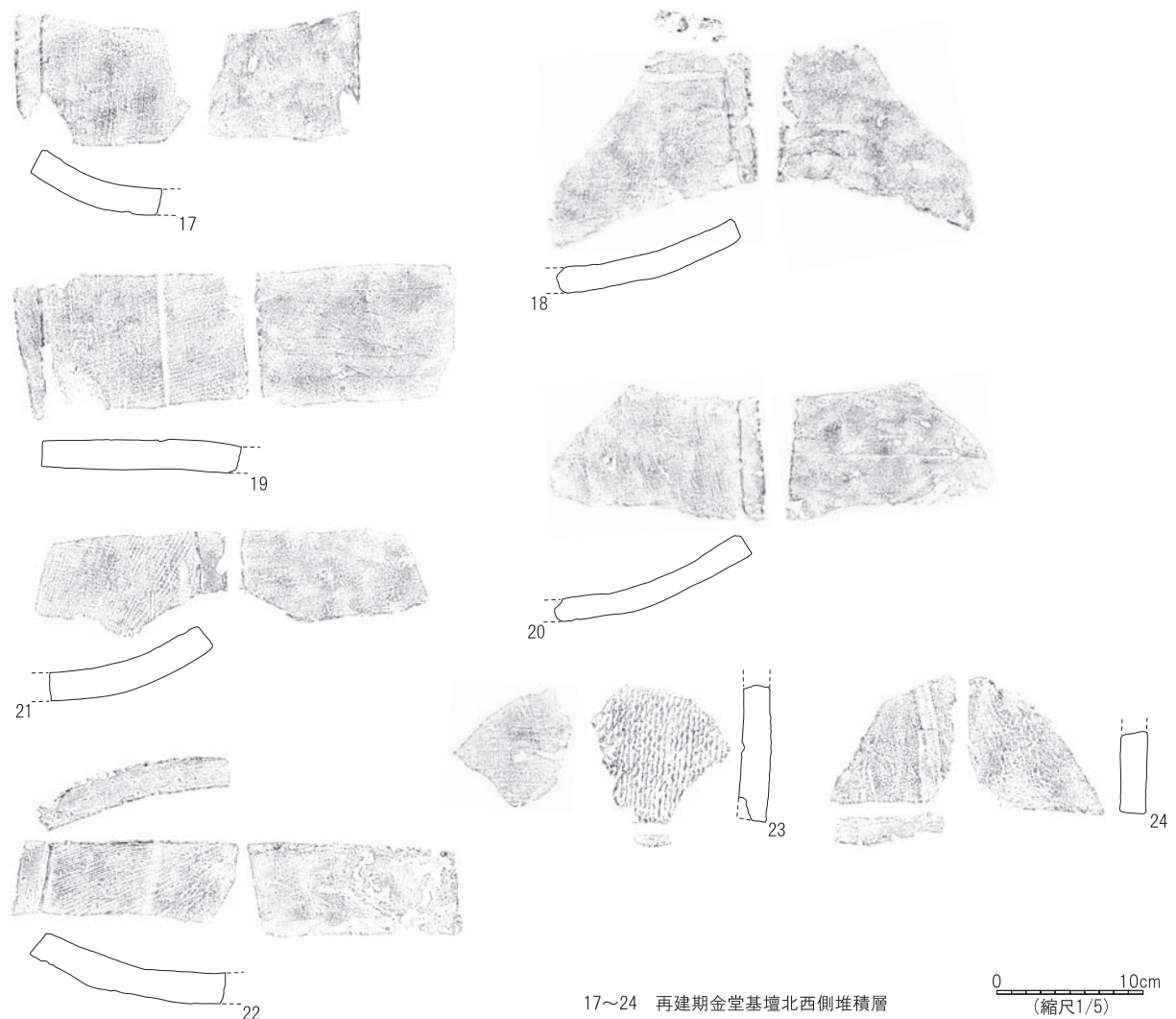
第42図1～14は再建期金堂基壇北西隅部付近の礫層から出土した。

1・2は須恵器杯蓋（杯H蓋）。1は天井部と口縁部の境に稜をもち、口縁端部に明瞭な段をもつ。2は天井部と口縁部の境がわずかに屈曲し、口縁部は丸みを帯びる。口縁部内面に沈線をもつ。3・4は須恵器皿。3は底部外面に回転ヘラ削りを施し、口縁部は短く上外方に延びて、口縁端部を鋭く収める。4は平底の底部で、口縁部が外方に真っすぐ延びる。底部外面は回転糸切りを施し、口縁部外面は強いナデを施す。

5は越前焼甕。胴部内外面に弱いナデを施す。

6は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。瓦当の蓮弁の一部に範傷が残る。

7～9は無段式丸瓦。7の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。8の凸面は横ナデを施し、凹面は糸切り痕を留める。9は丸瓦をさらに縦に半裁する。凸面に横ナデを施す。側面の片側には削りに加えて凹面、凸面の側縁に幅の狭い削りを加えるが、他方の側面は未調整である。



17～24 再建期金堂基壇北西側堆積層

0 10cm  
(縮尺1/5)

第44図 興道寺廃寺第10次調査6トレンチ出土遺物実測図3

10は偏行唐草文軒平瓦。凸面は強い横ナデを施し、わずかに段をもつ。凹面は模骨痕、布綴じ合わせ痕を留める。

11～14は平瓦。11の凸面は側縁に直交する斜格子叩きを施し、削り状の強い縦ナデを加え、凸面の狭端付近に潰れた斜格子の叩き目が残る。凹面は模骨痕を留める。12・13の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面はわずかに模骨痕を留める。14の凸面は強い横ナデを施し、凹面に模骨痕を残す。側面、凹面側縁に削りを施す。

第43図1～第44図24は再建期金堂基壇北西隅部付近、礫層下の黒褐色土からなる堆積層から出土した。

1は須恵器甕。胴部外面は格子叩きを施し、胴部内面は同心円の当て具痕を留める。

2・3は土師器皿。2の口縁部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部内面に細かい刷毛目を施す。3の口縁部は外方にやや外反しながら延び、口縁端部を鋭く収める。口縁部外面に指頭圧痕をわずかに留める。

4は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。瓦当外縁は二重圏線で、瓦当の裏面に丸瓦部の広端面との接合面が残る。

5は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。丸瓦部凹面の広端付近に瓦当をはめ込んで接合する。丸瓦部の凸面は側縁に直交する平行叩きを施し、全体に叩き目が残る。凹面に模骨状の痕跡を留める。

6～10は無段式丸瓦。6・7の凸面は側縁に斜交、直交する平行叩きを施し、横ナデを加える。叩き目が部分的に残る。7の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。8の凸面は強い横ナデを施し、凹面は模骨痕、布綴じ合わせ痕を留める。9の凸面は弱い横ナデを施す。10の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。

11は偏行唐草文軒平瓦。平瓦部の凸面は削り状の強い横ナデを施し、瓦当から約8.5cmのところ段顎となる。凹面に模骨痕を留め、瓦当付近に幅2.5cmほどの強い横ナデを施す。

12～24は平瓦。12の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、叩き目を全体に残す。凹面は縦ナデを施す。13の凸面は側縁に直交する正格子叩きを施し、横ナデを加え、叩き目が部分的に薄く残る。凹面は縦ナデを施す。14の凸面は横ナデを施し、凹面は縦ナデを施す。凸面の一部に布目が付着する。15の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、強い横ナデを加え、叩き目が部分的に残る。凹面は模骨痕を留める。16の凸面は側縁に平行する斜格子叩きの後、横ナデに加えて強い縦ナデを施す。一部に布目が付着する。16の凹面は部分的に横ナデを施す。17・18の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。19は平瓦に見られる緩やかな弧状の反りがなく、横断面が側面に向かって真っすぐ延びている。凸面は強い横ナデを施し、凹面は糸切り痕を留める。20～22の凸面は強い横ナデを施す。23の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、24の凸面は側縁に斜交する縄叩きの後、横ナデを施す。ともに叩き目を残す。20～24の凹面は模骨痕が残る。

## G. 第10次調査4トレンチの調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は23.7mである。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2～0.3m）下、トレンチ北東隅では標高23.6m付近で、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、灰白色粘土などからなる再建期の整地面に、南東隅では同じく標高23.6m付近で黒褐色土からなる創建期の整地面に至る。トレンチの西側には黒色土、黒褐色土、暗褐色土（層厚0.1m）などからなる堆積層が分布し、標高23.4m付近で再建期の整地面および地山面の褐色砂礫土層の上面に至る。表土から無段式丸瓦15点、平瓦38点、瓦小片19点が破片で出土した。

トレンチ東側の再建期整地面と創建期整地面下、標高23.4m付近で地山面に至るが、再建期整地面の下位にあたる部分では溝状に深くなり、標高23.1mで地山面に至る。

### ② 検出遺構の概要

表土下で創建期金堂基壇南西隅部に伴うと考えられる溝 SD100401、整地面を検出するとともに、再建期金堂

基壇の南西隅部に伴うと考えられる再建期の整地面を検出した。トレンチの北端は第2次調査1トレンチと重複する。

### ③ 整地面

トレンチの位置は創建期金堂基壇の南西隅部付近にあたるが、基壇そのものは未検出で、基壇に伴うと考えられる創建期の溝と整地面を検出した。創建期の整地面の標高 23.45～23.55mで、南と西に向かって整地面の標高が緩やかに低くなる。黒褐色土を一括して水平に盛土して整地層とし、拳大の礫を含みながらも瓦の混入は見られない。

再建期の整地面の上に分布する黒色土からなる堆積層から須恵器杯蓋（杯H蓋）16点、杯蓋（杯G蓋）1点、杯（杯H）5点、杯（杯A）1点、高杯蓋1点、甕10点、壺7点、隼3点、須恵器小片3点、土師器甕20点、壺1点、製塩土器8点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦2点、無段式丸瓦62点、三重弧文軒平瓦1点、偏行唐草文軒平瓦1点、平瓦179点、瓦小片64点が破片、細片で出土している（第45図1～第46図24）。

トレンチの北東隅付近で創建期の整地面、地山面を掘り込む溝 SD100401 を検出したが、黒色土、黒褐色土、暗褐色土、褐色土、灰白色粘土などからなる溝の埋土がそのまま再建期の整地面をなし、大ブロック単位に不規則に溝を埋め、再建期の整地面を造る。整地面の標高は 23.6～23.65mで、北側に向けて若干標高が高くなる。この再建期の整地土中、つまり溝の底面付近の埋土から須恵器杯蓋1点、杯（杯A）1点、土師器甕1点、軒丸瓦1点（素弁九葉蓮華文軒丸瓦か）、無段式丸瓦21点（10個体程度か）、平瓦6点、瓦小片1点が破片、細片で出土した（第47図1～9）。

なお、第2次調査1トレンチの西端で検出され、地山面から掘り込まれた方形をなす土坑 SK020102 は北側の掘り込みのラインが再建期金堂基壇南辺の西側の推定線に沿っており、再建期に伴う掘込地業痕の可能性もある。

### ④ 溝

SD100401 は創建期金堂基壇南西隅部を想定する地点からすぐ南に位置する。その形成過程は第10次調査5トレンチ検出のSD100501と同様、創建期金堂基壇の南西辺の構築に際して、掘込地業によって地山層を箱形状に掘削し、南側に整地層を盛ることで基壇の雨落ち溝としたものと考えられるが、基壇東辺に伴う溝と異なることは溝の外側の整地が薄いことである。南北幅 1.35m、東西検出長 2.42m、深さは創建期の整地面から 0.33m である。溝の断面形状は箱形で、埋土は前述のとおり再建期の整地土である。

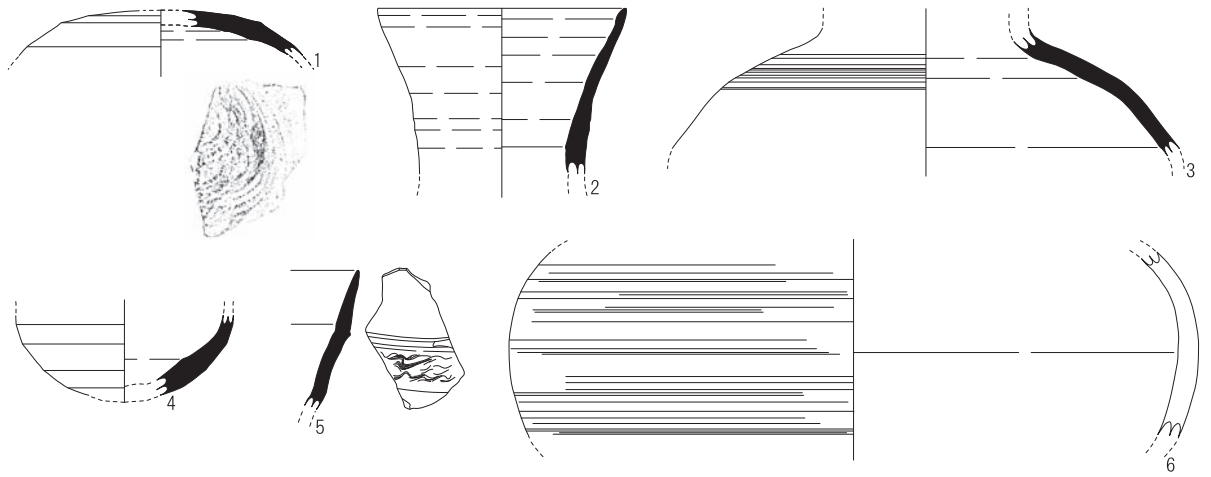
### ⑤ 出土遺物

第45図1～第46図24は、金堂基壇南側の再建期整地層を被覆する黒色土からなる堆積層から出土した。

1は須恵器杯蓋（杯H蓋）。天井部外面は回転ヘラ削りを施し、天井部内面は同心円の当て具痕をわずかに留める。2は須恵器直口壺。復元口径は9.8cm。口縁部はやや開いて立ち上がり、口縁端部を鋭く収める。3・4は須恵器壺。3の体部は大きく張り、体部外面に弱いカキ目を施す。4の体部は強く内彎し、外面に回転ヘラ削りを施す。隼の体部下半の可能性もある。5は須恵器隼。口縁部は外上方に真つすぐ立ち上がり、口縁端部を鋭く収める。口縁部外面に1条の突帯を巡らせ、その下に粗い波状文を施す。6は土師器壺。体部は丸みを帯び、中位で最大径となる。体部外面に櫛状工具による横ナデを、体部内面は丁寧な横ナデを施す。

7・8は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。7は丸瓦部凹面の広端付近に瓦当を接合した痕跡が確認でき、丸瓦部の凸面に弱い縦ナデを施す。8は素弁十葉蓮華文軒丸瓦とみられる軒丸瓦の丸瓦部で、凹面に瓦当接合に伴う粘土貼り付け痕を留める。凸面に横方向の平行叩きを施した後、強い横ナデを加え、凹面には幅の狭い模骨痕を留める。

9～14は無段式丸瓦。9・10の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、横ナデを加え、叩き目が全体に残る。9の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。11は薄く作り、凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。12～14の凸面は強い横ナデを施す。14の凹面は糸切り痕、布綴じ合わせ痕を留める。



0 10cm  
(縮尺1/3)



0 10cm  
(縮尺1/5)

1~15 再建期金堂基壇(SB100402)南西側堆積層

第45図 興道寺廃寺第10次調査4トレンチ出土遺物実測図1

15は三重弧文軒平瓦。弧線は太く、凸面の広端付近に花卉の型押しの後、強い横ナデを施す。

16は偏行唐草文軒平瓦。瓦当から約6cmのところ段顎であるが、段自体は強くない。凸面は横ナデを施し、凹面は模骨痕を留めるが、凹面広端付近まで模骨痕が及ばない。

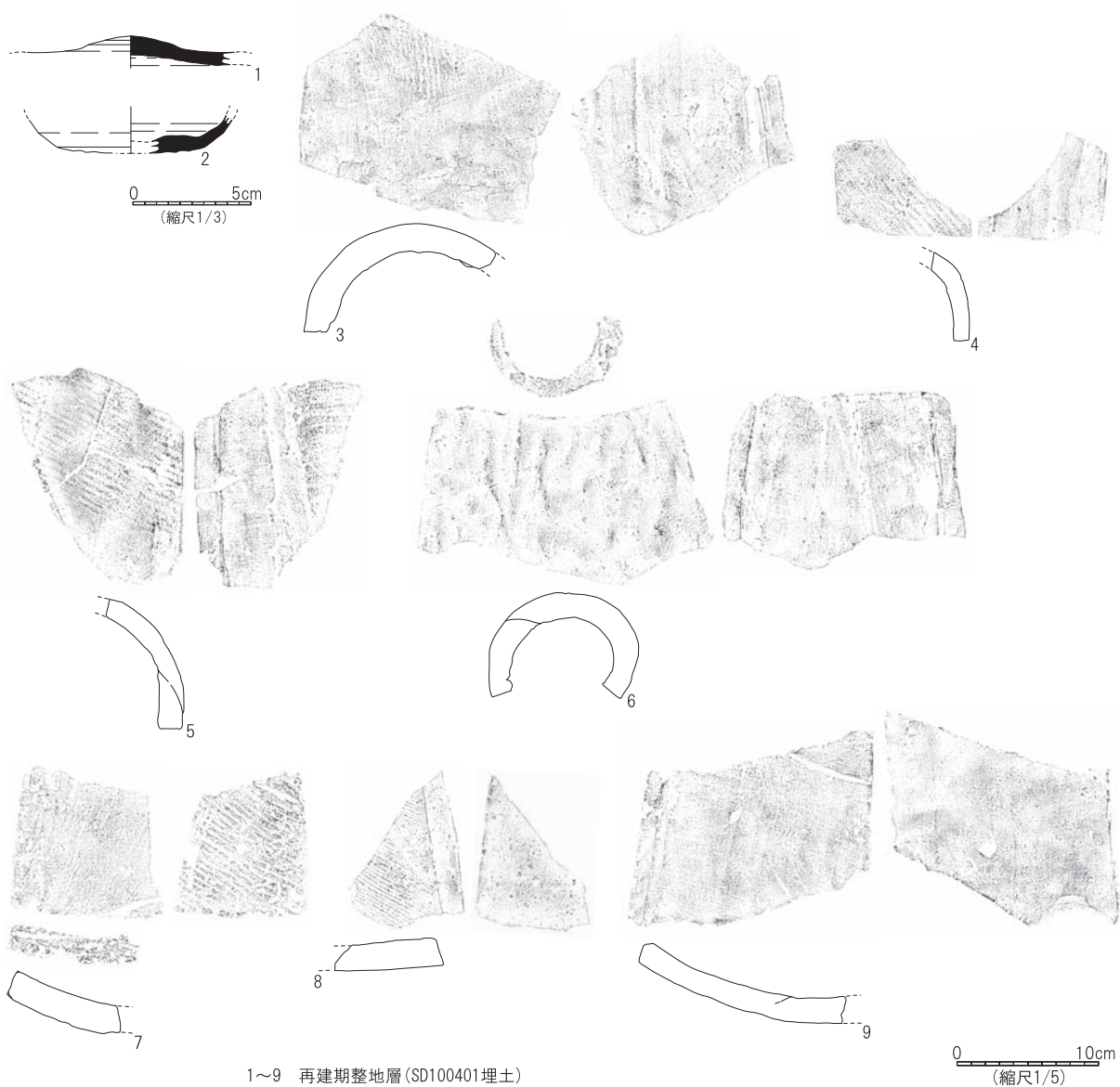
17～24は平瓦。17の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、全体に叩き目が残る。凹面は縦ナデを施す。

18・19の凸面は強い横ナデを施し、凹面は縦ナデを施す。18の凹面は大きく削り取られ、側縁から2cmほどの箇所器厚が薄くなる。20・22・23・24の凸面は横ナデを施し、縦ナデを加える。20・22・23の凹面は模骨痕を留める。21の凸面は強い横ナデを施し、凹面は模骨痕、布綴じ合わせ痕を留める。



16～24 再建期金堂基壇(SB100402)南西側堆積層

第46図 興道寺廃寺第10次調査4トレンチ出土遺物実測図2



1～9 再建期整地層 (SD100401埋土)

第47図 興道寺廃寺第10次調査4トレンチ出土遺物実測図3

第47図1～9は再建期の整地土の断割部分（創建期金堂基壇南西隅部の溝埋土）から出土した。

1は須恵器杯蓋と思われる。頂部が丸く隆起し、天井部はわずかに外反し、外面に不定方向のナデを施す。2は須恵器杯（杯A）。底部の内外面ともに丁寧な横ナデを施す。

3は素弁九葉蓮華文軒丸瓦とみられる軒丸瓦の丸瓦部。凸面に側縁に沿って縄叩きを施し、横ナデを加える。叩き目が薄く残る。凹面の広端付近には瓦当接合のための粘土貼り付け痕が残る。

4～6は無段式丸瓦。4・5の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施した後、横ナデを加える。叩き目が全体に残り、5には叩き目原体が明瞭に残る。6の凸面は横ナデに加えて強い縦ナデを施す。5・6の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。

7～9は平瓦。7の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、凹面は強い縦ナデを加え、叩き目がよく残る。8の凸面は横ナデを施す。凹面は縦ナデを施し、糸切り痕を留める。9の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。

## 第2項 塔基壇の調査

### A. 塔基壇の調査概要

『2007年報告』の中で基壇遺構1として示したが、金堂基壇と同様、第1期調査において塔基壇を検出していた。第1・2・4・7次調査と複数回の調査が及んでおり、興道寺廃寺の調査の中でも比較的早い時期にその存在が明らかとなっていたものである。第2次調査2トレンチ、第4次調査7トレンチで地山層の削り出しによる基壇西辺が、第2次調査2トレンチ、第7次3トレンチで溝の区画による基壇東辺から北東隅部が、第1次調査2トレンチで自然礫による石積み、溝の区画による南東隅部などを検出し、基壇構築の一端が明らかとなり、一辺12.0mに基壇規模が復元された。また、第2次調査2トレンチ、第4次調査7トレンチでは径0.6～1.0m前後、深さ0.2～0.35mの礎石据え付け掘り方3基を検出し、その位置関係から四天柱2基、側柱1基を確認したものと、方三間、中央間を広く取り3.6m、両脇間2.4mという塔初層の規模を想定した。

第1期調査の大きな成果としては、再建期の塔基壇の東辺、西辺を確認したこと、基壇縁辺を地山層の削り出しで構築したことを確認していたことであった。

ただし、第9次調査以後、金堂基壇において中門基壇と同様に創建、再建の2時期の基壇が存在する可能性が浮上ったことで、塔基壇に関しても既検出基壇の時期確認の必要に迫られた。既検出の塔基壇が創建期に伴うものであれば、当然、その上位に再建期の基壇が存在することが想定され、既検出の基壇が地山面まで掘削して検出していることからすれば、表土下に再建期の基壇が潜在する可能性が高いことが考えられた。このため、再建期の塔基壇の面的な検出を目指して第11次調査3・4トレンチを設定して調査を行ったところ、表土下で再建期と考えられる塔基壇（整地面）の東辺、西辺、南西隅部を検出し、基壇検出面で複数の礎石据え付け掘り方を検出した。また、既調査箇所の第2次調査2トレンチ、第4次調査7トレンチが再建期の基壇積み土を断ち割りに掘削し、地山面まで検出していたという過失があったことが判明したが、この部分を再度、地山面まで掘削し、その土層断面で創建期、再建期の基壇積み土の重複を確認した。この調査によって、上記の『2007年報告』で示された内容に正しい部分と事実誤認である部分を確認することとなった。

### B. 第11次調査4トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.8～25.0mである。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.15～0.35m）下、トレンチの東端と西端を除いては標高24.5～24.75m付近で再建期塔基壇の検出面に至り、東端と西端では黒褐色土（層厚0.2m）からなる堆積層が分布し、標高24.25～24.5m付近で再建期の整地面、一部は創建期の基壇検出面に至る。再建期の整地面は西に向けて緩やかに傾斜し、0.2mほどの比高差をもつ。

表土から須恵器杯蓋（杯H蓋）1点、杯（杯H）もしくは杯蓋（杯H蓋）2点、杯（杯A）1点、杯蓋（杯B蓋）1点、皿1点、甕4点、須恵器小片5点、土師器甕4点、皿2、製塩土器2点、近世陶器1点、鉄釘1点、ナイフ状鉄製工具1点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦1点、無段式丸瓦36点、三重弧文軒平瓦1点、平瓦56点、瓦小片101点が破片で出土した。

#### ② 検出遺構の概要

表土下で再建期塔基壇SB110402の積み土と東辺、西辺と基壇に伴う整地面を検出するとともに、基壇検出面で土坑1基（SK110401）、礎石据え付け掘り方7基（P110403～P110409）、柱穴3基（P110410～P110412）を検出した。

なお、トレンチの北端は第2次調査2トレンチ、第7次調査3トレンチと、南西隅付近では第4次調査7トレンチと重複し、再建期塔基壇および整地面の下層で創建期塔基壇SB110401の積み土を検出し、地山層の削り出

して造られた創建期塔基壇 SB020201・SB040701、地山面に掘り込まれた礎石据え付け掘り方2基 (P110401、P110402-P040701)、土坑1基 (SK020204)、溝2基 (SD020203、SD020204)、柱穴・小穴 (P020204、P020205) を検出、あるいは再検出した。

### ③ 建物基壇および整地面

#### <創建期塔基壇 SB110401>

SB110401 は前述のとおり既調査箇所で地山面に掘り込まれた溝で区画された基壇東辺と北東隅部、南東隅部、地山層の削り出しによって造られた基壇西辺を検出していたが、今回の調査で既調査箇所の土層断面の精査で東辺から西辺にかけての地山面の上にSB110401の積み土が薄く残ることを断片的に検出した。基壇積み土の検出面は標高24.35～24.55m付近で、黒褐色土、黒色土を大ブロック単位に水平に盛土する。創建期の金堂基壇で見られたような明瞭な版築は見られない。

また、SB110401 西辺から西に向けては地山面の上に黒褐色土を水平に一括で盛土し、創建期の整地面とするとともに、基壇西辺に盛土を施さずに造られた溝を検出した。

地山面で検出したSB110401の礎石据え付け掘り方P110401、P110402の2基は側柱にあたる。

#### <再建期塔基壇 SB110402>

SB110402 は基壇の東辺、西辺を平面、土層断面で検出した。基壇の東辺から西辺までの距離は約15.3mで、基壇の検出面の標高24.4～24.6m、周囲の整地面より0.2mほど標高が高い。表土直下に基壇積み土が分布する状況を考えれば、金堂基壇や講堂基壇と同様に、相応の基壇削平があったものと考えられる。基壇積み土は基壇外の再建期の整地面と一体的に施し、創建期基壇の積み土、あるいは整地面や地山面の上に黒褐色土、黒褐色粘質土、暗褐色土、暗褐色粗砂、暗褐色砂礫土、黒褐色砂質土を大ブロック単位で水平に盛土する。再建期の整地面から須恵器杯(杯B)1点、甕3点、小片1点、平瓦2点、瓦小片1点が破片で出土した(第52図34)。

東西の縁辺に基壇外装は見られず、基壇の東西辺と見るか、基壇を載せる整地面の東西辺と見るか、検討の余地もあるが、現段階では前者と考える。基壇西辺の整地面の標高24.25～24.4m、東辺の整地面の標高24.5～24.55mである。

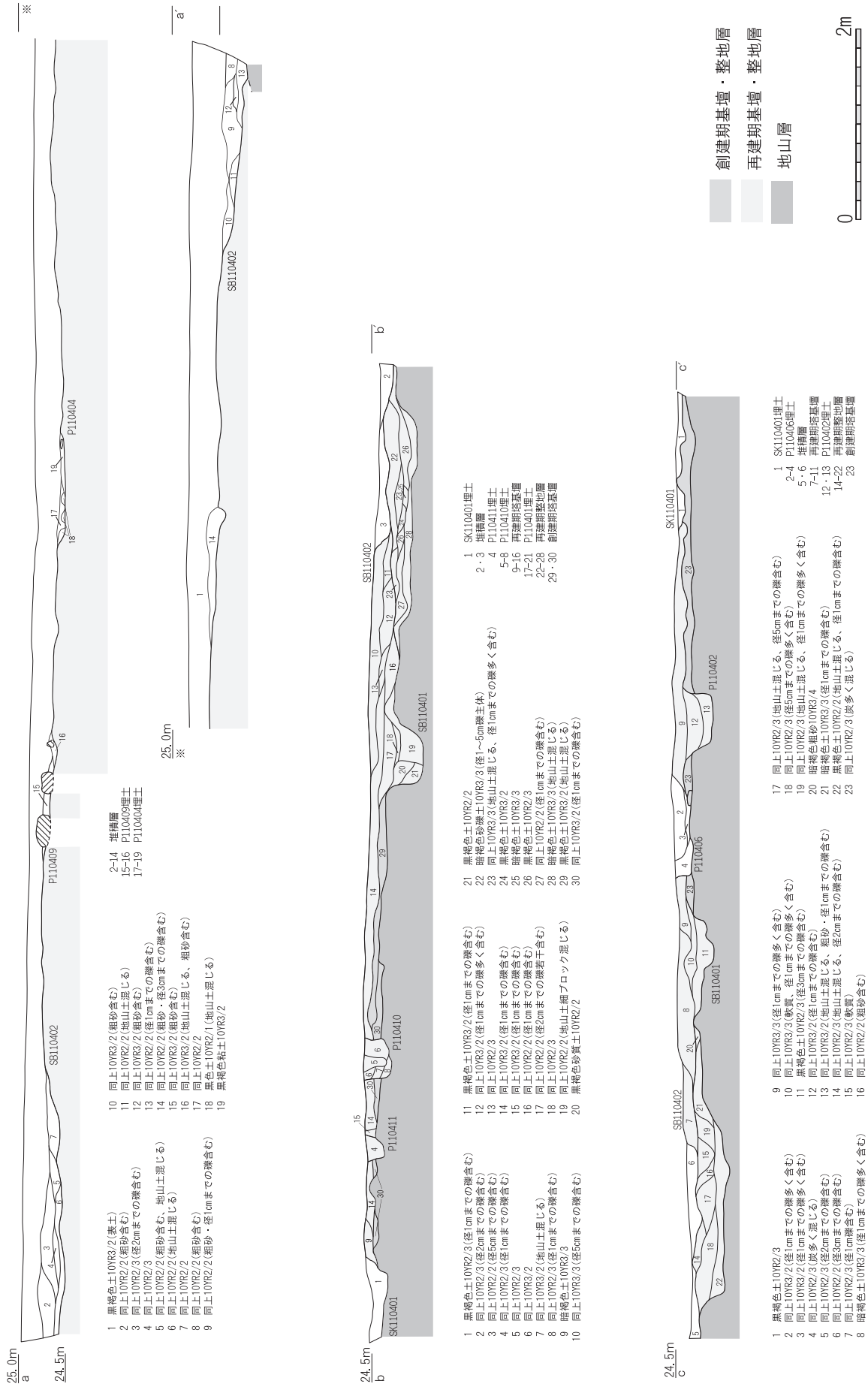
SB110402の基壇面で検出した土坑1基(SK110401)は心礎抜き取りのために後世に掘り込まれた土坑と考えられる。礎石据え付け掘り方7基(P110403～P110409)の内、四天柱としてP110403、P110404、P110405の3基、側柱としてP110406、P110407、P110408、P110409の4基を検出した。四天柱、側柱ともに柱間は3.0m、礎石据え付け掘り方の平面形態は円形や隅丸方形で、その規模も径や一辺の長さが1mを超え、大きい。一方で検出面から底面までは浅く、P110406、P110409の底面では長辺0.2～0.3mほどの自然礫の根固石を検出しているように、基壇の削平が顕著である。柱穴3基(P110410～P110412)は掘り方の径も小さく、建設足場の柱穴と考えられる。

SB110402 西辺の黒褐色土からなる堆積層から拳大ほどの自然礫とともに、須恵器杯蓋(杯H蓋)1点、(杯A)1点、杯蓋(杯B蓋)2点、土師器甕9点、皿1点、無段式丸瓦58点、平瓦121点、瓦小片52点が破片で出土した(第50・51図1・3～5・7～27)。一方、東辺では礫の分布がほとんどないが、黒褐色土の堆積層から須恵器杯蓋(杯H蓋)4点、杯(杯H)1点、杯蓋(杯H蓋)天井部もしくは(杯H)底部9点、杯蓋(杯B蓋)1点、高杯2点、甕3点、壺1点、小片7点、土師器甕22点、小片1点、製塩土器1点、灰釉陶器皿1点、無段式丸瓦3点、平瓦5点、瓦小片28点が破片で出土した(第50・51図2・6・28)。出土瓦はいずれも小ぶりで、出土量もさほど多くない。

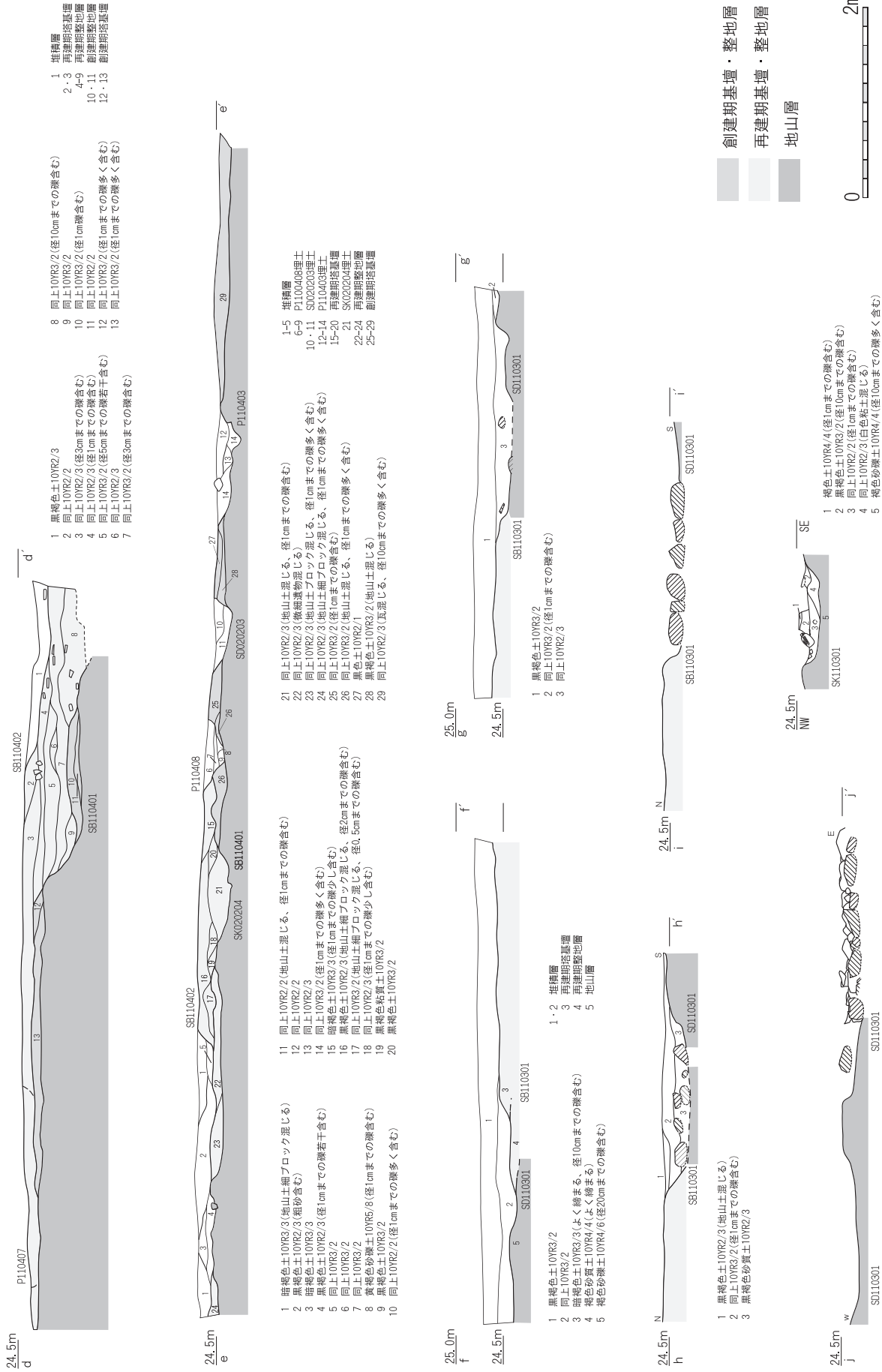
### ④ 土坑

SK110401 は心礎抜き取りのために後世に掘り込まれた土坑と考えられる。平面形態は崩れた円形で、南北1.78m、東西2.12m。深さは0.19mと浅く、黒褐色土を埋土にもつ。埋土から塑像螺髪が出土した(第52図35)。





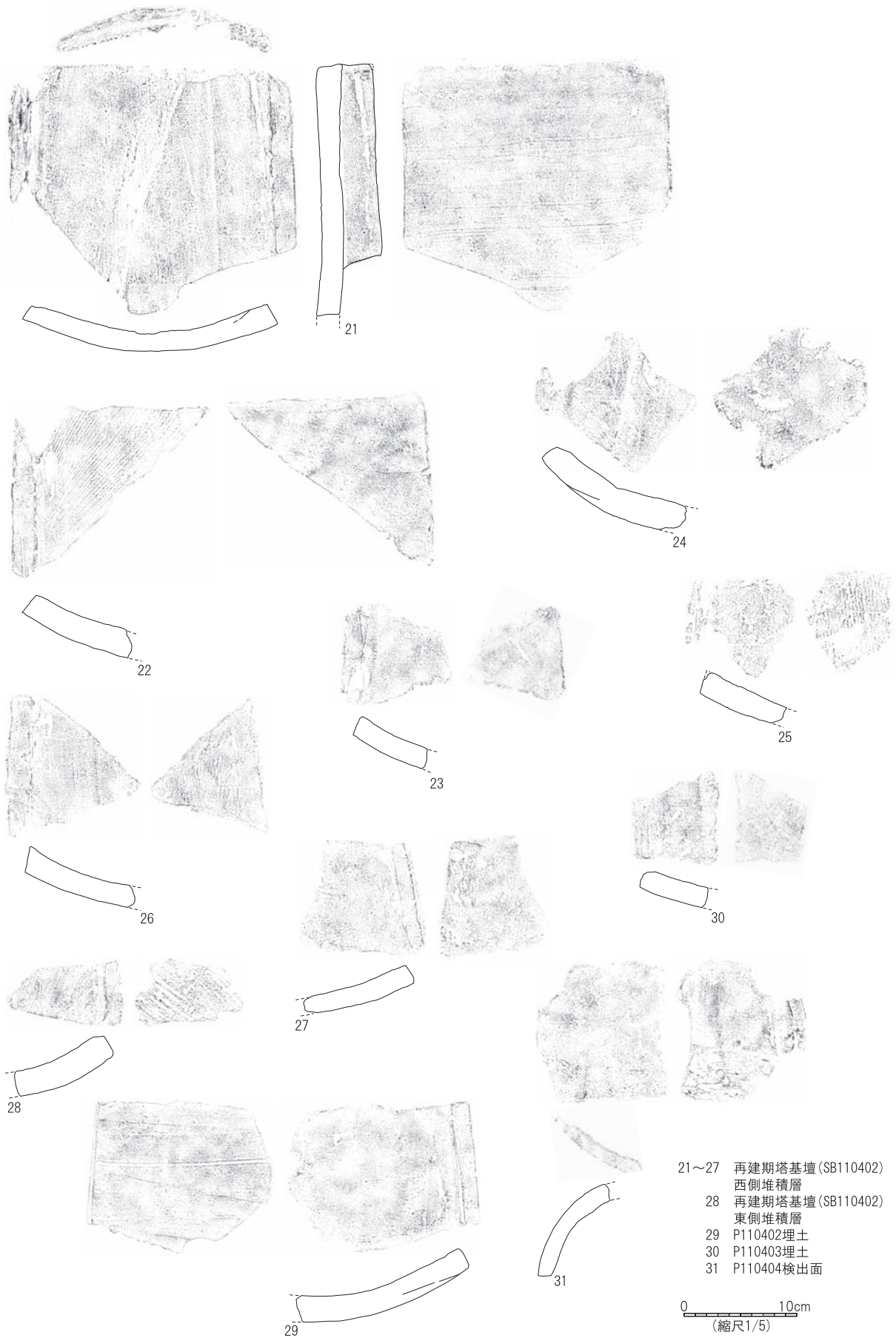
第48図 興道寺院寺塔基壇土層断面図1 (縮尺1/60)



第49図 興道寺塔基壇土層断面図2 (縮尺1/60)



第50図 興道寺廃寺第11次調査4トレンチ出土遺物実測図1



第51図 興道寺廃寺第11次調査4トレンチ出土遺物実測図2

⑤ 礎石据え付け掘り方・柱穴

P110401・P110402 は創建期塔基壇 SB110401 に伴う礎石据え付け掘り方 2 基である。P110401 は第 2 次調査 2 トレンチと重複する箇所を再精査し、底面のみを検出した。平面形態は崩れた円形で、南北検出長 1.07m、東西検出長 1.30m、深さ 0.10m、断面形状は不定形な弧状である。P110402 の平面形態は隅丸方形で、南北検出長 0.92m、東西 1.17m、深さ 0.29m、断面形状は箱型である。底面付近に多くの根固め石を備え、黒褐色土を埋土にもつ。埋土から平瓦 2 点が破片で出土した (第 51 図 29)。

P110403～P110409 は再建期塔基壇 SB110402 に伴う礎石据え付け掘り方 7 基である。P110403 の平面形態は隅丸方形で、南北検出長 0.62m、東西検出長 1.15m、深さ 0.23m。断面形状は不定形な弧状で、黒褐色土を埋土にもつ。埋土から土師器甕 2 点、無段式丸瓦 1 点、平瓦 1 点が破片で出土 (第 51 図 30)。P110404 の平面形態は円形で、南北検出長 0.71m、東西検出長 0.80m。検出面から土師器甕 3 点、軒丸瓦 1 点、平瓦 1 点が破片で出土 (第 51 図 31)。P110405 は第 4 次調査 7 トレンチと重複する箇所で再精査し、底面のみを検出した。平面形態は不定形で、南北 0.54m、東西 0.54m。P110406 の平面形態は円形で、南北検出長 0.81m、東西検出長 1.04m、深さ 0.23m。断面形状は崩れた箱形で、黒褐色土を埋土にもつ。底面付近に根固め石が遺存する。P110407 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.49m、東西検出長 1.00m。P110408 の平面形態は隅丸方形で、南北検出長 0.58m、東西検出長 0.74m、深さ 0.23m。断面形状は尖底状で、黒褐色土、黄褐色砂礫土を埋土にもつ。P110409 の平面形態は円形で、南北検出長 0.58m、東西検出長 1.18m、深さは 0.16m。断面形状は不定形な弧状で、黒褐色土を埋土にもつ。底面直上に根固め石 2 石が遺存する。埋土から平瓦 1 点が破片で出土。

P110410～P110412 は再建期塔基壇に伴う足場の柱穴と考えられる。P110410 の平面形態は円形で、南北検出長 0.45m、東西検出長 0.42m、深さ 0.29m。P110411 の平面形態は円形で、南北検出長 0.26、東西検出長 0.31m、深さ 0.21m。P110412 の平面形態は円形で、南北 0.33m、東西検出長 0.28m。検出面で平瓦 4 点が破片で出土 (第 52 図 32・33)。

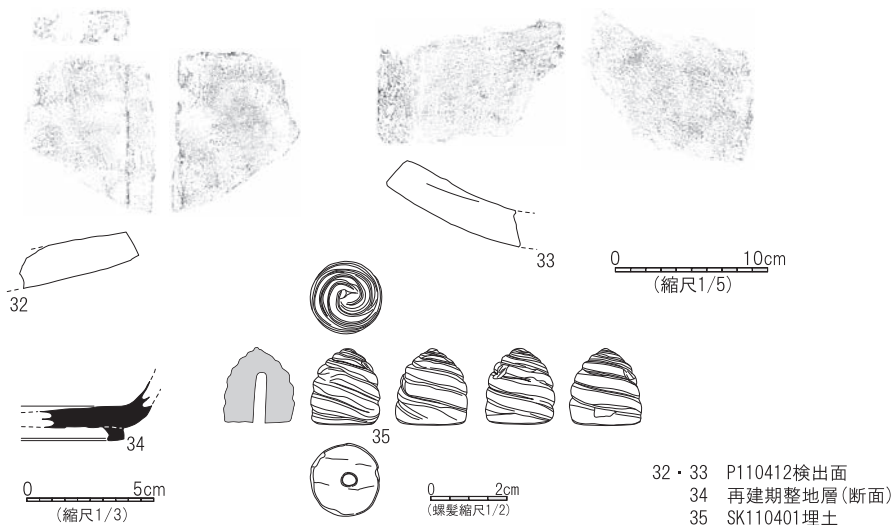
⑥ 出土遺物

第 50・51 図 1・3～5・7～27 は再建期塔基壇の西側堆積層、2・6・28 は再建期塔基壇の東側堆積層、第 51 図 29 は P110402 埋土、第 51 図 30 は P110403 埋土、第 51 図 31 は P110404 埋土、第 52 図 32・33 は P110412 埋土、第 52 図 34 は再建期塔基壇の整地層、第 52 図 35 は SK110401 埋土から出土した。

1 は須恵器杯蓋 (杯 H 蓋)。1 は口縁部が丸く立ち上がる。3・4 は無鈕の杯蓋 (杯 B 蓋)。3 の復元口径 13.3 cm、器高 1.2 cm。口縁端部は下方に鋭く折り返し、丸く収める。4 の復元口径 14.2 cm、器高 1.5 cm。口縁端部はやや外方に折り返し、丸く収める。ともに天井部は平坦である。5 は須恵器杯 (杯 A)。口縁部は上方に真っすぐ立ち上がり、口縁端部は鈍く収める。

7 は土師器皿。底部から口縁部が短く立ち上がり、口縁端部を鈍く収める。

8～13 は無段式丸瓦。8 の凸面は側縁に沿って斜交し、9 の凸面は側縁に沿って平行叩きを施し、横ナデを加える。部分的に叩き目が残る。8・9 の凹面の布目は粗い。10～13 の凸面は横ナデを施し、11・



第 52 図 興道寺廃寺第 11 次調査 4 トレンチ出土遺物実測図 3

12の凹面は模骨痕を留める。

14～28は平瓦。14・15の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、14は広端付近、15は狭端付近で横ナデを加える。叩き目を残す。14・15の凹面は部分的に縦ナデを施す。16～18の凸面は、16・17は側縁に沿って、18は側縁に斜交して正格子叩きを施し、部分的に横ナデを加えるため、叩き目が薄く潰れる。

19の凸面は側縁に斜交する横に長い斜格子叩きを施す。20の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、強い横ナデを加え、叩き目がわずかに残る。21・22の凸面は横ナデを施し、24の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。21・24の凹面は模骨痕、布綴じ合わせ痕を、22の凹面は糸切り痕を留める。25～27の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、26・27の凸面は横ナデを加え、叩き目が薄く残る。

2は須恵器杯蓋（杯H蓋）。2は口縁部がやや直立気味に立ち上がり、鈍い稜をもつ。

6は灰釉陶器とみられる陶器の皿。体部は平坦な底部から外方に屈曲して延びる。

28～30は平瓦。28の凸面には側縁に斜交する平行叩きを施し、横ナデを加える。29の凸面は横ナデを施し、凹面は強い縦ナデを施す。30の凹面は模骨痕を留める。

31は軒丸瓦の丸瓦部で、凹面の広端付近に瓦当との接合痕が残る。広端面を瓦当外縁とする。

32・33は平瓦。32の凹面は横ナデを施し、33の凹面は部分的に縦ナデを施す。

34は須恵器杯（杯B）。高台はやや内側に向かって張る。

35は塑像螺髪。器高20mm、底面径18mm。円錐形を呈し、精緻な作りである。底面は径4mmの孔を穿ち、底面の一部をナデ調整する。螺線は幅が狭く、底面から右巻きである。採色の痕跡は見られない。

### C. 第11次調査3トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.8mである。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.2m）下、トレンチの北東側では標高24.5～24.55m付近で再建期塔基壇の検出面に至り、南西側では黒褐色土（層厚0.1～0.2m）からなる堆積層が分布し、標高24.45m前後で整地面、標高24.35～24.45mで地山面となる褐色砂礫土層の上面に至る。表土から須恵器小片1点、土師器甕2点、無段式丸瓦1点、平瓦3点、瓦小片2点が出土。

#### ② 検出遺構の概要

表土下で再建期塔基壇SB110302の積み土と南西隅部、基壇に伴う整地面と溝1基（SD110301）を検出するとともに、整地面下で土坑1基（SK110301）を検出した。

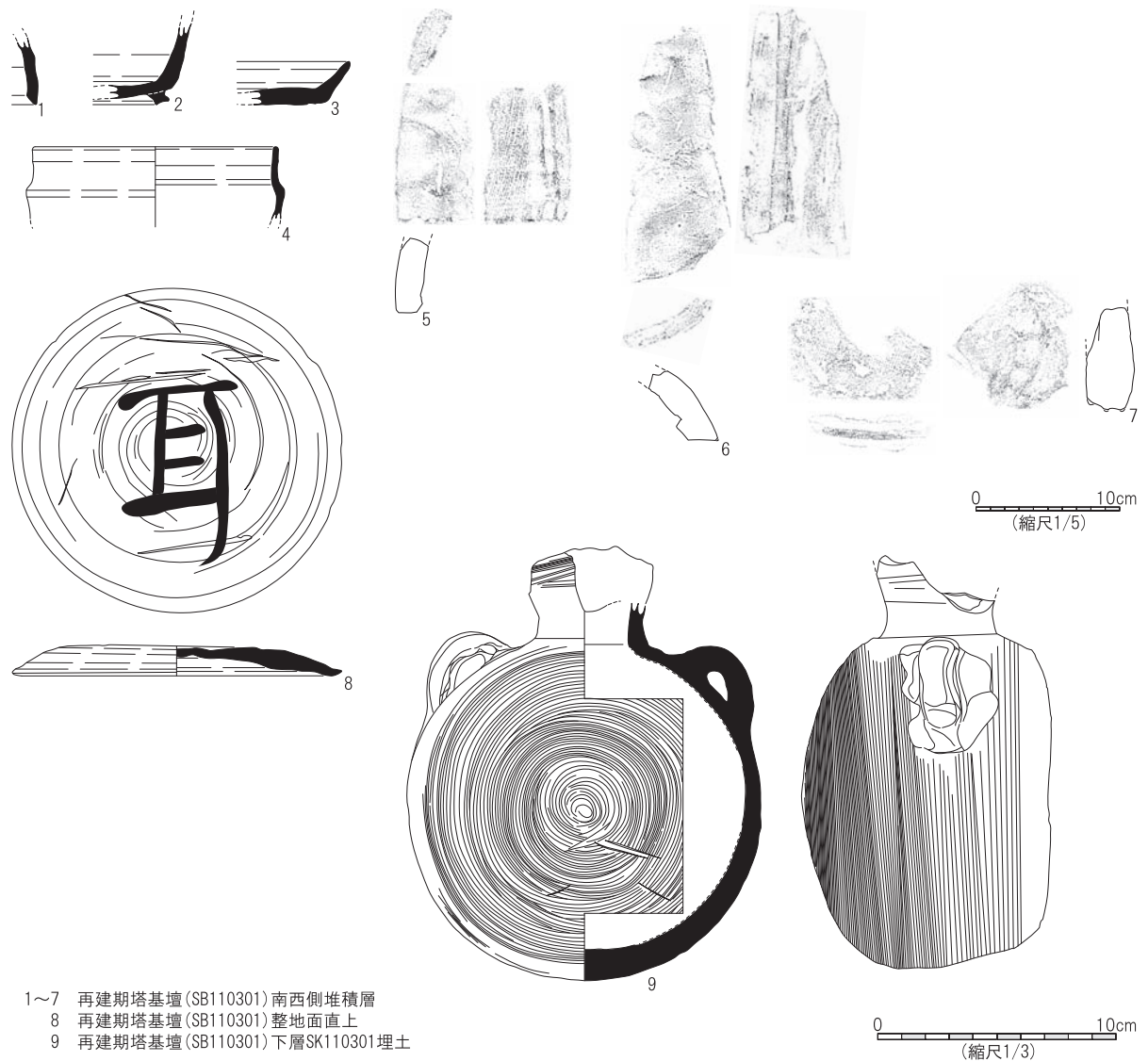
#### ③ 建物基壇および整地面

<再建期塔基壇SB110301>

SB110402は基壇の南西隅部を平面、土層断面で検出した。基壇の検出面の標高24.5m前後、周囲の整地面より0.16mほど標高が高い。基壇の積み土は暗褐色土であり、基壇に伴う整地層は褐色砂質土からなる。整地面の標高は24.45m前後。基壇から南西に0.6mほど不定形に張り出した部分の整地面は精緻に造り、黄褐色粘土を貼り付けた痕跡を検出した。この部分の整地面の直上から正位の状態では墨書がある須恵器蓋1点が完形で出土した（第53図8）。

SB110301南西隅部の構築にあたっては標高24.35m付近まで地山面を0.1～0.15mほど掘削する掘込地業を施した後、褐色砂質土からなる整地土を水平に盛土し、さらに内側に褐色砂礫土を基壇状に盛土する。基壇周囲の整地面の盛土が及ばない範囲は基壇周囲の溝SD110301となる。

基壇南西側の黒褐色土からなる堆積層から須恵器杯（杯H）1点、杯蓋（杯H蓋）1点、杯（杯B）1点、皿



第53図 興道寺廃寺第11次調査3トレンチ出土遺物実測図

2点、須恵器小片4点、土師器甕12点、製塩土器2点、鉄釘2点、鉄製紡錘車1点、鉄滓2点、無段式丸瓦13点、三重弧文軒平瓦1点、平瓦37点、瓦小片8点が破片で出土(第53図1~7)。

#### ④ 溝

再建期塔基壇の南西隅部を構築する際の掘込地業と整地土の盛土によって造り出された溝である。溝は不定形にSB110301の南側と西側を廻る。東西幅1.63m、南北幅2.59m、最深0.28m。断面形状は箱形で、黒褐色土、黒褐色砂質土を埋土にもつ。

基壇南側の溝の底面、南北1.77m、東西2.20mの範囲に集石がある。大きいもので長辺0.5m、短辺0.3m、小さいもので拳大ほどの花崗岩、砂岩などの自然礫を集めたものであるが、石材の法量規格は乏しく、石敷きと言えるような意図的な配石や平坦面を上方に揃えたような痕跡は見られない。底面の直上に分布していることから後世の埋没とも考えにくい、集石の性格は不明である。積極的に評価すれば西側に近接する整地面から出土した墨書土器とも関わり、祭祀に伴うものと考えられるが、寺院廃絶時に基壇の構成材が1箇所寄せ集められた可能性もある。

## ⑤ 土坑

SK110301 は再建期の整地層下、溝 SD110301 底面の地山面から掘り込まれた土坑である。平面形態は崩れた楕円形で、南北 0.95m、東西 1.32m、深さ 0.20m。黒褐色土、褐色土、褐色砂礫土を埋土にもつ。埋土から須恵器提瓶 1 点がほぼ完形、土師器甕 1 点が破片で出土した（第 53 図 9）。

## ⑥ 出土遺物

第 53 図 1～7 は再建期塔基壇南西隅の堆積層、8 は再建期塔基壇南西隅の整地面の直上、9 は SK110301 埋土から出土した。

1 は須恵器杯蓋（杯 H 蓋）。口縁端部は面をもち、口縁部と天井部の境に強いナデによる段をもつ。2 は須恵器杯（杯 B）。口縁部は上方に真っすぐ立ち上がり、底部外縁に沿って細く、外に張る高台を付す。3 は須恵器皿。平底の底部から外上方に短く口縁部が立ち上がり、口縁端部は鋭く収める。底部外面はヘラ切り痕が残る。

4 は須恵器短頸壺。復元口径 10.2 cm と小型である。器壁は極めて薄く作り、口縁部と体部との境に段をもち、口縁部はわずかに外反させながら口縁端部を鋭く収める。

5・6 は無段式丸瓦。5・6 の凸面は強い横ナデを施す。

7 は三重弧文軒平瓦。瓦当の弧線は鈍い。平瓦部の凸面は横ナデを施し、凹面に模骨痕を留める。

8 は須恵器蓋。口径 13.8 cm、器高 1.3 cm。器高は低く、口縁部は肥厚させながら外下方に真っすぐ延び、口縁端部を外方につまみ出して鋭く収める。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。天井部外面に「耳」と墨書された文字が薄らと判読できる。文字は縦 8 cm、横 6 cm の範囲に 1 文字で大きく墨書する。

9 は須恵器提瓶。口縁部は短く、細く立ち上がり、体部は強く張る。体部の上位に環状把手を付す。口縁部から体部にかけての外面にカキ目を施す。

## 第 3 項 中門基壇の調査

### A. 中門基壇の調査概要

『2007 年報告』の中で基壇遺構 3 として示したのが第 1 期調査の終盤、第 8 次調査で検出した中門基壇である。その時点での基壇規模として東西 9.2m 前後、南北 6.7m に復元し、基壇南辺に人頭大の自然礫による石積みを実施し、基壇の南北方位が金堂や塔の基壇の南北軸から大きく西偏し、また中門基壇の積み土から瓦片や和同開珎、萬年通寶、神功開寶の銭貨が出土したことから、再建期中門基壇である可能性を示唆した。

第 1 期調査の大きな成果としては、中門基壇の調査内容から寺院に複数時期が存在する可能性が指摘され、再建期の基壇には外装に石積みを伴うことが確認されたことであった。その後の第 2 期調査ではこのことを追認する形で、創建、再建の 2 時期の中門基壇の存在が想定されるに至った。

一方で、中門基壇の周辺の様相が不明である中、中門基壇そのものの基壇規模の確認、中門基壇に接続する南面回廊などの伽藍南限施設の存否確認の必要に迫られた。このため、中門基壇に伴う銭貨が集中的に出土した中門基壇西側の様相確認のために第 9 次調査 1 トレンチを設定して調査を行ったところ、再建期に伴う整地面を検出し、中門基壇東側の様相を確認するために同 2 トレンチを設定して調査を行ったところ、再建期中門基壇の北東隅部および創建期中門基壇に伴うと考えられる掘込地業を検出した。このことから、中門基壇西側の様相を面的に把握するため、さらに第 11 次調査 1 トレンチ、第 12 次調査 2 トレンチを設定して調査を行ったところ、再建期整地面から掘り込まれた中門基壇南西の東西溝などを検出した。



## B. 第9次調査2トレンチの調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.2～24.3mである。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.3m）下、トレンチの西端では標高23.9～24.0m付近で再建期中門基壇の検出面に至り、全体的には黒褐色土（層厚0.1～0.2m）からなる堆積層が分布し、標高23.9～24.0m付近で地山面となる黄褐色砂礫土層の上面に至る。地山面は南西に向けて緩やかに傾斜し、0.1mほどの比高差をもつ。

表土からいずれも破片で須恵器杯（杯H）5点、杯蓋（杯H蓋）1点、甕1点、壺1点、土師器甕1点、無段式丸瓦2点、平瓦9点が出土し、堆積層の黒褐色土から須恵器杯（杯H）2点、杯（杯H蓋）1点、壺1点、土師器甕3点、製塩土器6点、平瓦7点がいずれも破片で出土した。

### ② 検出遺構の概要

堆積層下で創建期中門基壇SB090201に伴うと考えられる掘込地業（SK090204）、再建期中門基壇SB090202を検出した。地山面で土坑3基（SB090201～SB090203）、小穴10基（P090201～P090210）を検出したが、トレンチ東側は第6次調査1トレンチと重複し、その内、土坑2基（SK090202-SK060103、SK090203-SK060104）、柱穴4基（P090207～P090210-P060106～P060109）を再検出したこととなる。

### ③ 建物基壇および掘込地業

#### <創建期中門基壇SB090201>

創建期中門基壇SB090201自体は未検出であるが、これに伴うと考えられる掘込地業SK090204を検出した。検出面の標高は23.7m付近で、現存する範囲は南北7.08m、東西2.28mである。平面形態は方形で、南東隅部は丸みを帯びる。地山面を最深0.14mほど掘り込み、黒褐色土で叩き締めることで掘込地業としている。底面の断面形状は不定形で、東側がやや深くなる。この地業痕の東辺の南北方位は再建期中門基壇の南北軸の方位とは異なり、どちらかと言えば創建期の金堂・塔基壇の南北軸の方位に近いことから、創建期中門基壇に伴う地業痕跡と考えておきたい。

なお、創建期中門基壇に関連する遺構としては、第8次調査3トレンチ、再建期中門基壇の南辺から南に向けて断ち割りを行った際に基壇を載せる再建期の整地層下で地山面を掘り込む幅0.9mの溝（『2007年報告』第96図）を検出しており、位置的には創建期中門基壇南辺の雨落ち溝の一部である可能性も考えられる。

#### <再建期中門基壇SB090202>

SB090202は基壇北東隅部を平面、土層断面で検出した。第8次調査3トレンチ検出の再建期中門基壇SB080301の北東隅部にあたる。基壇面の標高は23.9～24.0mで、基壇積み土は黒褐色土からなる。基壇東辺には石積みを施したものと考えられるが、検出したのは石積みの基底部のみで、人頭大の自然礫が南北に延びて石列状をなしている。石材法量は長辺0.3m強、短辺0.2m前後と規格的で、使用石種は花崗岩、砂岩が主体である。石積みの基底部は前述の創建期中門基壇に伴う掘込地業面の上に載るように位置し、礫の平坦面を外側に向けて奥に控えを取らずに横位に並べる。

基壇北辺に石積みは見られず、基壇検出面からスロープ状に地山面へと至る。基壇北辺の落ち込みに沿って石積みがあった可能性もあるが、第8次調査3トレンチでも未検出であったことから、その可能性は低い。

基壇直上から土師器甕1点、平瓦2点が破片で出土したが、上位の堆積層に含まれるものである。また、基壇の東側と北側の黒褐色土からなる堆積層の内、基壇東辺付近から平瓦4点が破片で出土している。

基壇の周囲には整地面は見られない。東辺石積みの基底面と地山面が標高23.9～24.0mとほぼ同一の標高内にあることに起因するものと考えられる。

#### ④ 土坑

SK090201の平面形態は楕円形で、南北検出長0.81m、東西検出長0.44m、深さ0.10m。断面形状は緩やかな弧状で、黒褐色土を埋土にもつ。



1 P090201埋土

0 5cm  
(縮尺1/3)

#### ⑤ 小穴

P090201の平面形態は崩れた円形で、南北1.06m、東西検出長0.98m、深さ0.57m。埋土から須恵器杯蓋(杯H蓋)1点、杯蓋(杯G蓋)1点、須恵器小片1点、土師器甕3点、製塩土器3点が破片で出土(第54図1)。P090202の平面形態は崩れた円形で、南北0.56m、東西検出長0.34m、深さ0.25m。埋土から土師器甕2点が破片で出土。P090203の平面形態は楕円形で、南北0.26m、東西0.33m、深さ0.11m。P090204の平面形態は円形で、南北検出長0.46m、東西0.40m、深さ0.23m。埋土から土師器甕2点が破片で出土。P090205の平面形態は崩れた円形で、南北0.48m、東西0.50m、深さ0.12m。P090206の平面形態は楕円形で、南北0.30m、東西0.42m、深さ0.03m。

第54図 興道寺廃寺第9次調査2トレンチ  
出土遺物実測図

なお、今回の調査で遺構の平面形の全体が再検出された4基の柱穴(P060106~P060109)について、平面規模を列記する。P060106の平面形態はやや崩れた円形で、南北0.50m、東西0.56m。P060107の平面形態は楕円形で、南北0.76m、東西0.62m。P060108の平面形態は楕円形で、南北0.40m、東西0.30m。P060109の平面形態はやや崩れた円形で、南北0.52m、東西0.56m。これらの柱穴は南北に1列に並び、6世紀後半から7世紀前半に伴うと考えられる柱穴列(SA060101)を構成する。南北の柱間は1m前後である。

#### ⑥ 出土遺物

第54図1はP090201埋土から出土。

1は須恵器杯G蓋。天井部は丸みを帯び、口縁端部を丸く収める。返りは欠損するが、口縁端部の下方に鋭く収めるものとみられる。

### C. 第9次調査1トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.05~24.1mである。

表土の耕作土となる黒褐色土(層厚0.3~0.4m)下、黒褐色土(層厚0.1~0.25m)からなる堆積層が分布し、標高23.5~23.65mで黒褐色土からなる再建期の整地面に至る。表土から平瓦2点が破片で出土。

整地面下、標高23.0~23.2m付近で地山面となる黄褐色砂礫土層の上面に至る。

#### ② 検出遺構の概要

堆積層下で再建期の整地面を検出した。

トレンチ西側は第7次調査2トレンチと重複し、溝1基(SD070201)、土坑1基(SK070201)を再検出した。

#### ③ 整地面

標高23.5~23.65mで再建期の整地面を平面、土層断面で検出した。再建期中門基壇の西側に広がる整地面にあたるが、再建期中門基壇西辺付近の整地面の標高は23.8m前後であり(第8次調査3トレンチの調査ではこの整地面を掘り過ぎ、地山面まで検出)、整地面の標高が低い感もするが、第11次調査1トレンチでは整地面の標高が28.8m前後であるため、第9次調査1トレンチ付近では寺院廃絶後に整地面の削平を受けていることも考えられる。整地面の上位には、トレンチ西側の第7次調査2トレンチ北壁2層と対応する黒褐色土が層厚

0.1~0.2mでほぼ水平堆積する。この堆積層から須恵器杯蓋（杯H蓋）18点、杯（杯H）17点、杯（杯H）底部もしくは杯蓋（杯H蓋）天井部37点、高杯3点、壺22点、甕43点、罌1点、土師器甕111点、製塩土器293点、土錘1点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦1点、無段式丸瓦19点、有段式丸瓦1点、平瓦123点、瓦小片33点がいずれも破片で出土した（第56~58図・1~45）。ほとんどの土器は6世紀後半から7世紀前半に伴うものである。

トレンチ南端で整地面の断ち割りを行った。整地層は黒褐色土からなり、大ブロック単位に不規則に盛土し、層厚も最大で0.6mほどに及ぶなど厚く、拳大から人頭大の自然礫とともに瓦片を多く含む。整地土から破片で須恵器杯（杯H）4点、杯蓋（杯H蓋）3点、杯（杯H）底部もしくは杯蓋（杯H蓋）天井部4点、杯蓋（杯G蓋）1点、杯（杯A）1点、甕4点、土師器碗1点、甕21点、製塩土器41点、鉄釘1点、単弁十葉蓮華文軒丸瓦2点、無段式丸瓦56点、扁行唐草文軒平瓦1点、平瓦327点、瓦細片110点（第59・61図1~32）が出土した。瓦の接合関係も低く、基壇構成材と思われる長辺0.5mほどの大ぶりの自然礫も含まれ、廃材を埋め殺しながら盛土地業を施した状況がうかがえる。

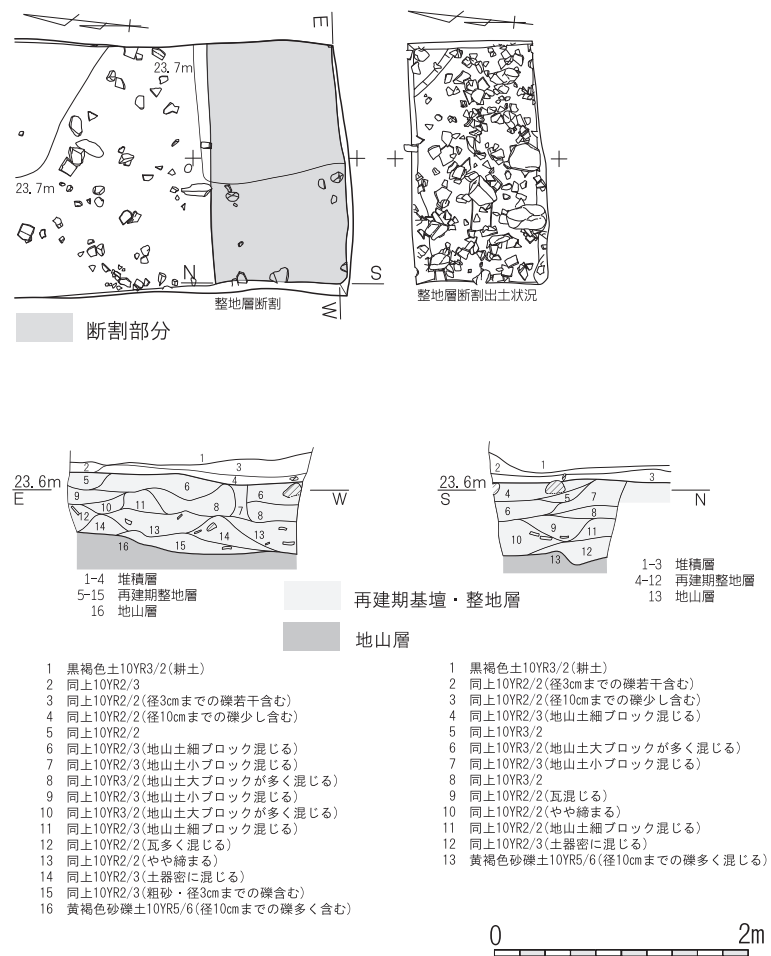
整地面下、黄褐色砂礫土層の上面が地山面となり、標高23.0~23.2m。地山面は東から西に緩やかに傾斜する自然地形を反映している。

#### ④ 出土遺物

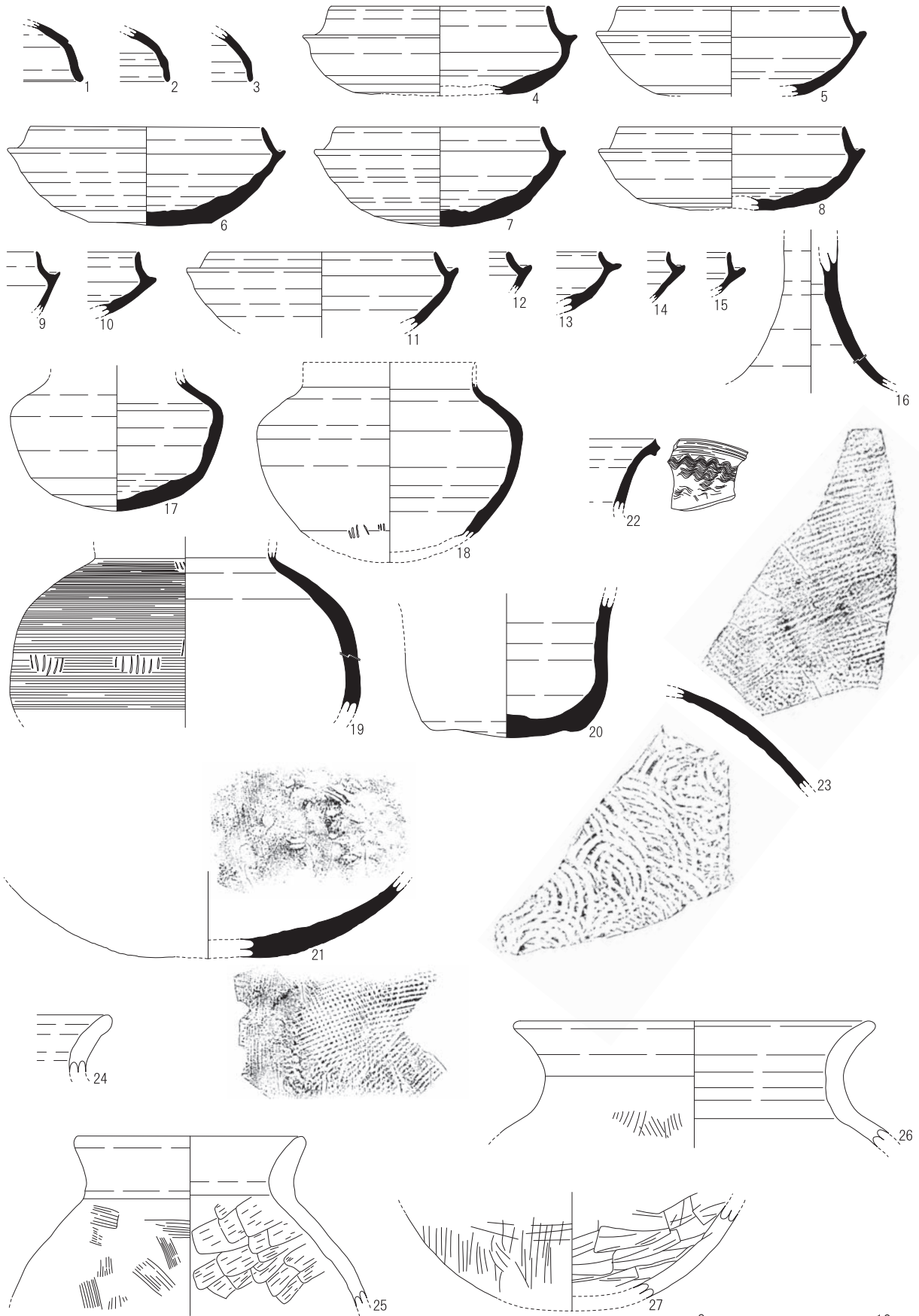
第56~58図1~45は再建期中門基壇西側の堆積層から出土した。

1~3は須恵器杯蓋（杯H蓋）。1は口縁部と天井部との境に沈線を巡らせ、稜を作る。口縁端部は外反し、わずかに段をもつ。2・3は口縁端部を下方に丸く収める。2は口縁部内面に段をもち、3は口縁部と天井部の境が屈曲する。

4~15は須恵器杯（杯H）。4~8は口径11~12cmに収まり、口縁部はいずれも薄く内上方に立ち上がり、口縁端部を鋭く収める。底部の外面には回転ヘラ削りを施す。4は受け部の下側が強く張る。5~7は底部が深く丸みをもち、6・7は内面に強いナデを加える。9・10は口縁部の上部が上方に向けて強く屈曲し、口縁端部を鋭く収める。11・12の口縁部は内方に短く立ち上がる。13~15の口縁部はやや上方に短く立ち上がる。16は須恵器高杯。脚部の基部は細く、脚端部に向かってスカート状に開く。基部外面に2条の沈線を巡らす。17~21は須恵器壺。17・18は短頸壺。17は体部の肩が張り、底部はやや尖底状となる。体部外面にカキ目を施した後、ナデを加え、底部外面に回転ヘラ削りを

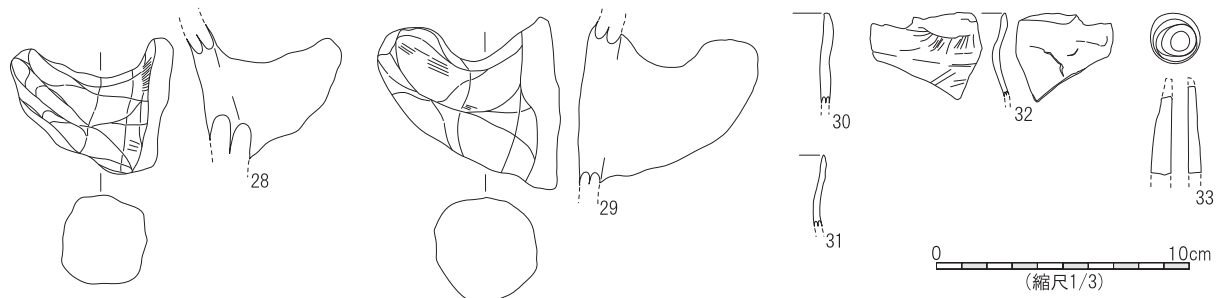


第55図 興徳寺廃寺中門基壇西側再建期整地層断割平面図・土層断面図（縮尺1/60）



1~27 再建期中門基壇(SB090101)西側堆積層

第56図 興道寺廢寺第9次調査1トレンチ出土遺物実測図1



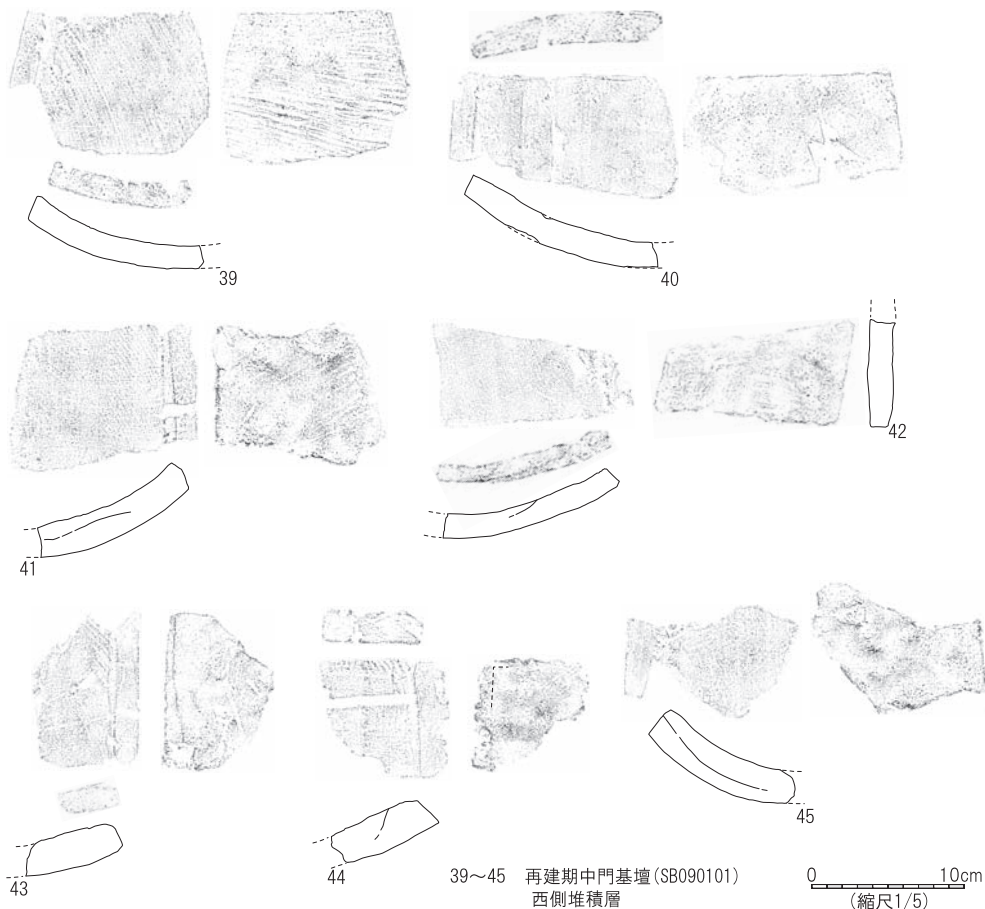
28~38 再建期中門基壇(SB090101)西側堆積層

第57図 興道寺廃寺第9次調査1 トレンチ出土遺物実測図2

施す。18 は体部上位で肩が張るが、全体的に丸みを帯びる。底部外面に回転ヘラ削りを施し、体部外面の下位に1条の刺突文を巡らす。19 は最大径が体部の下位に位置する下膨れの器形。頸部外面、体部外面にそれぞれ1条の刺突文を巡らせた後、頸部から体部にかけての外面全体に強いカキ目を施す。体部外面に指頭圧痕を部分的に留める。20 は長頸壺か。平底を呈し、体部は上方に真っすぐ立ち上がる。体部外面にカキ目を施し、底部外面に不定方向に櫛状工具によるナデを加える。21 は底部外面に格子叩き、体部外面にカキ目を施す。体部から底部にかけての内面にナデを加えるが、底部に指頭圧痕が密に残る。22・23 は須恵器甕。22 の口縁部は上外方に真っすぐ立ち上がり、口縁端部は外方に強く屈曲した後、上方に鋭く収める。口縁部外面は波状文を施す。23 の胴部外面は格子叩きを施した後、部分的にカキ目を加える。胴部内面は当て具痕が残る。

24～29 は土師器甕。24 の口縁部は短く立ち上がり、口縁端部をわずかに肥厚させて収める。口縁部外面は刷毛目を施したようで、その痕跡が残り、口縁部内面は櫛状工具によるナデを施す。25 は頸部から口縁部にかけて肥厚するが、外上方に短く延びる。胴部外面は斜め方向を基調にしながらも不定方向に短い刷毛目を施し、胴部内面は右上方に向かって短い削りを施す。26 の口縁部は丸みを帯びて強く外反する。口縁部内面に櫛状工具による横ナデを施した後、横ナデを加える。胴部外面に縦方向に刷毛目を施す。27 の底部は弧状に丸く立ち上がる。胴部から底部にかけての外面は縦方向に粗い刷毛目を施した後、底部外面に細かい刷毛目を不定方向に施す。底部内面は横方向に削りを施した後、丁寧なナデを加える。28・29 は土師器甕の把手。ともに胴部との接続部分の外面には刷毛目を施し、把手部分は部分的に刷毛目を施し、指頭圧痕を留める。

30～32 は製塩土器。器壁は2mm程度といずれも薄く、浜瀬ⅡA式とされる製塩土器の特徴を備える。30 の口縁部は直立気味に上方に立つ。31・32 は半須恵質で、口縁部はくの字状に屈曲して外上方に延びる。いずれも口縁端部は鋭く収め、内外面ともに丁寧なナデによって仕上げる。未図化のほとんどの資料は、器厚5mmほどとなるもの15点を除いて、これらと同種の特徴を備える。



第58図 興道寺廃寺第9次調査1トレンチ出土遺物実測図3



第59図 興道寺廃寺第9次調査1トレンチ出土遺物実測図4



第60図 興道寺廢寺第9次調査1トレンチ出土遺物実測図5



33は土錘。管状を呈し、長軸方向に穿孔を施す。

34は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。瓦当裏面にナデを施す。

35・36は無段式丸瓦。ともに焼き歪みが強い。35の凸面は斜交する平行叩きを施し、強い横ナデを加える。狭端部にわずかに叩き目が残る。狭端部から約1/3の頂部に径0.9cmの釘穴を凹面側から穿孔する。36は第7次調査2トレンチの黒褐色土層から出土し、『2007年報告』で遺物番号357として報告した丸瓦と接合関係にあり、接合後、完形に還元された。36の凸面は強い横ナデを施す。35・36の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。

37～45は平瓦。37～41の凸面は斜交、直交する平行叩きを施し、または施したものとみられるもので、37・40・41の凸面は横ナデを加える。37～40の凹面は縦ナデを施し、布目が消失する。41の凹面はかろうじて模骨痕を留める。42～45の凸面は縦または横ナデを施し、凹面に模骨痕を留める。

第59・60図1～32は再建期中門基壇西側の整地層から出土。

1は須恵器杯(杯H)。口縁部は上方に真っすぐ立ち上がり、口縁端部を鋭く収める。受け部は外下方に短く延びる。2は須恵器杯蓋(杯G蓋)。口縁端部は下方に折り曲げて丸く収め、返りは短く、鋭く収める。3は須恵器杯(杯A)。口縁部は上方に真っすぐ立ち上がった後、口縁端部を鋭く収める。

4・5は製塩土器。4の口縁部は上方に真っすぐ立ち上がり、口縁端部を鋭く収める。器壁は2mmほど。5の口縁部はやや内彎気味に立ち上がり、口縁端部を丸く収める。器壁は5mmほど。

6は鉄釘。現存長4.3cm。基部の断面は0.8mm×0.6mmで長方形を呈する。

7・8は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。7の外縁は二重圈文からなる。8の外縁は欠損。

9～14は無段式丸瓦。9・10の凸面は斜交する平行叩きを施し、横ナデを加える。全体的に薄く叩き目が残る。11～14の凸面は横ナデを施すが、11の凸面は縦ナデを加える。13の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。

15は偏行唐草文軒平瓦。瓦当の文様は精緻。平瓦部の凸面は曲線顎で、段は見られない。凸面は強い横ナデを施し、凹面は模骨痕を留める。

16～32は平瓦。16の凸面は斜交する平行叩きを施し、横ナデを加える。凸面の狭端付近に叩き目が残る。16の凹面は強い縦ナデを施す。17・18の凸面は強い横ナデを施し、凹面は強い縦ナデを施す。19～26は赤褐色を呈する一群で、未図化の42点を含めて複数個体の平瓦の一部を構成するものとみられる。19～26の凸面は横ナデを施し、22・23・26は縦ナデを加える。19～26の凹面は模骨痕を、22の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。27～29は黄褐色を呈する一群で、未図化の22点を含めて数個体の平瓦の一部を構成するものとみられる。27～29の凸面は横ナデを施し、29は縦ナデを加える。27・29の凹面は模骨痕、28の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。30～32は暗黄褐色を呈する一群で、未図化の16点を含めて数個体の平瓦の一部を構成するものとみられる。30～32の凸面は強い横ナデを施し、32の凸面は縦ナデを加える。いずれも凹面は模骨痕を留める。

## D. 第12次調査1トレンチの調査

### ① 基本層序

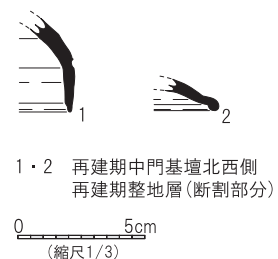
調査地は畑地で、地表面の標高は24.1mである。

表土の耕作土となる黒褐色土(層厚0.25～0.3m)下、標高23.75～23.9mで黒褐色土、黒褐色粘質土からなる再建期の整地面に至る。表土から須恵器杯蓋(杯B蓋)1点、近世陶器1点、平瓦1点、瓦小片1点が破片で出土した。

整地面下、標高23.65m付近で地山面となる褐色粘土層の上面に至る。

### ② 検出遺構の概要

表土下で再建期の整地面を検出し、その下層の地山面で小穴2基



第61図 興道寺廃寺第12次調査1トレンチ出土遺物実測図

(P120101・P120102)を検出した。再建期の整地面に耕作攪乱が及ぶ。

### ③ 整地面

標高 23.75～23.9mで再建期の整地面を平面、土層断面で検出した。再建期中門基壇の北西側に広がる整地面にあたり、再建期中門基壇西辺付近の整地面の標高は 23.8m前後であることから、ほぼ同標高で整地面が広がっていることが確認できる。

トレンチ西端で整地面の断ち割りを行った。整地層は黒褐色土、黒褐色粘質土からなり、水平に規則的に盛土する。整地土から破片で須恵器杯蓋(杯H蓋) 1点、杯蓋(杯B蓋) 1点、須恵器小片 1点、土師器小片 1点、製塩土器 1点、平瓦 2点、瓦小片 2点が出土した(第 62 図 1・2)。

整地層下、標高約 23.65mに地山面が分布し、地山面を掘り込む 2 基の小穴を検出した。

### ④ 小穴

P120101 の平面形態は円形で、南北 0.30m、東西 0.32m、深さ 0.18m。P120102 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 0.43m、東西軒出長 0.21m、深さ 0.10m。埋土は再建期の整地層と同一をなす。

### ⑤ 出土遺物

第 62 図 1・2 は中門基壇北西側の再建期整地層の断割部分から出土した。

1 は須恵器杯蓋(杯H蓋)。外面の口縁部と天井部の境に深い沈線を持ち、口縁端部は鋭く収める。2 は須恵器杯蓋(杯B蓋)。口縁端部は外方に鈍く折り返し、丸く収める。

## E. 第 11 次調査 1 トレンチの調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 23.9～24.0mである。

表土の耕作土となる黒褐色土(層厚 0.25～0.35m)下、標高 23.75～23.8mで黒褐色土、暗褐色土、黄褐色砂礫土などからなる再建期の整地面に至る。整地面のところどころで暗褐色土(層厚 0.1m)からなる堆積層が分布する。

表土から須恵器杯蓋(杯H蓋) 4点、杯(杯H) 5点、杯(杯H) 底部もしくは杯蓋(杯H蓋) 天井部 5点、甕 4点、壺 2点、須恵器小片 3点、土師器甕 26点、製塩土器 67点、無段式丸瓦 5点、平瓦 14点、瓦小片 10点 が破片で出土した。また、暗褐色土からなる堆積層から須恵器杯蓋(杯H蓋) 11点、杯(杯H) 7点、杯(杯H) もしくは杯蓋(杯H蓋) 11点、杯(杯B) 2点、皿 1点、甕 13点、壺 4点、須恵器小片 3点、越前焼甕 1点、土師器甕 57点、皿 1点、製塩土器 53点、円筒埴輪 1点、土壁 1点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦 1点、無段式丸瓦 14点、平瓦 55点、瓦小片 33点 が破片で出土した(第 63 図 1～10)。

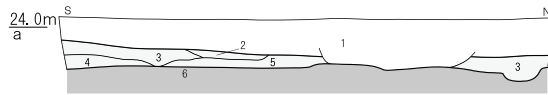
整地層下、23.4～23.5m付近で地山面となる黄褐色粘質土層の上面に至る。

### ② 検出遺構の概要

表土および堆積層下で再建期の整地面を検出するとともに、整地面を掘り込む溝 2 基(SD110101・SD110102)、土坑 3 基(SK110101～SK110103)、小穴 3 基(P110101～P110103)を検出した。また、整地層下、地山面に掘り込まれた溝 3 基(SD110103～SD110105)を検出した。

なお、トレンチの北端は第 7 次調査 2 トレンチ、第 9 次調査 1 トレンチと重複し、地山面に掘り込まれた溝 3 基(SD070201～SD070203)、土坑 1 基(SK070201)、小穴 5 基(P070202～P070206)、再建期の整地面を再検出した。トレンチ北側の遺構に関して、本項で報告する。



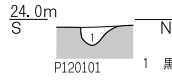


- 1 黒褐色土10YR3/2(表土)
- 2 同上10YR2/2(やや締まる、地山土混じる、径1cmまでの礫含む)
- 3 同上10YR2/2(地山土細ブロック混じる、径1cmまでの礫含む)
- 4 黒褐色粘質土10YR2/2(地山土小ブロック混じる)
- 5 同上10YR2/3(地山土多く混じる)
- 6 褐色粘土10YR4/6

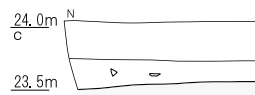
2-5 再建期整地層  
6 地山層



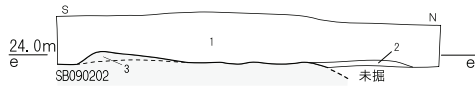
- 1 黒褐色土10YR3/2(表土)
- 2 同上10YR2/2(地山土細ブロック混じる、径1cmまでの礫含む)
- 3 黒褐色粘質土10YR2/3(地山土多く混じる)



- 1 黒褐色土10YR2/2  
(地山土小ブロック混じる、径1cmまでの礫含む)



- 1 黒褐色土10YR3/2(表土)
- 2 同上10YR2/3
- 3 同上10YR2/3(地山土極細ブロック混じる)
- 4 同上10YR2/2(よく締まる)
- 5 同上10YR2/2(よく締まる)
- 6 同上10YR2/2(土器・瓦多く)
- 7 暗褐色砂礫土10YR3/3(径10mm)
- 8 黒褐色土10YR2/2
- 9 同上10YR3/2(黄褐色土10YR5/6)



- 1 黒褐色土10YR3/2(表土)
- 2 同上10YR2/3
- 3 同上10YR2/2



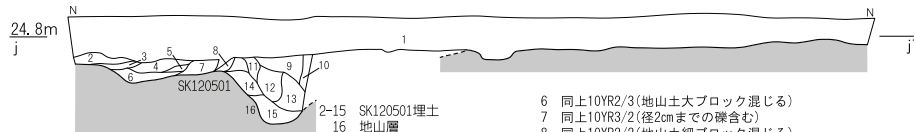
- 1 黒褐色土10YR3/2(表土)
- 2 同上10YR2/3
- 3 同上10YR3/2(地山土ブロック混じる)
- 4 同上10YR2/3(やや砂質)



- 1
- 2
- 3



- 2-4 堆積層
- 5-6 再建期整地層(SD110102埋土)
- 7-12 SD110101埋土
- 1 黒褐色土10YR3/2(表土)
- 2 暗褐色土10YR3/3(地山土)
- 3 黒褐色土10YR3/2(瓦)
- 4 同上10YR3/2(径1cm)

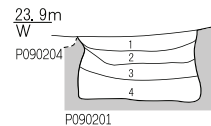


- 1 暗褐色土10YR3/3(表土)
- 2 黒褐色土10YR3/2(よく締まる)
- 3 同上10YR3/2(地山土細ブロック混じる)
- 4 同上10YR3/2(地山土細ブロック混じる、径0.5cmまでの礫含む)
- 5 同上10YR2/2

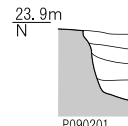
- 6 同上10YR2/3(地山土大ブロック混じる)
- 7 同上10YR3/2(径2cmまでの礫含む)
- 8 同上10YR2/2(地山土細ブロック混じる)
- 9 黒色土10YR1, 7/1
- 10 同上10YR1, 7/1(地山土小ブロック混じる)
- 11 同上10YR2/1
- 12 黒褐色土10YR2/2(径1cmまでの礫含む)
- 13 黒色土10YR2/1
- 14 黒褐色土10YR2/2
- 15 同上10YR2/2(径1cmまでの礫含む)
- 16 黄褐色砂質土〜粘土10YR5/8



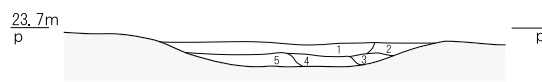
- 1 暗褐色土10YR3/3(表土)
- 2 黒褐色土10YR3/2(地山土ブロック混じる)



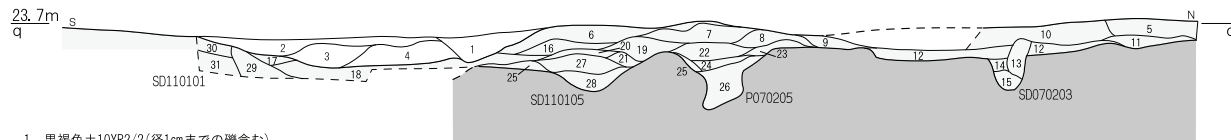
- 1 黒色土10YR1, 7/1
- 2 黒褐色土10YR2/2(地山土細ブロック混じる)
- 3 同上10YR2/3(地山土細ブロック混じる)
- 4 褐色土10YR4/6(地山土ブロック混じる)



- 1 黒色土10YR1, 7/1
- 2 黒褐色土10YR2/2
- 3 同上10YR2/3
- 4 黒褐色土10YR2/2
- 5 褐色土10YR4/6



- 1 黒褐色土10YR2/2(径1cmまでの礫含む)
- 2 同上10YR2/2(粗砂含む)
- 3 同上10YR2/3(径2cmまでの礫含む)
- 4 同上10YR3/2
- 5 同上10YR2/2



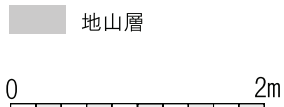
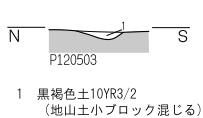
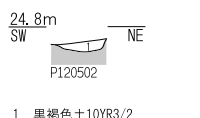
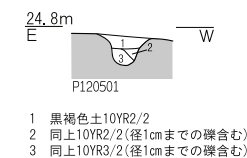
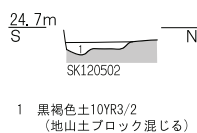
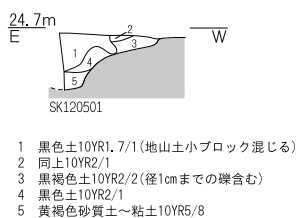
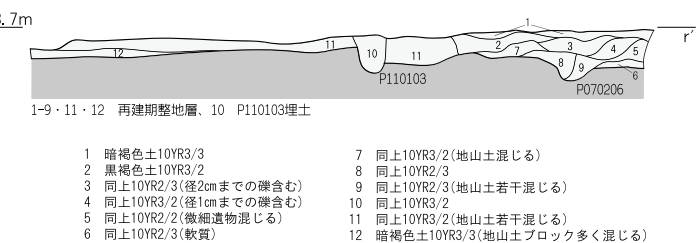
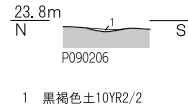
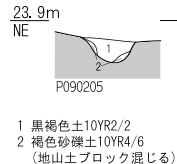
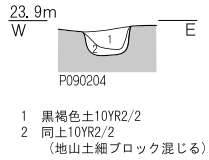
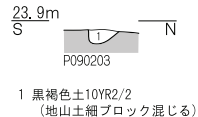
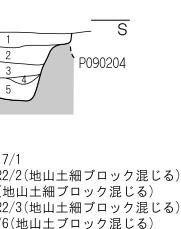
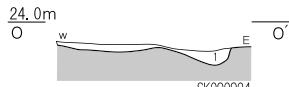
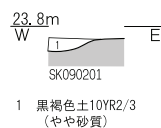
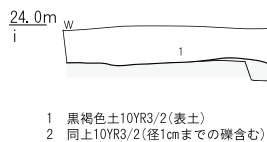
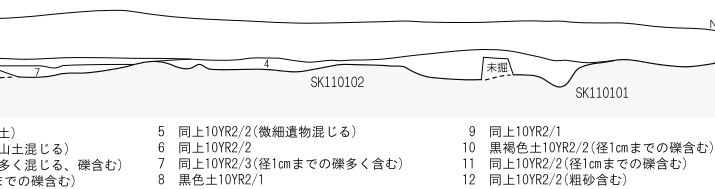
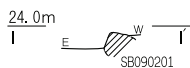
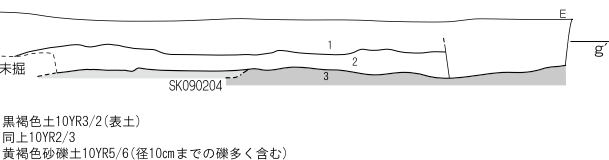
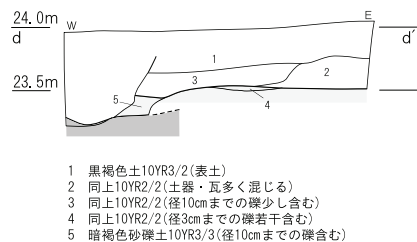
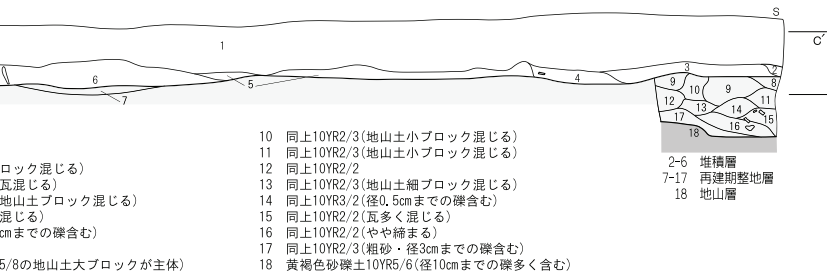
- 1 黒褐色土10YR2/2(径1cmまでの礫含む)
- 2 同上10YR3/2(径1cmまでの礫含む)
- 3 同上10YR3/2(径1cmまでの礫少し含む)
- 4 同上10YR3/2(微細遺物混じる、径2cmまでの礫含む)
- 5 同上10YR3/2(径1cmまでの礫含む)
- 6 暗褐色土10YR3/3
- 7 黒褐色土10YR2/3(径2cmまでの礫少し含む)
- 8 同上10YR3/2(径1cmまでの礫含む)
- 9 同上10YR2/2(微細遺物混じる)
- 10 同上10YR3/2(径5cmまでの礫含む)

- 11 同上10YR2/3
- 12 同上10YR2/2(地山土混じる)
- 13 同上10YR2/3(地山土ブロック混じる)
- 14 同上10YR2/3(地山土混じる、径1cmまでの礫含む)
- 15 同上10YR2/3(地山土混じる)
- 16 同上10YR2/2
- 17 暗褐色土10YR3/3
- 18 黒褐色土10YR2/2(よく締まる、瓦多く混じる)

- 19 同上10YR2/2(微細遺物混じる)
- 20 同上10YR2/3(微細遺物混じる、粗砂含む)
- 21 同上10YR2/3(地山土混じる)
- 22 同上10YR3/2(微細遺物混じる)
- 23 同上10YR3/2(地山土混じる、粗砂含む)
- 24 黄褐色砂礫土10YR5/6(径3cmまでの礫含む)
- 25 暗褐色土10YR3/3(地山土混じる)
- 26 黒褐色土10YR2/3(地山土混じる)

- 27 同上10YR2/3
- 28 同上10YR2/3(粗砂含む)
- 29 同上10YR2/2(径10cmまでの礫含む)
- 30 暗褐色土10YR3/3(粗砂含む)
- 31 同上10YR3/3

1-4 SD110101埋土  
5-12 再建期整地層  
13-15 SD070203埋土  
16-23 再建期整地層  
24-26 P070205埋土  
28 SD110105埋土





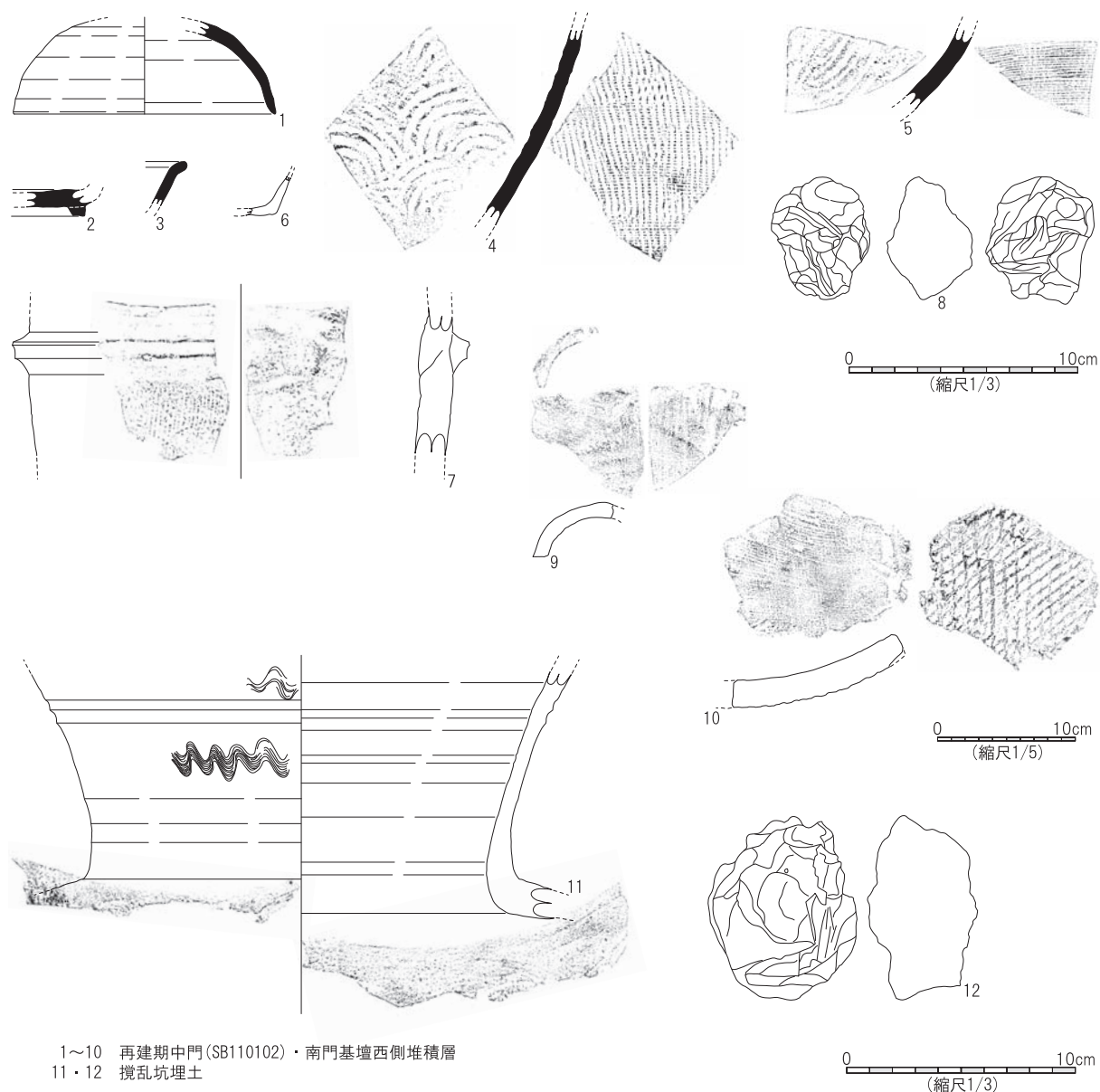
整地面に掘り込まれた礫廃棄の攪乱が確認されている。攪乱坑の埋土から須恵器甕3点、土師器小片1点、土壁2点、平瓦1点、瓦小片1点が破片で出土した（第63図11・12）。

### ③ 整地面

標高 23.75～23.8m付近で再建期の整地層を平面、土層断面で検出した。再建期中門基壇の西側に広がる整地面にあたり、再建期中門基壇西辺付近の整地面の標高 23.8m前後とほぼ同標高である。整地面を掘り込む溝2基（SD110101・SD110102）、土坑3基（SK110101～SK110103）、小穴3基（P110101～P110103）が分布する。

既調査箇所第7次調査2トレンチでは結果として再建期の整地面を掘削し、地山面まで検出していたことが判明したが、調査ではこの部分を地山面まで再掘削し、土層断面で再建期整地層の観察を行った。整地層は黒褐色土、暗褐色土、黄褐色砂礫土などからなり、大ブロック単位で不規則に盛土する。溝 SD110101 の北側の整地面は標高が若干高くなる。

中門基壇・南門基壇西側の再建期整地層の断割部分（第7次調査2トレンチ西端から南に派生する断割部分）から須恵器杯3点、杯蓋（杯G蓋）1点、杯蓋（杯B蓋）1点、甕2点、土師器甕8点、土師器小片2点、製塩土器43点、無段式丸瓦6点、平瓦13点、瓦小片20点が破片で出土した（第67図1～9）。



第63図 興道寺廃寺第11次調査1トレンチ出土遺物実測図1



1~15 SD110101検出面

0 10cm  
(縮尺1/5)

第64図 興道寺廃寺第11次調査1トレンチ出土遺物実測図2



整地層下、標高約 23.65m に地山面が分布し、第 7 次調査 2 トレンチ検出遺構に加えて、地山面を掘り込む溝 3 基 (SD110103～SD110105) を検出した。

#### ④ 溝

SD110101 は、東側に起点をもって西に延びる溝で、東西検出長 5.80m、南北最大幅 3.32m、深さ 0.33m。断面形状は中央が深くなる尖底状で、黒色土、黒褐色土を埋土にもち、大ブロック単位に水平に堆積する。溝の検出面から須恵器杯蓋 (杯H蓋) 4 点、杯 (杯H) 2 点、杯蓋 (杯G蓋) 1 点、甕 2 点、壺 1 点、須恵器小片 6 点、土師器甕 13 点、製塩土器 2 点、土錘 1 点、土壁 1 点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦 2 点、素弁九葉蓮華文軒丸瓦 1 点、無段式丸瓦 26 点、三重弧文軒平瓦 1 点、平瓦 141 点、瓦小片 14 点が破片で出土した (第 64 図 1～15)。これらは原則的には溝の埋土に含まれるものである。また、埋土から須恵器杯蓋 (杯H蓋) 5 点、杯 (杯H) 3 点、皿 2 点、甕 5 点、須恵器小片 3 点、灰釉陶器皿 1 点、土師器甕 5 点、盤 1 点、皿 1 点、製塩土器 3 点、単弁八葉蓮華文軒丸瓦 1 点、無段式丸瓦 65 点、有段式丸瓦 1 点、瓦小片 13 点、偏行唐草文軒平瓦 1 点、平瓦 133 点、鬼板瓦とみられるもの 1 点が破片で出土した (第 65・66 図 1～22)。埋土に礫の混入はあまりない。

SD110105 は、地山面に掘り込まれたもので、東西に延びる溝と思われる。南北幅 0.61m、深さ 0.15m。断面形状は弧状で、黒褐色土を埋土にもつ。

SD110102～SD110104 については後述する。

#### ⑤ 土坑

SK110101 の平面形態は崩れた隅丸方形で、南北検出長 1.64m、東西検出長 1.22m、深さ 0.20m。断面形状は箱形で北側が一段深くなる。周囲の整地面まで覆う黒褐色土を埋土にもつ。

SK110102 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 1.34m、東西検出長 0.33m、深さ 0.06m。断面形状はレンズ状で、SK110101 と同一の埋土をもつ。

SK110103 の平面形態は崩れた円形で、南北検出長 1.14m、東西検出長 0.52m、深さ 0.13m。断面形状は弧状で、小礫が混じる黒褐色土を埋土にもつ。

いずれも寺院廃絶後の土坑と考えられる。

#### ⑥ 小穴

小穴はいずれも未掘。P110101 の平面形態は円形で、南北 0.24m、東西 0.29m。P110102 の平面形態は円形で、南北 0.29m、東西 0.35m。P110103 の平面形態は楕円形で、南北検出長 0.32m、東西 0.33m、深さ 0.29m。

#### ⑦ 出土遺物

第 63 図 1～10 は中門基壇・南門基壇西側の堆積層から、11・12 は攪乱坑の埋土から出土した。

1 は須恵器杯蓋 (杯H蓋)。復元口径 11.5 cm。口縁部は丸く立ち上がり、口縁端部は鋭く収める。天井部外面に回転ヘラ削りを施す。2 は須恵器杯 (杯B)。外に張り出す高台をもつ。3 は須恵器皿。口縁端部を横に引き出し、丸く収める。4 は須恵器甕。器壁を薄く作る。胴部外面に縦方向の平行叩きを施した後、弱いカキ目を加える。内面に同心円の当て具痕を留める。5 は須恵器壺。胴部外面は緻密なカキ目を施し、内面は同心円の当て具痕の上に弱いナデを施す。

6 は土師器皿。口縁部は強く屈曲して立ち上がる。口縁部外面に煤が付着する。

7 は円筒埴輪。タガ部で復元径 20.0 cm。須恵質で、M 字状のタガを張り付ける。外面は縦方向に刷毛目を施し、内面は不定方向に弱いナデを施す。

8 は土壁。現存長 5.2 cm×4.2 cm、現存最大厚 3.8 cm。胎土は粗く、一部に藁スサが混じる。

9 は無段式丸瓦。凸面は側縁に直交する平行叩きを施す。

10は平瓦。凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、叩き目が残る。凹面はわずかに模骨痕を留める。

11は須恵器甕。頸部は真つすぐ立ち、口縁部に向けて緩やかに外反する。口縁部外面の中位に2条の沈線を廻らし、その下に1列の波状文を施す。胴部外面に平行叩きを施し、内面に同心円の当て具痕を留める。

12は土壁。現存長8.0cm×6.5cm、現存最大厚4.8cm。胎土は粗く、藁スサが多く混じり、鉄分が付着する。第64図1～15はSD110101検出面から出土した。

1・2は素弁十葉蓮華文軒丸瓦。1は瓦当外縁を薄く作り、蓮弁、間弁は肉厚である。瓦当表面に糸切り痕を薄く留める。中房は崩れた楕円形を呈し、蓮子は欠損する。2の中房蓮子は小ぶりで、蓮弁、間弁とともに肉厚である。3は素弁九葉蓮華文軒丸瓦。瓦当は厚く作り、外縁に凸線の鋸歯文を廻らせる。瓦当側面と裏面は弱いナデを施す。

4～7は無段式丸瓦。4は器壁を極めて薄く作り、凸面は横ナデを施す。5・6の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。6の凹面は糸切り痕を留める。7の凸面は強い横ナデを施す。

8は三重弧文軒平瓦。弧線は太く作り、凸面は縦ナデを施す。凹面の広端付近に横ナデを加える。

9～15は平瓦。9の凸面は側縁に斜交する平行叩きを施し、横ナデを加え、叩き目が線状に残る。凹面は縦ナデを施す。10の凸面は強い横ナデを施す。凹面は模骨痕を留める。11～13の凸面は横ナデを施す。12・13の凹面に模骨痕を留めるが、広端付近まで及ばない。14の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施す。15の凸面は側縁に斜交する縄叩きを施し、横ナデを加え、叩き目が薄く残る。凹面に模骨痕を留める。

第65・66図1～21はSD110101埋土から出土した。

1・2は須恵器皿。1の復元口径10.6cm、器高2.8cm。口縁部は内湾しながら立ち上がり、口縁端部を横に引き出して丸く収める。口縁部から底部にかけての内外面に1mmほどの厚みの煤が全面に付着する。2の高台の径が小さく、太い。底部内面に強い横ナデを施す。3は須恵器甕。胴部外面は縦方向の平行叩きを施し、胴部内面は当て具痕の上から強い横ナデを施す。

4は土師器甕。把手と胴部の接合部分の外面に粗い刷毛目を施す。

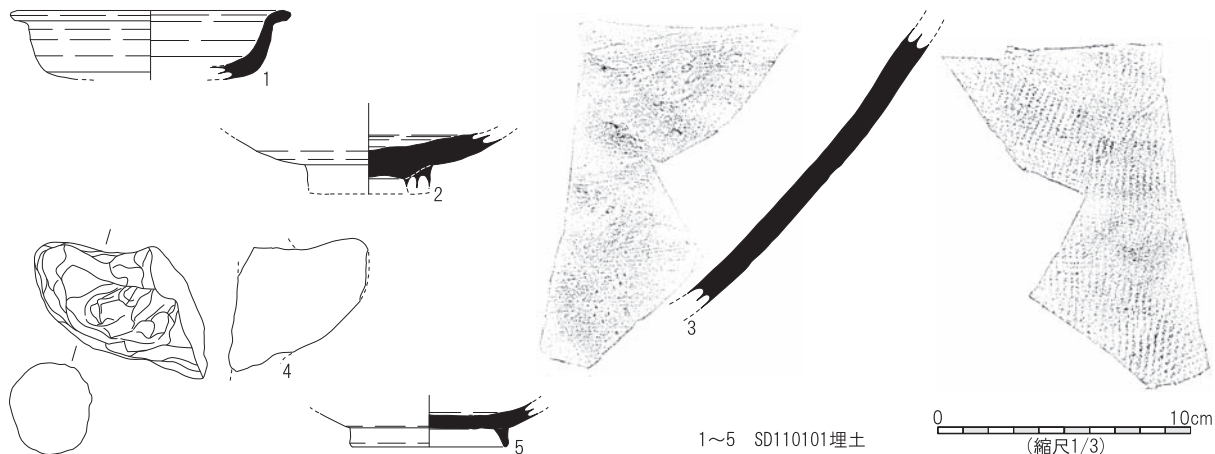
5は灰釉陶器皿。高台は薄く鋭い。底部内外面に強い横ナデを施す。

6は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。丸瓦部と瓦当との接合部分の凸面、凹面に強い横ナデを施す。

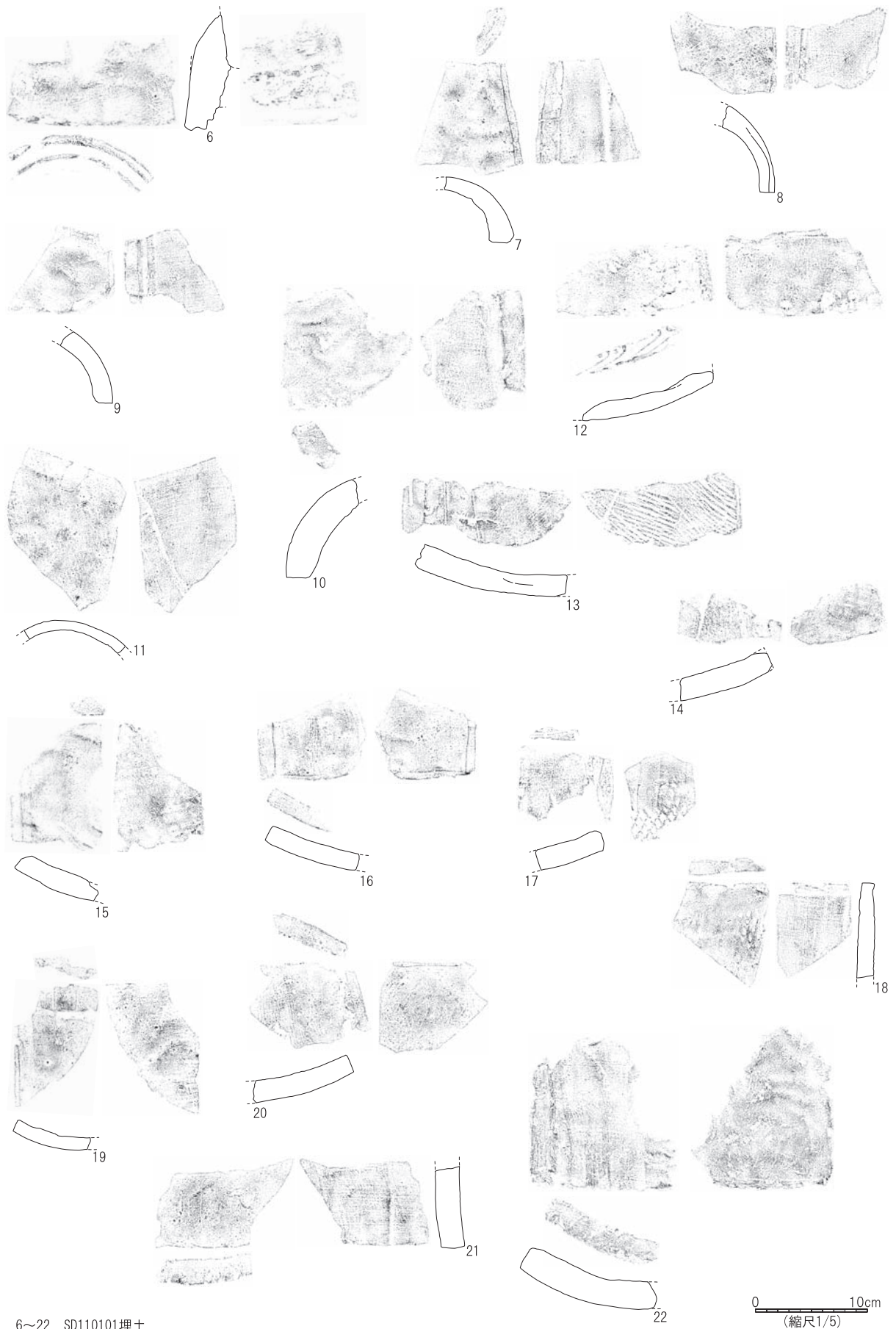
7～11は無段式丸瓦。7～10の凸面は強い横ナデを施す。7の凹面は模骨痕を留める。11の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、横ナデを加え、叩き目がわずかに残る。11の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。

12は偏行唐草文軒平瓦。平瓦部の凸面の広端部分の粘土の継ぎ足し部分にあたり、接合面が残る。凸面には側縁に沿って縄叩きを施し、横ナデを加える。

13～22は平瓦。13の凸面は側縁に直交、斜交する平行叩きを施し、叩き目がそのまま残る。凹面は糸切り痕を留め、部分的に縦ナデを施す。14・15の凸面は側縁に直交、斜交する正格子叩きの後、横ナデを施し、叩き

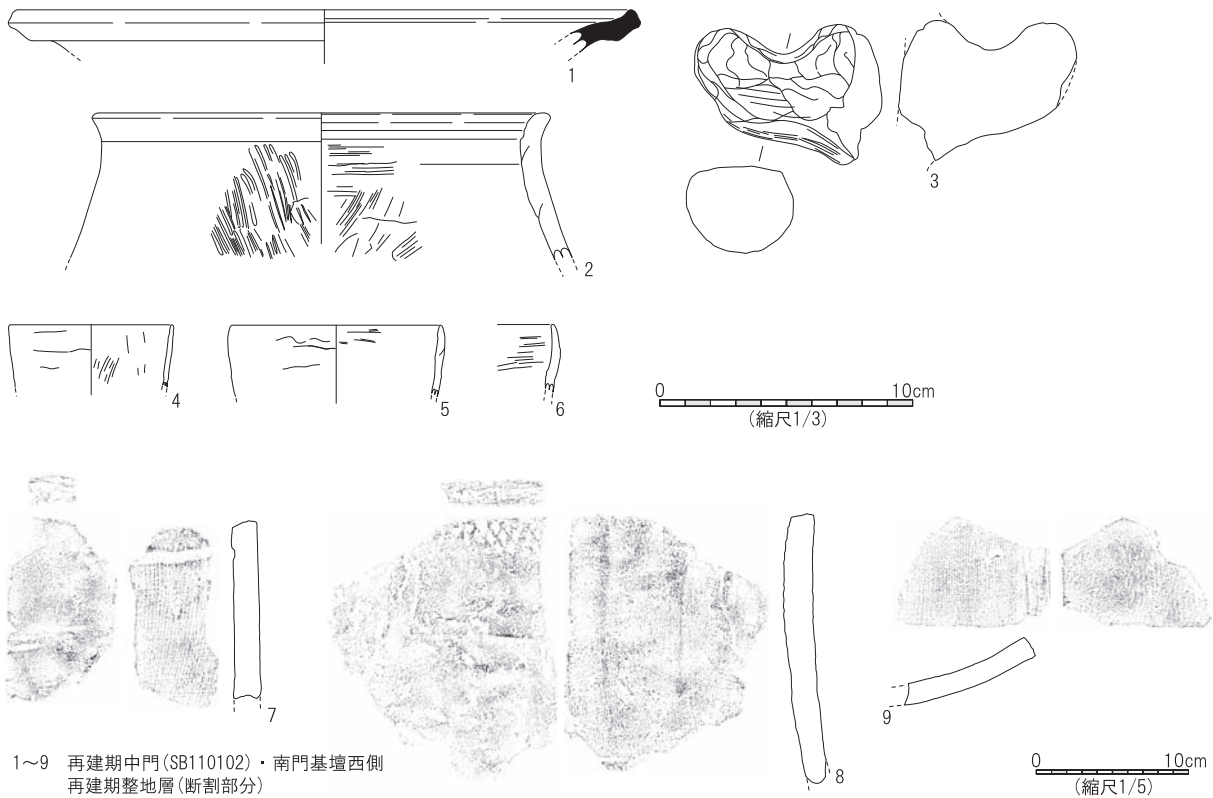


第65図 興道寺廃寺第11次調査1トレンチ出土遺物実測図3



6~22 SD110101埋土

第66図 興道寺廃寺第11次調査1トレンチ出土遺物実測図4



1～9 再建期中門(SB110102)・南門基壇西側  
再建期整地層(断割部分)

第67図 興道寺廃寺第11次調査1トレンチ出土遺物実測図5

目が潰れる。14・15の凹面は縦ナデを施す。16の凸面は強い横ナデを施し、凹面は縦ナデを施す。17の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、横ナデとともに縦ナデを加え、広端付近に叩き目が残る。18の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、強い横ナデを加える。凹面は模骨痕を留める。19の凸面は強い横ナデを施し、狭端部分にわずかに斜格子叩きの痕跡を留める。凹面は模骨痕を留め、一部、縦ナデを施す。20・21の凸面は強い横ナデを施す。21の凹面は模骨痕を留める。22の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施し、凹面に模骨痕を残す。

第67図1～9は中門基壇・南門基壇西側の再建期整地層の断割部分から出土した。

1は須恵器甕。復元口径24.4cm。口縁端部は肥厚し、面をもつ。

2・3は土師器甕。2の復元口径17.9cm。口縁部は短く外反して立ち上がり、口縁端部を丸く収める。胴部はあまり張らず、外面に縦方向に刷毛目を施し、口縁部から頸部内面にかけての内面に強い横ナデを、胴部内面に斜め方向の削りを施す。3は把手と胴部との接合面から把手側面にかけて横方向に刷毛目を施す。

4～6は製塩土器。4・5の復元口径は6.3cm、8.2cm。いずれも器壁は2mmほどと薄く、口径は7cm前後に復元できるなど小型品で、外面はナデによって成形する。4は口縁部内面に斜め方向の細い刷毛目を施し、5の口縁部外面に1条の粘土紐積み上げ痕をわずかに留める。

7は無段式丸瓦。凸面は横ナデを施す。

8・9は平瓦。8の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施し、横ナデを加え、狭端付近に叩き目を残す。9の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、横ナデを加え、叩き目が薄く残る。8・9の凹面は模骨痕を留める。

## F. 第12次調査5トレンチの調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.8～24.95mである。

表土の耕作土となる暗褐色土(層厚0.2～0.3m)下、標高24.6～24.7mで地山面となる黄褐色砂質土層、黄褐色粘土層の上面に至る。

## ② 検出遺構の概要

地山面で土坑2基（SK120501・SK120502）、小穴4基（P120501～P120504）を検出した。全体的に耕作攪乱が及んでいる。

## ③ 土坑

SK120501の平面形態は崩れた長楕円形で、南北検出長0.81m、東西検出長0.44m、深さ0.41m。断面形状は尖底状で、黒色土、黒褐色土、黄褐色砂質土、黄褐色粘土を埋土にもつ。

SK120502の平面形態は円形で、南北検出長0.53m、東西検出長0.67m、深さ0.05m。断面形状は箱形で、中心が一部深くなる。黒褐色土を埋土にもつ。

## ④ 小穴

P120501の平面形態は楕円形で、南北0.33m、東西0.42m、深さ0.25m。P120502の平面形態は崩れた円形で、南北0.36m、東西0.33m、深さ0.10m。P120503の平面形態は楕円形で、南北0.42m、東西0.35m、深さ0.06m。P120504の平面形態は楕円形で、南北0.40m、東西0.43m、深さ0.08m。

## 第4項 講堂基壇の調査

### A. 講堂基壇の調査概要

第1期調査において講堂基壇の所在は不明であり、『2007年報告』では第10次調査9トレンチ付近にその所在を想定した。

第9次調査以後、金堂基壇およびその周辺での調査が進み、第11次調査5トレンチで2時期の金堂基壇が南北に重複して位置することが判明したが、このトレンチの北への拡張部分で講堂基壇と考えられる基壇の南辺を検出し、追って調査を行った第11次調査13トレンチにおいてはその東辺と西辺を検出したことで、再建期金堂基壇のすぐ北側に近接して講堂基壇が位置することが明らかとなった。興道寺廃寺調査会議の現地視察において、金堂基壇の北側に地表面の微地形が変化し、基壇状の微高地が現存することが学識者に指摘されたことも講堂基壇検出の伏線となっている。

ただし、確認された基壇は金堂基壇に近接しすぎており、その時期も不明であるという課題が浮上したことから、講堂基壇南辺の位置を確認するために第12次調査7トレンチ、同様に北辺の位置を確認するために第12次調査8トレンチを設定して調査を行ったところ、それぞれの基壇縁辺を検出し、目的どおりの成果を得た一方で、基壇の時期については確認ができなかった。平成22年9月に開催した歴史フォーラム「ここまで分かった！興道寺廃寺」において調査担当者が、第12次調査7トレンチにおける講堂基壇南辺および整地面の断割による土層観察所見によって再建期金堂基壇の整地面の上に講堂基壇が位置することから確認されて基壇は再建期に伴う旨の報告を行ったが、これについては学識者からさらなる確認調査が求められた。このため、第13次調査2トレンチを設定して基壇南西隅部の調査を行ったところ、基壇西辺および整地面の断割部分で上下に位置する2時期の基壇西辺を検出し、創建期講堂基壇南側の整地面、再建期金堂基壇北側の整地面、再建期講堂基壇南側の整地面が下から順に分布する状況を検出した。

### B. 第11次調査13トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.2～24.3mである。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.1～0.3m）下、トレンチの東端では標高24.1m付近で地山面となる黄褐色土の上面に至る。一方、トレンチの中央から西にかけては標高23.9～24.1mで講堂基壇の検出面となる暗褐色土層の上面に、トレンチ西端では標高23.7m付近で地山面に至る。地山面は東から西に向かって傾斜し、0.4mほどの高低差がある。表土から無段式丸瓦1点、平瓦1点、瓦小片6点が破片で出土。

## ② 検出遺構の概要

表土下で創建期講堂基壇SB111301の積み土と東辺、溝(SD111301)を伴う掘込地業を検出した。なお、トレンチの西端は耕作攪乱によって基壇の西辺が削平を受けており、この部分から無段式丸瓦1点、平瓦2点、瓦小片2点が出土した。

## ③ 基壇遺構

〈創建期講堂基壇SB111301〉

SB111301は基壇積み土と東辺、西辺を平面、土層断面で検出した。基壇面の標高は23.9～24.2m、基壇積み土は暗褐色土からなり、ほぼ水平に一括盛土するが、トレンチの西端付近では、暗褐色土、黒褐色土を小ブロック単位で水平に盛土する。いずれも創建期金堂基壇に見られるような版築は認められない。表土直下に基壇積み土が分布する状況から、一定の基壇削平がうかがえる。

SB111301東辺に伴うと考えられる掘込地業を検出した。検出面の標高は24.1m付近、検出範囲は東西2.28mで、基壇東辺から西に向けて地山面を0.1mほど掘削し、そのまま基壇土を盛土する。掘込地業の東端は一段深く掘削し、基壇を盛土するため、基壇東辺に沿った溝SD111301を造り出す。

## ④ 溝

掘込地業として地山面に掘り込まれた一部が溝SD111301となり、基壇東辺の雨落ち溝をなす。SD111301は東西幅0.62m、最深0.20m、断面形状は弧状で、黒褐色土、暗褐色土を埋土にもつ。

## C. 第11次調査5トレンチ(北側拡張部)の調査

### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は24.35～24.45mである。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚0.3～0.35m）下、トレンチ北側拡張部では標高24.05m付近で創建期講堂基壇の検出面に至るとともに、黒褐色土（層厚0.1m）からなる堆積層が分布し、標高24.0～24.05m付近で黒褐色土からなる再建期講堂基壇南側の整地面、さらに標高23.95～24.0m付近で暗褐色土からなる再建期金堂基壇北側の整地面に至る。

### ② 検出遺構の概要

表土および堆積層下で創建期講堂基壇SB110503南辺を検出するとともに、基壇南辺に被せるように再建期金堂基壇北側の整地面、さらにその上で再建期講堂基壇南側の整地面を検出した。

### ③ 建物基壇および整地面

〈創建期講堂基壇SB110503〉

SB110503は基壇南辺を平面、土層断面で検出した。基壇面の標高は24.05m、基壇積み土は黒褐色土からなり、大ブロック単位で盛土する。基壇積み土の断割部分から瓦小片3点が出土。

基壇南辺の裾部に被せるように標高23.95～24.0m付近で暗褐色土からなる再建期金堂基壇北側の整地面が

薄く分布し、その上位には標高 24.0～24.05m に微細遺物が混じる黒褐色土からなる再建期講堂基壇南側の整地面が薄く分布する。

#### D. 第 12 次調査 7 トレンチの調査

##### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 24.3～24.55m である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.2～0.25m）下、トレンチ北端では標高 24.4m 前後で再建期講堂基壇南辺の検出面に至り、トレンチ中央から南側においては黒褐色土、暗褐色土（層厚 0.15m）からなる堆積層が分布し、標高 24.15m 付近で黒褐色土からなる再建期講堂基壇に伴う整地面に至る。さらにトレンチ中央から南側では、その下に 23.95～24.05m 前後で暗褐色土からなる再建期金堂基壇に伴う整地面に至る。

トレンチ北端では、再建期講堂基壇積み土の下、標高 24.15m に創建期講堂基壇南辺の検出面があり、トレンチ中央から南側では標高 23.9～24.0m 付近で暗褐色土からなる創建期講堂基壇に伴う整地面となる。

表土から須恵器杯（杯 A）1 点、甕 1 点、鉄釘 3 点、単弁八葉蓮華文軒丸瓦 1 点、無段式丸瓦 30 点、平瓦 52 点、瓦小片 139 点が破片で出土した。

##### ② 検出遺構の概要

表土および堆積層下で再建期講堂基壇 SB120702 南辺および整地面を検出するとともに、この基壇および整地面の下では上位から順に再建期金堂基壇に伴う整地面、創建期講堂基壇 SB120701 および整地面を検出した。

##### ③ 建物基壇および整地面

###### <創建期講堂基壇 SB120701>

SB120701 は基壇積み土と南辺を土層断面で検出した。基壇面の標高は 24.15m、基壇積み土は黒褐色土からなり、ほぼ水平に盛土する。トレンチ東端では基壇積み土の基底部の黒褐色土が整地面を覆って南側に張り出している。この基壇に伴う整地面として標高 23.9～24.0m に創建期の金堂基壇に伴うと考えられる瓦片が多く混じる暗褐色土層の上面が分布し、SB120701 を載せている。

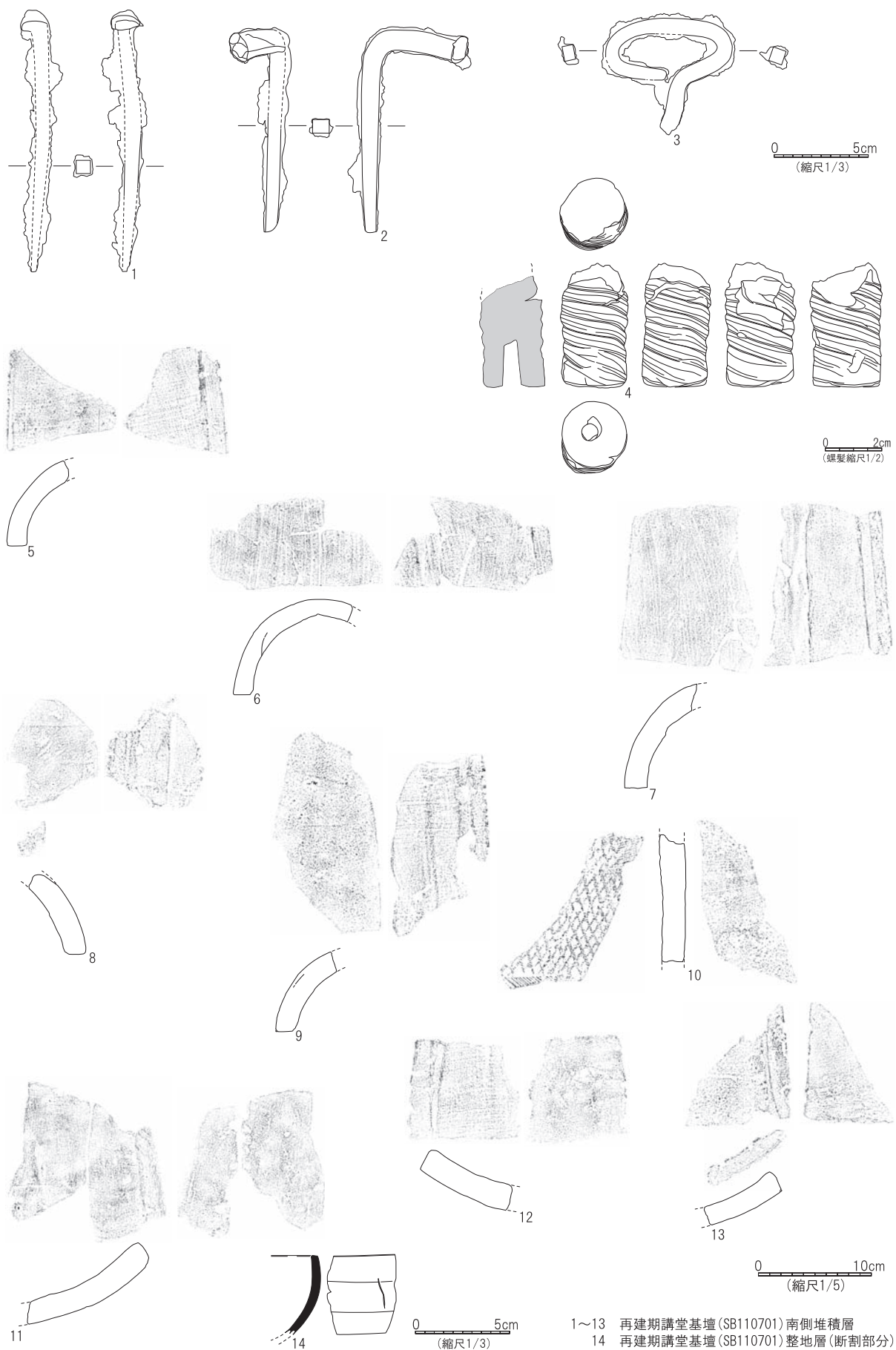
なお、トレンチ西端の断割部分では創建期講堂基壇に伴う整地面の上に南側から延びてくる再建期金堂基壇北側の暗褐色土からなる整地土が薄く載る。この整地面の標高は 23.95～24.05m 前後である。

トレンチの断割部分、SB120701 に伴う整地層および再建期金堂基壇北側の整地層にあたる暗褐色土層から須恵器碗もしくは鉄鉢 1 点、須恵器小片 1 点、土師器甕 1 点、無段式丸瓦 7 点、有段式丸瓦 1 点、平瓦 18 点、瓦小片 28 点が破片で出土した（第 68 図 14）。

###### <再建期講堂基壇 SB120702>

SB120702 は SB120701 の上に位置し、基壇積み土と南辺を平面、土層断面で検出した。基壇面の標高は 24.4 m、基壇積み土は黒褐色土からなり、水平に盛土する。基壇南辺のラインは不定形で、外装も見られない。SB120702 南側の黒褐色土、暗褐色土からなる堆積層から須恵器杯（杯 H）底部もしくは杯蓋（杯 H 蓋）天井部 1 点、甕 4 点、土師器甕 1 点、皿 2 点、土壁 3 点、鉄釘 2 点、環状把手鉄製品 1 点、素弁十葉蓮華文軒丸瓦 1 点、無段式丸瓦 122 点、有段式丸瓦 1 点、三重弧文軒平瓦 2 点、扁行唐草文軒平瓦 1 点、平瓦 154 点、瓦小片 257 点が破片で出土した（第 68 図 1～13）。出土状況は整地面から浮いており、また土器・瓦ともに細片化して接合関係に乏しい。出土地点としては再建期の金堂基壇と創建期・再建期講堂基壇とに挟まれた箇所、いずれの基壇建物に伴うものかはっきりしない。

この基壇に伴う整地面として標高 24.15m に黒褐色土層の上面が分布し、SB120702 を載せている。



1~13 再建期講堂基壇(SB110701)南側堆積層  
 14 再建期講堂基壇(SB110701)整地層(断割部分)

第68図 興道寺廢寺第12次調査7トレンチ出土遺物実測図



#### ④ 出土遺物

第 68 図 1～13 は再建期金堂基壇北側の堆積層、14 は再建期講堂基壇南側の整地層の断割部分から出土した。

1・2 は鉄釘。1 は現存長 13.8 cm。折釘で、基部の断面は 0.6 cm×0.7 cm で、ほぼ長方形を呈する。2 は現存長 10.8 cm。折釘で、基部が U 字状に強く屈曲する。基部の断面は 0.7 cm×0.9 cm で、長方形を呈する。3 は環状把手を付す鉄製品。現存長 6.0 cm。? 字状の環状をもち、基部の断面は左側が 0.6 cm×0.7 cm で長方形を呈し、左側が 0.7 cm×0.7 cm で正方形をなす。扉の引き手の金具か。

4 は塑像螺髪。底面径 23mm。底面は径 6mm の孔を穿つ。砲弾形を呈し、型作りである。螺線は幅が広く、底面から右巻きである。採色の痕跡は見られない。

5～9 は無段式丸瓦。6・7 は有段式丸瓦の可能性もある。5～7 の凸面は横ナデに加えて縦ナデを施すが、6・7 の凸面の縦ナデは強い。6・7 の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。8・9 の凸面は横ナデを施す。8・9 の凹面に模骨痕を留める。

10～13 は平瓦。10 の凸面は側縁に沿って斜格子叩きを施す。11 の凸面は縦ナデを施す。12・13 の凸面は横ナデを施す。

14 は須恵器椀もしくは鉄鉢。口縁部は内湾し、口縁端部は平坦をなす。口縁部の内外面に横ナデを施す。

### E. 第 13 次調査 2 トレンチの調査

#### ① 基本層序

調査地は畑地で、地表面の標高は 24.3～24.35m である。

表土の耕作土となる黒褐色土（層厚 0.1～0.3m）下、トレンチ北端では標高 24.2m 前後で再建期講堂基壇南西隅部の検出面に至り、トレンチの南側にかけては黒褐色土（層厚 0.1m）からなる堆積層が分布し、標高 23.95～24.05m 付近で黒褐色土からなる再建期講堂基壇に伴う整地面に至る。表土から須恵器皿 1 点、甕 1 点、須恵器小片 1 点、土師器小片 1 点、塑像螺髪 3 点、無段式丸瓦 21 点、平瓦 23 点、瓦小片 66 点が破片で出土（第 71 図 29～31）。

トレンチ北端では、再建期講堂基壇積み土の下、標高 24.15m に創建期講堂基壇の南辺、西辺の検出面があり、トレンチ南側にかけては標高 23.8～23.95m 付近で暗褐色土からなる創建期講堂基壇に伴う整地面に至る。

#### ② 検出遺構の概要

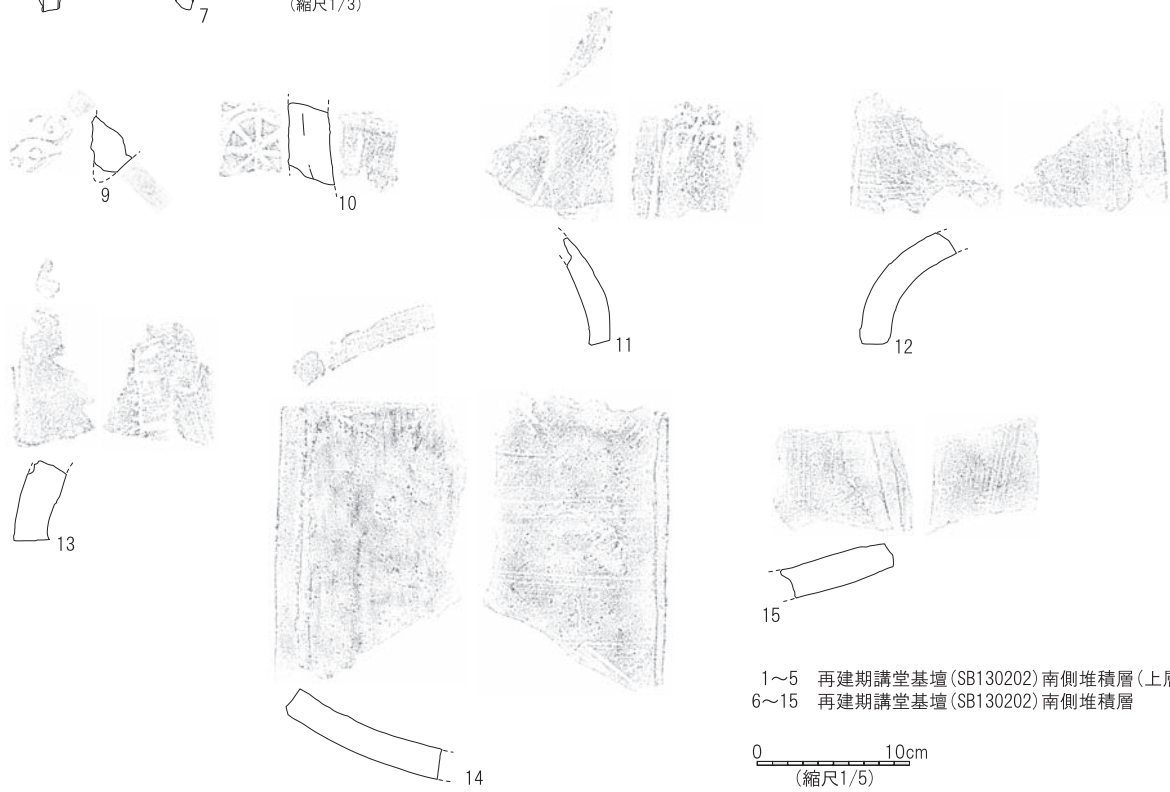
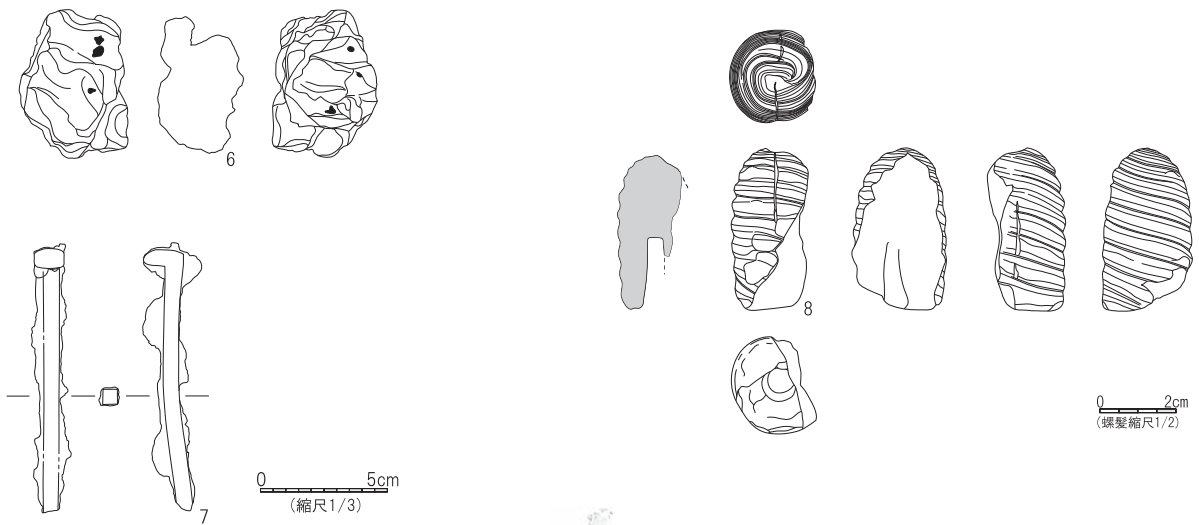
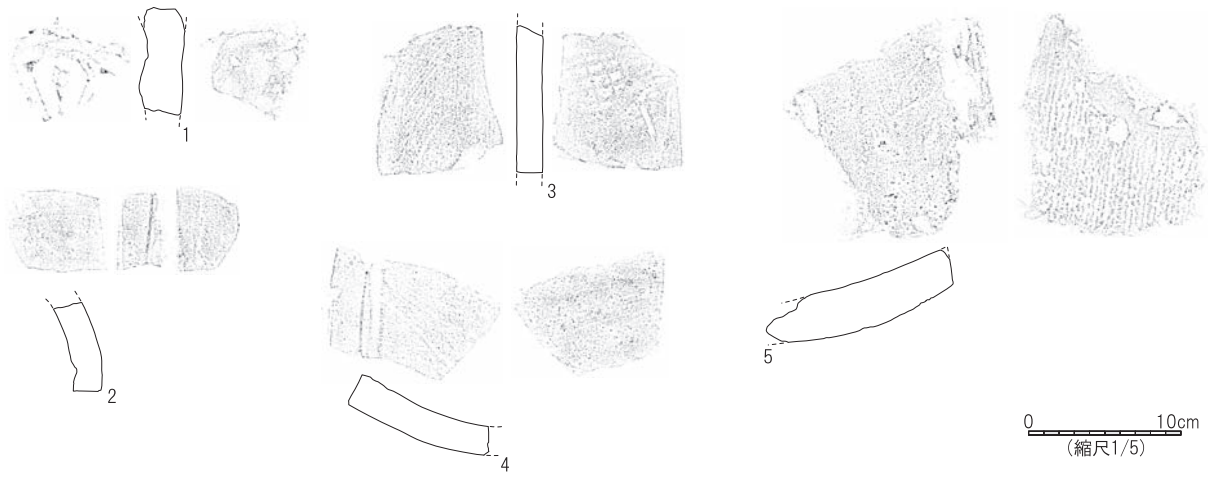
表土および堆積層下で再建期講堂基壇 SB130202 南西隅部および整地面を検出するとともに、この基壇および整地面下で創建期講堂基壇 SB130201 および整地面を検出した。

#### ③ 建物基壇および整地面

〈創建期講堂基壇 SB130201〉

SB120701 は SB130702 の下層にあり、基壇積み土と南辺、西辺を土層断面で検出した。基壇面の標高は 24.2 m、基壇積み土は黒褐色土からなり、大ブロック単位でほぼ水平に盛土する。トレンチ東端では基壇積み土の基底部の黒褐色土が整地面を覆って南側に張り出している。基壇西辺の裾部（基底部）には一辺 0.2m ほどの小ぶりの花崗岩の自然礫 1 石が整地面に据えられている。外装の石積みの基底石にあたるものかははっきりしない。

この基壇に伴う整地面として標高 23.8～23.95m に創建期の金堂基壇に伴うと考えられる瓦片が混じる暗褐色土層の上面が分布し、SB130201 を載せている。この暗褐色土層からなる整地層の断割部分から SB130201 南側の暗褐色土整地層から素弁十葉蓮華文軒丸瓦 1 点、無段式丸瓦 18 点、有段式丸瓦 1 点、平瓦 11 点、瓦小片 41 点が破片で出土した（第 70 図 27・28）。第 12 次調査 7 トレンチで見られたような、再建期金堂基壇に伴う整地面の北側への伸張はこのトレンチでは見られない。

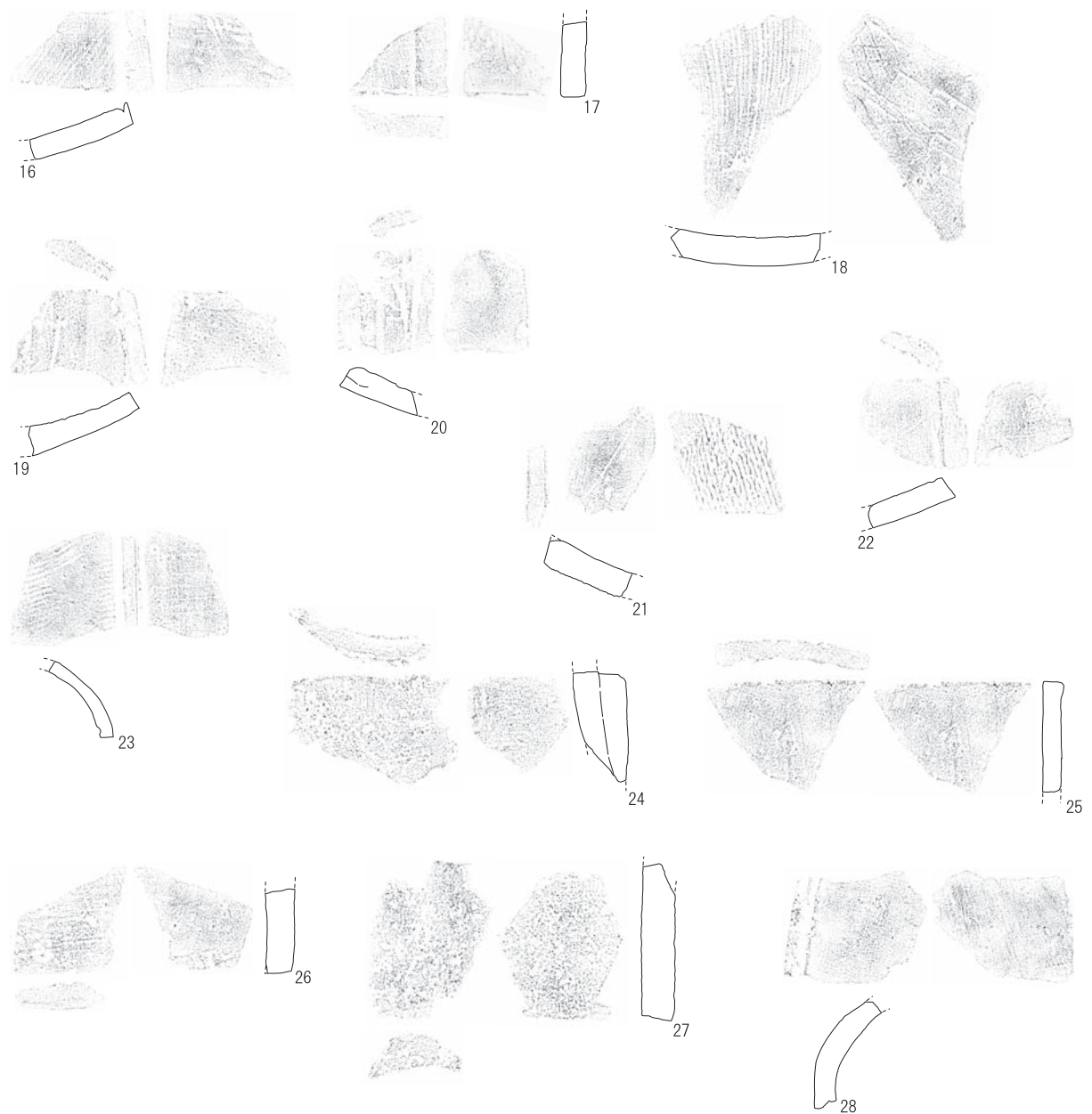


1~5 再建期講堂基壇(SB130202)南側堆積層(上層)  
6~15 再建期講堂基壇(SB130202)南側堆積層

第69図 興道寺廃寺第13次調査2トレンチ出土遺物実測図1

<再建期講堂基壇 SB130202>

SB130202 は SB130201 の上に位置し、基壇積み土と南西隅部を平面、土層断面で検出した。基壇面の標高は 24.4 m、基壇積み土は黒褐色土からなり、水平に盛土する。基壇外装は見られない。基壇の西辺は創建期の基壇西辺を埋め殺すように盛土で造る。SB130202 の南側、西側の黒褐色土からなる堆積層の上層から須恵器皿 1 点、壺 1 点、土師器皿 3 点、土壁 1 点、単弁八葉蓮華文軒平瓦 1 点、無段式丸瓦 54 点、平瓦 59 点、瓦小片 144 点が破片で出土し（第 69 図 1～5）、下層から須恵器小片 1 点、土師器小片 4 点、鉄塊 1 点、鉄釘 1 点、塑像螺髪 1 点、扁行唐草文軒平瓦 1 点、鬼板瓦もしくは鴟尾 1 点、無段式丸瓦 55 点、平瓦 117 点、瓦小片 95 点が破片で出土した（第 69 図 6～22）。出土状況は整地面から浮いており、また土器・瓦ともに細片化して接合関係に乏しい。



16～22 再建期講堂基壇 (SB130202) 南側堆積層  
 23～26 再建期講堂基壇 (SB130202) 南側黒褐色土整地層  
 27・28 創建期講堂基壇 (SB130201) 南側暗褐色土整地層

0 10cm  
 (縮尺1/5)

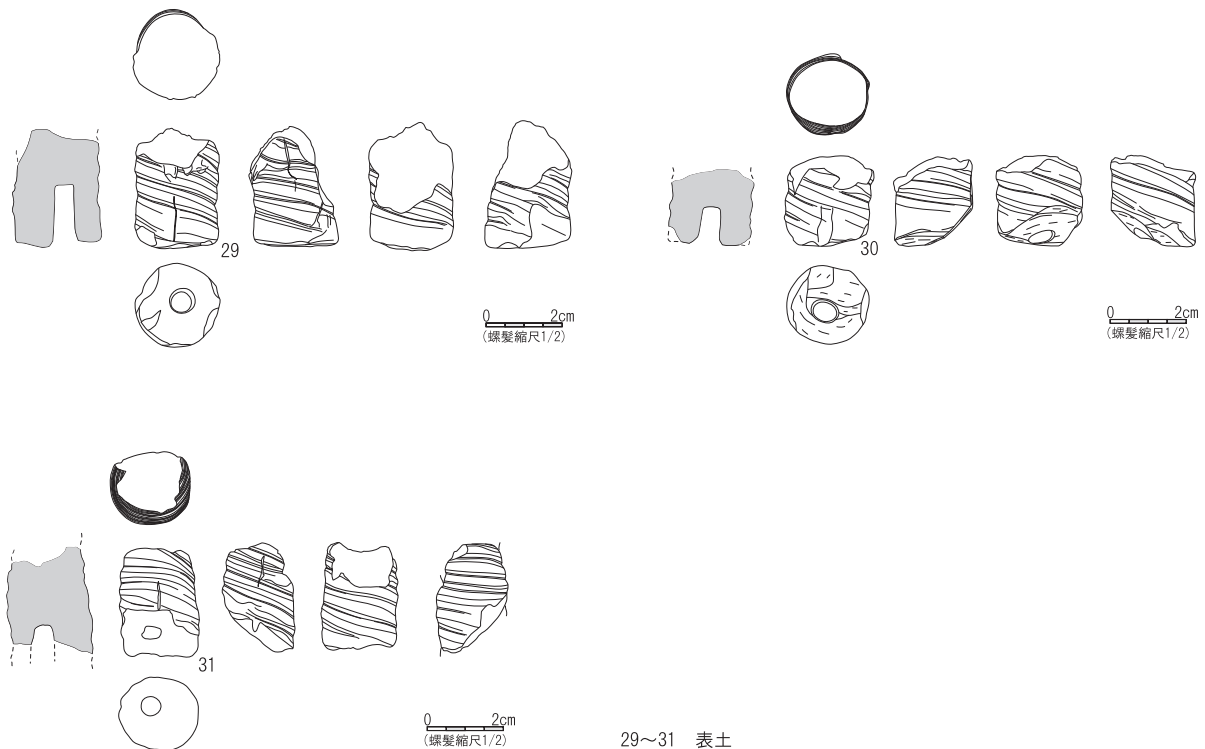
第 70 図 興道寺廃寺第 13 次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 2

この基壇に伴う整地面として標高 23.95～24.05m に黒褐色土層の上面が分布し、SB120702 を載せている。この整地面自体は創建期金堂基壇の西辺裾部を埋め殺すように水平に盛土する。この整地土の断割部分から、須恵器小片 1 点、無段式丸瓦 7 点、有段式丸瓦 1 点、平瓦 27 点、瓦小片 28 点が破片で出土した（第 70 図 23～26）。

④ 出土遺物

第 69 図 1～5 は SB130201 南側堆積層の上層、6～22 は SB130201 南側堆積層、第 70 図 23～26 は SB130201 南側の黒褐色土整地層、27・28 は SB130201 南側の暗褐色土整地層、第 71 図 29～31 は表土から出土した。

- 1 は単弁八葉蓮華文軒丸瓦。摩耗により遺存状況が悪い。
- 2 は無段式丸瓦。2 の凸面は横ナデを施し、部分的に指頭圧痕を留める。
- 3～5 は平瓦。3 の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、横ナデを加える。4 の凸面は横ナデを施す。5 の凸面は側縁に沿って縄叩きを施し、部分的に横ナデを加える。
- 6 は鉄滓。現存長 6.0 cm×4.1 cm、現存最大厚 3.2 cm。7 は鉄釘。7 は現存長 10.4 cm。折釘で、基部の断面は 0.4 cm×0.4 cm で、長方形を呈する。
- 8 は塑像螺髪。砲弾形を呈し、型作りである。螺線は幅が広く、底面から右巻き。底面は孔を穿ち、2 箇所の場合合わせ痕が残る。
- 9 は扁行唐草文軒平瓦。瓦当下端の断面は鋭角となる。
- 10 は鬼板瓦もしくは鴟尾。外面には径 30mm ほどの蓮華文の型押しがあり、内面は強い横ナデを施す。
- 11～13 は無段式丸瓦。11 の凸面は平行叩きを施し、強い横ナデを加え、叩き目が薄く残る。12・13 の凸面は強い横ナデを施す。12 の凹面は部分的に縦ナデを施す。13 の凹面は布綴じ合わせ痕を留める。
- 14～22 は平瓦。14 の凸面は側縁の斜交した平行叩きを施し、強い横ナデを加え、叩き目が薄く残る。凹面は強い縦ナデを施す。15 の凸面は強い縦ナデを施し、凹面は側縁に幅の広い削りを施した後、さらに強い縦ナデを施す。16・17 の凸面は側縁に沿って正格子叩きを施し、強い横ナデを加える。17 の凹面は模骨痕を留める。



29～31 表土

第 71 図 興道寺廃寺第 13 次調査 2 トレンチ出土遺物実測図 3